
IS _ロスト_ナンパリング

imomushi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS —ロスト—ナンバリング

【Zコード】

Z5733Z

【作者名】

imomushie

【あらすじ】

ISの誕生から、偽者の主人公が生み落とされる。彼はISを操縦できることを嫌い、ISの世の中を病んでいるように感じていた。そんな中でとある理由から、IS学園に入らなければならぬ状況に陥る。彼の中で、望まない学園生活が始まった。

1 - 0 - 3 年前（前書き）

掲載されている皆様の作品を読ませて頂いて、投稿してみたくなりました。初めての投稿になりますが、よろしくお願ひします。この作品は独自の解釈があり、ISの概念に対してもアンチテーゼの傾向があります。また、読まれる方によつては、気分を害される要素が含まれる可能性があります。読まない場合はお戻りいただけますと助かりますので、どうぞ宜しくお願ひ致します。

- 0 /

爆撃音はいつまでも続いていた。中東の昼間は暑いが、僕がいるブリーフィングルームはとてもひんやりとしている。

以上がテロ組織の中核人物に当たる。貴君らの任務はターゲットの速やかな排除だ。活動時間30分以内で、できるだけ被弾を避けて帰還しろ

僕を含めて言われた3人のうち1人が擬似トレーラーの電動シャッターの扉を開くと、ざらついた熱風の感触が頬を撫でつけ始める。砂漠の砂が当たって、ここがアメリカじゃないと実感した。

「サーフォ、貴方は暴走しやすいから最後尾で付いてきなさい」

何時ものうるさい女が語氣を強めて喋つてくる。いつも、行動を全然自由にさせてくれないこいつが、僕は大嫌いだ。いつも命令無視とか言つていじめてくる。

「何で? だって、これから悪い奴の頭を消し飛ばしに行くんでしょ」

女は露骨に嫌そうな顔をしていて、いつももう一人の女は対照的に哀しい顔をしていた。もう一人の僕を叱らないあんたは、なんでいつも泣きそうな顔で僕を見るの?

ホームでやってるゲームで、僕はいつも高得点を叩き出す。そうすると、周りの大人はみんなうれしそうな顔をするんだ。僕は褒めら

れたようで、それがうれしかった。だったら実戦でも、もちろん一番乗りで高得点を叩き出したい。

「いつものゲームと同じでしょ。獲物は早い者勝ち、邪魔する奴は脆い雑魚敵じゃない」

僕はIRSを直ぐに展開させると、レーダーで設定された目標へ向かって飛び出す。体に掛かる重みが気持ち良い。

ヒュンッ！

音を立てて通り過ぎ去る砲弾を田で追いながら、自分の口の端が吊り上るのがわかる。ぞくぞくする。そこで、ガシリと何か力強く肩を捕まれた。

反動で体が反り返り、両足が振り子のようにあがる。僕が後ろを向くとフルフェイスマスクのIRSを着た女が肩を掴んでいた。そして僕の首を掴むと、いきなり腕を引いて自分のヘルメットを僕のヘルメットに押しつける。

『良いか欠陥モルモット、良く聞け。リーダーは私だ。お前はペナルティ加算が溜まつていて、これ以上勝手な行動するなら作戦に支障が出かねない。次に違反を犯したら私がお前を強制的にラボへ戻してやる。行くぞ、ナイザ』

バイザー越しに女のぐぐもつた声が聞こえた。声に怒りを感じる。僕が空中で静止している間に女達は2人で共に先へ飛んでいく。

……ふざけるな。

お前が僕をあの場所に戻す権利なんてない。そりゃ、お前なんか邪魔だ。お前がいなければ、僕はもっと自由に動けるんだよ。だいたい、僕より弱いくせに歳が上なだけでうるさいんだよ。

やつちやおつか。

やつちやおつか。

そうだよ。

そうしきみ。

そうしなきや。

僕は無言のまま銃口を女に向ける。ロック表示がオレンジから赤に変わった。エラー音? そんなの関係ないよ。

「バイバイ、邪魔ばっかりの嫌な奴。大嫌いだつたよ」

『おま

枯れ木をぼつきりと真つ二つに折るような感じかな。僕は通信音声越しで女が何か言い終わる前に、高出力レーザーライフルの銃口から綺麗な光の束を発射した。

| 1 /

春は何時も穏やかだが、始まりである為に煩いところもある。現に目の前の教室がそんな状態だが、先に入つて行った教師の一喝したあとで途端にシンツと静まった。まるで封建主義の王が喝会の間へ入場したような静けさだ。

「いいぞ、入つてこい」

「はい」

その掛け声を聞いて、俺は適当に教室のドアを開けていく。入つてみると、当たり前だが女子ばかりで。やはり、IS関係はどこに行つてもこんな感じか。おや、世界初の男性IS操縦者も一緒なんだな。確かに名前は織斑一夏だつたか。しかつし、まー。女みてーな名前だな。同じクラスになるなんてのは、考えてなかつた。周りを見渡すと、当たり前だが皆一様にざわついている。

「皆も入学3日目になるが、2日遅れの新入生だ。それでは自己紹介をしろ」

「市隈喜久です」

皆一様に俺の方を見る。派手な髪形だの、目の色のことや背が低いだと適当に言つているのが聞こえた。どうやら好みかどうかを話しあっているらしい。そんなふつに見回せば担任の織斑先生は頭の額を手で揉んでいた。

「昨日の男どもはみんなこうなのか。自己紹介はそれだけか？みんな見ての通りだが、市隈の情報は昨日まで秘匿されていてな。私も今日になって知った次第だ。何か質問がある者はいるか？」

数人から手が上がる。適当に指された女子が立ち上がった。

「男性なのにIISが起動した理由はなんですか！？」

此処に来るまでに、道中で何回も質問された内容だ。途中まで数えていたが、何回目なのかもう思い出せない。だるくてしうがない。

「触つたら動いたんだ。それだけだよ」

本当はそんな曖昧な理由と違うが、それを言つわけにはいかない。

「趣味は！？」

「読書と寝る」と

「何で1日遅れて入学になつたの！？」

「書類の申請と家庭内のごたごたで。織斑先生、もう良いですか？」

いい加減うづつくなってきたので、横にいる教師2人に声をかける。すると、織斑先生は手を2度ほど手を叩いて、質問の終了を告げる合図を送り生徒を静ませた。

「複雑な家庭事情があるので、余り本人を困らせる質問はないように。市隈、席は一番奥を用意したのでそこに座れ。あと、ガキではないのだから猫背はやめろ」

めんどくさいが、反抗しても意味がない。それに、品性方向を謳つてこるような学園では当たり前なのかもしれない。ああ、反りが合

いそうにない。仕方がないとはいって、どうして俺が一番嫌う場所へ放り込んでくれたのかね、あの姉さんは。

「どうした？早くしろ、先の予定がつかえる」「ああ、はい」

ふと、考え込んでいたらしく、織斑先生に促されて席へ向かう。指定された席に着くと、興味津々と言つた感じで横の女子が話し掛けってきた。ショーカットの似合ひ活発そうな容姿だ。

「これから宜しくね。私は貝田 啓子つて言つの」「ああ、宜しく。それにしても、やつぱりこには女子高だな。でも、教師は男子校みたいなのは」

貝田は振つた教師の話題に嬉しそうにする。そして勢い良く話し始めた。

「織斑先生かっこ良いよね！！私も憧れてるの」「ふーん。人気なんだな」

流石はブリュンヒルデだなんて呼ばれているだけあるのだろう。内戦地に派遣されて行つたら、さぞ一方的な戦果を上げるに違いない。

「それにね、前にいる織斑君て織斑先生の弟なんだって！」「へえ、両方ともすごいんだな」

俺はノートと分厚い電話帳みたいな教科書を鞄から取り出す。元々知識があるとはいって、今更ながら一から覚えようという気になれない代物だ。

前を向けば始まっている一間田の授業。えらい勢いで、詰め込み式

の授業がスタートする。授業と俺は水と油のように反応し、授業が進行するにつれてどんどん眠気が強くなつた。これが後、午前中に3時間か…。

気合を入れ、何とか眠気を堪えて午前中を耐え切る。しかし、休み時間は全部魂が抜けたように机へと突つ伏した。

———

「ちょっと、宜しくて？」

なんだ？この漫画から抜け出たような、ふざけた喋りかたしてるのは？

まどろみの中で、そう思いながら顔を上げると金髪の海外人が俺の方を見ていた。顔立ちが綺麗だが、お高く留まっているのが感じでわかる。昼休みだと言うのに、飯を抜いて話しあげても大丈夫なのか少し心配になつた。

ちなみに周りを見渡せば、皆昼食を取つてゐる。

「誰だ、あんた？」

「まあ、野蛮人に続いて貴方もですのー？このイギリスの国家代表候補生で学年主席のセシリニア＝オルコットを知らないとは無知も甚だしいですわね」

オルコットと名乗つた女子は、呆れた口調で両手を上げながら肩を竦める。前言撤回、この外人は一度地面に頭を打ち付けたほうがいい。そう思うと同時に反面、俺はすごく感心した。

日本語がペラペラだし、アクセントも上手い。こいつIIS乗りじやなくて、通訳の方が向いてんぢやないの？いや。ここには優秀者しか

入れない場所だから、これくらいは当たり前なのか。

「ふあ。悪いけど、ごたごたで左も右もわからんんだわ。それに、昨日は徹夜でもう倒れそつなんだよ。それより、あんたは放課後暇な人？」

「そんな訳ないでしょーー！ デートのお誘いならもう少し、気の効いた言い方をしなさいな。まあ、これでも忙しい身では

「ああ、デートの誘いじゃなし高圧的なのはタイプじゃないんだ。忙しいならいいや、お休み」

わざと言葉をぶつた切って会話を終了させた。俺は知り合ったのは何かの縁と案内をお願いできるか聞いたが、本人は忙しいらしい。プラスにならない会話なら、迷わず睡眠をとる。俺は頭を下げる、再び眠りにつこうと瞼を閉じた。

頭上では「くぬぬ」とか言う声から、オルコットの顔が真っ赤になつているのが連想できる。

「昨日の男といい、今日の貴方といいーーまだ話しあは終わってません、起きなさいーー！」

「痛えーー何すんだーー！」

教室中にスパンといい音が鳴り、続いて俺の怒鳴り声が続く。こいつ、いきなり人の頭を殴りやがった。周りの視線が痛くてしようがないが、この際気にしない。

「貴方が途中で話しあはるのが悪いのです。宜しくって？」

何が宜しくってだよ、決め台詞じゃないんだからさ。

「一つ聞いていい？」

「普段は貴方みたいな輩に答える口は持ち合わせていませんが、なんでしょう？」

「なぜにそんなに喧嘩腰？それともう一つ、あんた顔は良いけど性格、バスで男にもてなそうだな」

「な！な、なな！！」

「興奮すんなよ、事実だろ。それで話しの用件は何？」

オルコットの奴は一瞬で興奮が頂点に達したらしく、怒りで頬を染めているのがわかる。

「決闘ですか！！！」

「はあ？嫌なこと言われて、怒るのはわかるけどそれはやりすぎだろ。イギリスは紳士淑女の国なんだろ？」

「昨日は祖国を！今日は私自身が侮辱を言われるなんて！…野蛮人の國の男は皆最低ですわね！！」

昨日をとじつとは、残っているもう一人の男子の織斑一夏つて奴とも既に揉めたのか。

「で、その最低の野蛮人もう一人とは決闘になつたの？」

「何を言つているのです、当たり前でしょ。今度のクラス代表をかけて、決闘となりました。当然、貴方も受けるのでしうね？」

「え、俺はやだよ。面倒臭いし、メリットないし、何より疲れそうだし」

「貴方、決闘を逃げると言うのですか！？」

「そうだよ、だから寝させてくれ」

オルコットまるで信じられないといった顔をしている。そんなことはやってられないし、HSなんてものは出来る限り触れたくない。しかし、織斑一夏はこの阿呆の決闘を受け入れたらしい。こんな奴

に乗せられて、案外と単純思考型なのか。

「… そうですか、ならば戦わざる終えなによつて引きずり出して差し上げますわ」

「ふーん、精々頑張つて」

オルコットの阿呆は、やる気の欠片もない俺へと不適に笑い席から離れて行く。俺は再び目を閉じると、ぬるま湯に浸かる感覚で頭を腕の上に乗っける。まさか、このイギリス人が意外と頭の回る奴だとは、この時の俺は考えていなかった。

「私セシリア＝オルコットは、クラス代表に市隈 喜久を推薦いたしますわ」

「ほう、理由を言え」

授業の開講一番で織斑先生に対し、そんな発言が飛び出した。俺がまるで状況が掴めない中で、反芻したように織斑先生が理由を聞く。「昼間、彼とお話しをさせて頂いたのですが、是非出てみたいとおつしやたので」

そう言って、俺の方を見ると『やつてやつたわよ、だからひとつと引きずり出される』という視線を感じた。嬉しそうに口元が笑つてやがる。俺はしようがなく立ち上がり、前の教師2人の方を向く。

「今の発言は出鱈目です。俺は全くやる気は在りません」

「どうか。市隈に言ってなかつたが、クラス代表を決めるのに推薦されれば拒否権は認められん。悪いが出てもううぞ」

はあ？ 何だよその理不尽な仕組みは。俺はそこで今日初めてイラッとした感じ、反論してやろうと少し前屈みになつた。オルコットに反論しても意味が無いので、織斑姉のほうを向く。俺の視線で感じたのか、織斑姉のほうも聞く姿勢になるのが解つた。

「人権が認められるなら、拒否権行使できるはずだが」

「悪いが、この場で拒否は認めん。私が黒だと言つたら、それが白でも黒だ。覚えておけ」

「I.IJでは、軍隊式が基本なんですか？」

「そうだ。ひよつこの状態のお前をたつたの一年で鍛え上げなければならぬ。その場合に駄々を捏ねさせている時間があると思つ까？」

「？」

くつだらねえし、ふざけんじゃねえ。そつちがその気だつたら、こつちも好きなようにやらせてもらつぜ。俺は、こんなクソ面白くも無い状態にしてくれたオルコットの方を一瞥した後、今度は睨みながら織斑姉の方を見た。織斑姉は反対に面白いものを見たような顔をしている。

「納得が行かないところがあるけどやりますよ。そのかわり、俺を引っ張り出した張本人を捻つた後は、今後その強制権は無しにして欲しいんすが」

「ほう、それはオルコットに勝てると言つていいふうに聞こえるが」「そうです。だって、人殺しの道具を使用することに喜びを見出すことしか出来ない人間に、一体何が出来るんです？」

俺がそう言つた瞬間、教室の空気が凍つたような静寂に包まれた。当たり前なのだが、俺自身がそういう考えなのだからしじうがない。オルコットは自分の思い描いていなかつたであるう俺の反論に吃驚したのだろう、口を半句させて言葉を失つている。見ると、今さつきまで笑っていた織斑姉の顔が怪訝見を帯びた表情になつていた。は、危ない思想の持ち主だと思つたかよ。

「それはどういう意味だ。お前の意見を述べてみる」

「宇宙開発計画から国家間のミリタリーバランスへの転用変化がものがつたつてるでしょう。政治と軍はたつた10年ぽつち先より今

の目先に囚われる。それなら今の I.S の現状なんてのは、政治の玩具でしかない。つまるところ、ここで学んだことで役立つのは、国家のいいの良い体分を盾にして行う将来を見据えた戦争の準備と、紛争地帯等への投入がメインになると思いますよ。女尊男卑なんて言葉で言うが、武器を持つのが男から女に代わっただけです。前で殺しあうのが男から女になった

「もう一つ聞く。アラスカ条約はどう解釈している？」

「あんなもの、所詮は人間が作ったもので神様が作ったのものじゃない。だつたら破るのは簡単だし、変えるのも難癖つけて破れば良い」

授業が始まつてたつたの 10 分。それだけで、周りの人間がみんなお通夜のように下を向いていた。中には睨むようにこっちを見据えているのもいる。だが、少し考えれば当たり前だ。たとえ国家代表にならなくとも、戦争なんてものが始まれば人手は幾らでも足りなくなる。ここに通う人間は、全て予備軍になるのが関の山だ。そんな可能性を考えれば誰だつて暗い気持ちになる。

「どうか。お前の解釈はよくわかつた。では、その人殺しの仕方を学ぶ為にお前はここに来たのか？」

「学ぶが気なんてないですよ。3 年経つたら適当に仕事でも探しします」

3 年間は、おいそれとどこの機関も I.S 学園に入りきれないのを知つてゐる。今回この場所へ入らざるおえない状況にしてくれた奴らも、実際にここへは手を出しにくい。俺がここに来たのは、ただそれだけのためだ。

「3 年経つて卒業したら、どうするつもりだ？」

「どこかに所属するなんて論外ですから。国に捕獲されるなんてことになつたら、世界の果てまで逃げますよ。当然そうします」

後ろ盾はないし、昔の出来事のせいで大手を振つて歩けば即座に捕獲される。協力拒否なら実験動物の後は、ホルマリン漬けの最後が予想できた。織斑姉はしばらく黙っているが、沈黙した後に溜息をつくと再び俺の方を向く。

「お前の人生をどうこうしようとは思わないが、在籍中はオルコットに勝つたとしても私に従つて貰う」

「それは考えさせてもらいます」

「いや、従つて貰う。答えはイエスだけだ」

……根競べしてもしようがない。それなら、要領上手く逃げればいいか。俺は自分で放心を固めると、片方の手だけを上げて教師を見た。

「わかりましたよ、従います。イエス」

「もう一つ。IISが兵器であることには変わりない。が、人殺しの道具だと言つるのは今後一切、校内で口にするな。わかつたら返事をしろ」

「イエス」

座れと促されて俺が席に着くと、何事も無かったかのように授業がスタートする。しかし生徒の殆どが授業に集中できない様子で、みんなそわそわしていた。

一日のカリキュラムが終わると、そのまま教室に残るよつて言われていた。なので、今は自分の席でぼーっと外を眺めている。結局授業中のやり取りが原因で、クラスの生徒は1人として話し掛けでは来なくなつた。

隣で最初に話し掛けてくれた女子も一言も交わさなくなつていて。当たり前のことだが、それでも幾分気が楽になつた気がした。ここにきている連中は、全員がエスに乗りたくて来ているエリート連中だ。決して、反対の意見を持つ者などいない。唯一の同性な織斑一夏は、長い髪を後ろで束ねた女子に引っ張られ直ぐに退室していく。織斑一夏は俺に興味があるようだったが、連れの方が用事があるのか急いでいた感じだろうか。授業もだるいが、プライベートもかなりだるい3年間になりそうだ。さてと

「市隈、待たせたな。寮に関して説明が必要だつたのでな。山田先生、プリントを渡してやつてくれ」

いつの間にか教室に入ってきた教師達は、俺に寮の規則がびっしりと書かれたプリントを数枚ほど渡してきた。朝に教室へ来る際、ちらりと寮があるのは確認している。ホテルのような建物で、無駄にお金が掛かっているような建物に見えた。

教師達の説明を受けながら書かれた文章に目を通していく。最後に俺の部屋番号が記載されている。ほう、女子寮しかないのでそこに住むしかないと。授業中は教師のほうが眉間の辺りを指で揉んでいた。まさか、今度は自分が揉むことになるなんて思わなかつた

よ。

「これって、体裁的に不味くないですか？予算や異例すべしなのはわかるんすけど」

「さあ、疑問なのは先生としても理解しているんですよ。織斑君も戸惑つていましたが、ルームメイトの子とは今のところ問題なくいつているので。ですから、しばらくの間だけ。ね？」

「そういうことだ。いずれ、部屋はお前と織斑の2人部屋にする。それまでは指定された部屋で女子と一緒に過ごしてもいい。わかつたら返事をしろ」

「はあ？まさか織斑一夏の奴は、既に女子と同室で過ごしてんのかよ。うらやましいよりも、気疲れの方がが多いし問題を起す確率が高いんじやねーの。しかし、一週間以内に問題起きたら、あいつはゲイ確定だな。」

「イエス。で、俺は誰と一緒になんですか？このクラスの人間は、みんな俺を遠ざけたいみたいですねけど」

「それは、お前の自業自得だろ。自分で何とかしろ。私も山田先生もお前が言ったことは看過できんし、認めてはいられないしな」

「市隈君の言いたいことは確かに考えさせられますが、それをこのクラスを預かる身としては容認できません」

山田先生は立場では認められなくて、織斑姉の方は認めないのか。

「で、結局俺の相方は誰なんですか？」

「それは自分で確かめてみるんだな」

織斑姉は不敵に笑い、俺は直ぐに山田先生の方を向く。すると、山田先生はすいませんと言つて困った顔をした。なんだよ、織斑姉に

口止められたんのかよ。やな感じだ。

「市隈、山田先生を萎縮させるんじゃない」

「へへへ」

「山田先生も、むつ少し生徒の前では堂々としてくれないか」「すいません」

山田先生はしょぼんと小さくなつた。本当にこの人は教師なのか。俺が再び織斑姉の方を向くと、そこで何故か織斑姉は更に深い笑みを刻んだ。明らかに不敵から、からかいの笑みに変わつてゐる。俺は背中にゾクリとした悪寒が走つた。

「お前の鍵は既に部屋に置いてある。精々、相手に理解して開けて貰うことだ」

「はあ！？ そんなん開けるわけないじゃないですか。野郎を認めて部屋に入れる女子なんて、普通いないでしょ」

「やうが、ならお前は私の部屋で寝泊りするか？ 規則正しい生活を送らせてやる」

「絶対に、『免被らせてもらいます』

どんなに美人だろうが、こんな軍人もどきの織斑姉と一緒に1日で脱走する。ましてや、横で自慰行為なんてなら絞め殺されかねない。こそ、後で絶対にやり返してやる。

「市隈君の部屋番号はプリントに書いてありますので、直接向かってください。荷物はフロントで預かっている筈ですからそこへ取りに行つてくださいね」

「あい」

俺は教師達に軽く一礼して教室を出ると、そのまま割り当てられた

仮住まいに足を向けた。

—＼—／

何てことはない、部屋を間違えたんだ。そう思いたい状況が、俺の目の前で展開していた。寮は一つしかないのだから間違えようもない。部屋がある階も字を読んで理解していた。部屋の番号は4桁で、一文字だけ読み間違えた可能性があるかもしれない。だから3度は見直した。だから3度も見直したんだ。

「貴方、私の部屋まで挑発に来ましたの？」

ドアを叩いて開けられてみれば、出てきたのは今日喧嘩したオルコットだった。当たり前だが、互いが喧嘩腰の対応になる。よりもよつて仕組みやがったのか、あの織斑姉のクソ教師が。俺は今すぐ部屋をええろと言いいたいのをぐつと飲み込んだ。そして、無言のまま教室で貰ったプリントを丸々手渡ししようとする。受け取ろうとしなかつたが、オルコットの顔に近づけて認識させた。

「まつたく、なんですよーー！」

オルコットは引っ手繕るように俺の手から奪い取ると、真面目にプリントに書かれた内容を読み始めた。そして最後まで読みきると、部屋番号が書かれているのを確認したらしい。美人特有の綺麗な笑顔のままドアを思い切り勢い良く、これでもかと詰つぶらに気持ち良く閉め切った。

人間誰だって焦つたら変な行動に出るはずだ。思わず俺はドアを叩いていた。

「待てよおい！…ぢつけんな、俺の意思で決まつた部屋割りじゃね
ーんだよ！…文句なら織斑の奴に言えよ！…」

「冗談は顔だけにしておいて下さいな…！…誰が貴方のような野蛮人
を入れるとお思いですの…！」

「顔はかんけーねだろ！…そんなこと、わかりきつてんだよ！…俺
だつて何が哀しくて、お前と同じ部屋なのか理解に苦しんでだよ！…

！」

「だつたら、野宿でもしなさいな…！…まあ、他に貴方を入れてくれ
るご友人の方でもいれば、泊まれるよう交渉してみなさいな。もつ
とも、そんな奇特な方が居ればの話しだすが？」

うざこ、うざ過ぎる。結局は不毛な会話だつた。俺はそう思つて、
あたりを見回す。今が5時前、人の出入りは殆どない。何人か遠巻
きにこつちを見ていたが、俺が顔を向けると蜘蛛の子散つたように
そ知らぬ顔して去つていった。自分の行つたこととはいえ、やな環
境だな。俺は一分程度の間を開けて、オホンと一息するともう一度
だけ部屋のドアを叩いた。

「オルコットさん、同じクラスの県田です。織斑先生から伝言を預
かつて来たの。開けてくれないかしら？」

俺の口から朝に知り合つた県田の声が響く。声を真似やすかつたの
で、すんなり言葉を言つことが出来た。

「はい、ちょっとお待ちになつて下さこな

オルコットは当たり前のように対応し、ドアを開ける。そしてもう
一度ドアを締め切ろうとして、俺はすかさず半身をドアと縁の間に
滑り込ませた。俺とオルコットの押し問答が始まる。

「確かに貝田さんの声がしたはずですのに！！」

「確かに貝田さんの声がしたはずですのに！！」

「オルコットの台詞と声を真似てやり、言われた当人は驚愕の様相を呈している。

「似てるだろ？特技じゃないけど、俺の喉の構造は不思議と女性に近いんだよ」

「本当は別の理由があるけどね。相手の顔が余りにも面白かったので、今度は織斑姉の声を真似てやることにじょう。

「私としてもしょうがないとは思つていてるが、何せ上の判断でな。部屋がお前のところしか空いてなかつたのだ。悪いがオルコット、しばらく面倒見てやつてくれ。ああ、なんなら行く所まで行つても構わんぞ。自己責任が私のモットーだからな。そして仲良く

ゴールインすれば良いなんて言おうとしたら、頬に衝撃が走った。視界が一瞬だけ真っ黒になる。口の中で鉄の味が広がった。

俺は床に転がり、痛みを忘れて思い切り顔を上げる。そこには仁王立ちして悪鬼の形相をした織斑姉がいた。横では山田先生がおろおろ泣きそうな顔をしている。オルコットはわけがわからないと言つた様子で、不安そうに様子を見つめていた。

「喜べ市隈、今度なめた真似をしたら顎を碎いてやる
「上等だ、クソ教師！！」

俺が叫んだ時には、織斑姉が屈み込んでいた。そのまま顎に衝撃が走る。視界で、2発目のアッパーが俺の顎に炸裂したのは確認でき

た。俺は仰け反り、再度の転倒をする。眩しい天井のライトが目に入ってきた。

女性の腕力だからだろうか、俺が気絶するには威力が足りなかつたらしい。手を使わいで体のバネだけで勢い良く跳ね起きると、そのまま首を軽く鳴らす。

「ほう、意外と打たれ強いな」

「あんたが非力なんだよ」

「面白い、一発だけ全力で行くぞ」

織斑がそう言つた瞬間、俺の視界は歪みながら真っ赤に染まり、次いで黒く変色した。

—＼／—

寝起きは顔と腹の痛みで最悪だった。ずきずきと痛む部分を擦る。腰から上を起き上がらせると、周りが薄暗いことに気づいた。ライトがほのかに光つていて、下を向けば自分がベッドに寝かされているのが理解できた。まさか、気絶させられたのかよ。

「痛えな、たく。どんな腕力してんだか、あのメスゴリラは」

「そんなことを言つているから先ほどのようになるのです。それに、

織斑先生なら貴方の横に居りましてよ

「うそ……」

冷や汗だらだらで、一息に横を向く。居ない。……俺はいつの間にか目の前に居るオルコットを半眼で見た。いい性格してやがる。当の本人は何事もないように、2つあるベッドの内で俺の居る反対の

方へ腰掛けた。手には紅茶の入ったカップが添えられている。イギリス人と接するのは初めてだが、本当に紅茶が好きなんだな。

「織斑先生と山田先生が言われる所以で、ショーガなく部屋の使用を許可するのですから。ショーガなく……ですからね。もし如何わしい素振りを少しでもしたら、即ちやに……部屋から叩き出しますから……！」

「大丈夫だつて、安心しなよ。俺はお前にひとつ欠片も魅力なんて感じちゃいないから。性格、バスが直らない限り周りの男は声もかけないだろうしな」

「貴方つて人は……せつかく介抱して差し上げたのに、礼の一つも出来ないなんて……ほんつとうに、野蛮人の国は礼儀の一つもなつてませんのね……！」

「お前の態度が尖り過ぎで、言つ暇がないんだよ」

言われて周りを見渡して見れば、洋風の家具が幾つも確認できる。どうやらオルコットの私物に見えた。しかし、そのせいいで、部屋面積が異常に縮んでいる。天蓋付のベッドなんてどこから入れたんだよ。文句の前に、俺はとりあえず部屋に入てくれた事と介抱してくれたことだけは、心の中で感謝した。

「たつぐ、朝から……までの時間で一週間分の疲れが溜まったよ。顔は良いんだから、もう少し丸くなれば可愛いのに。もつたいな」「な……！」

オルコットは赤面と怒りを混ぜたような微妙な表情でこっちを見た。何だこいつ、俺の言葉に動搖して。そんなに、男性経験が少ないのかよ。どんだけ純粋なんだ。

俺は気にせず痛む腹部を抑えながら立ち上ると、ハンガーに掛けてあつた制服の上着の内ポケットを漁る。すると固い感触に指先が

当たつた。

あつたあつた。それを取り出すと、見ていたオルコットが思わず違う意味で悲鳴を上げる。ひいつといった感じで、顔が蒼ざめていた。

「ちょっと、貴方は何をしれっと出しているんですの！？」

「何つて煙草とライターだけど。酒はばれそつだつたから、持ち込んでないけど」

「貴方、何を考えていますの？ここで吸つたら、臭いで直ぐに他の方がわかつてしましますわよ！！」

「だつたら屋上で吸えればいいじゃん。こちとら、14から吸つてんだから今更辞められないしな。イギリスじやー8から吸えるんだつけか？裏じやコカインも買えるって聞いてるけど。なんならお前も吸うか？」

「私がそんなもの吸うわけないでしょ！それに私が今の状況を許すとお思いですか？」

生真面目にここに極まれりつてか。さすがはEVA学園だ、品性方向がしつかりした生徒が集まってるな。俺は何も答へず靴を履くと、部屋の鍵を持って廊下へ続くドアを開けた。

「待ちなさい、話しさはまだ終わつてなくてよ！！」

「良かつたじやん。あんた、俺の弱みを見つけられたぞ」

オルコットは、はあ？と言つた感じでポカンとした顔をする。俺はそのまま扉を閉めて屋上へ向かった。

屋上は鍵が掛かっていたが、無理やりこじ開けて外へ出る。涼しい風が頬を撫でつけた。人目につかなそうなところに腰掛けると、煙草に火をつけた。螢火のように赤い点が浮き上がり、紫煙がゆらゆらと宙を漂つた。一息ついて、しばらくぼーっとする。次いで自然と言葉がもれた。

「なんで姉さんは、こんなところに放り込んでくれたかね。ここは俺の肌に合わないよ」

言葉は響くこともなく、すっと靈の如く消えていく。もう少しこの場所にいようか。俺は寝転がると、適当に買っていた缶ジュースのプルタブに指を差し込んで開封する。缶独特的の開封音が小さく鳴つた。

俺が起きるとオルコットはまだ寝息を立てていたので、静かに着替えて部屋を出てきていた。朝食の時間には早かつたが、そちらの方が都合が良かつた。

それに昨日の昼から食べていない為に、お腹は鳴りっぱなしでしようがない。俺は女子の間で話題が挙がると、伝播するのが早いと感じている。それが面白い話題であればあるほどだ。きっと俺に関する噂は悪い意味で、よく浸透して伝わっているにちがいない。

配膳を取ると適当な席に着いて朝食を取り始める。周りは朝から部活動があるであろう、数人の生徒だけが疎らに座っていた。ゆっくり食べていると、だんだんと生徒の数が増え始める。

「横、空いてるか？ 確か市隈で合つてるよな？」

顔を上げながら横を見ると、織斑一夏が手に朝食を持って俺を見ていた。次いで何か痛そうなものを見たようにして顔を顰めている。隣で一緒に食堂へ来たであろう女子も意外なものを見たように、口に片手を当てて驚いた顔をしていた。俺はと言つと、片方の頬が青みがかつていてね。その上から絆創膏を貼つてている状態だ。

「…頬のところ、どうしたんだ？」

「お前のねーちゃんに殴られたんだよ。三発目には、腹へ喰らって氣絶した。随分鍛えてんな、あの人。久々に良いのもらつたよ」

俺が笑いながら話すと、織斑弟もつられて苦笑いながら「千冬姉は

怒らすと怖いんだよ」と言つた。

ふーん、傍目から見ても姉とは随分性格が違うそうだな。織斑弟と連れの女子は俺の対面に座り、朝食を取り始める。

「あー、えつと…」

「一夏でいいよ」

「そうか、なら俺も喜久でいいから」

一夏はフレンドリーに話しあげると、気さくなタイプなのかと適当にあたりをつけた。俺はせっかくなので連れ添っている女子にも話しあげることにした。

「そつちの人は？悪いけど、昨日は『じちや』じちやしてて何も覚える余裕無かつたんだよね」

「篠ノ之 篠だ。呼び方は適当で良い」

篠ノ之は俺を悪印象に捉えていない話し方で接してきた。何で昨日の授業のこと、嫌悪感を持たないのか疑問が湧く。2人とも根つからのお人よしなのか？そんな事を考えていると、ふいに篠ノ之が話しあげてきた。

「昨日は織斑先生と何かあつたのか？」

「寮の部屋の入り口で同室の奴と人悶着合つて、そこに来た一夏のねーちゃんと更に喧嘩になつた。けど、ワンサイドゲームで3発喰らつてノックアウトだ。お陰で顎が痛くて上手くご飯がかめない」

「まあ、喜久は昨日あれだけIS批判してたからな。あんまり良いイメージもたれてないかもな」

一夏は欠伸をかみ殺しながら適当に答えると、コップに注がれた飲み物を口から注ぎこむ。俺も痛む顎を我慢しながら、適当にパンを

噛み千切つた。3日は柔らかいもののお世話になりそうだ。

「市隈、同室の相手と言つのは誰だ？」

当然の疑問のように篠ノ之が投げかけてきた。

「ああ、高慢ちきのイギリス人だ」

2人ともげつとなり、俺のくじ運の無さに「愁傷様」といった表情を浮かべている。そこで、いきなりこつりと頭を硬いもので軽く叩かれる感覚がした。

一夏と篠ノ之の顔が変わり、少し頬が引きつった顔をしている。俺が振り返って見ると、そこにはとても作り笑いしてますといった表情のオルコットが俺を見下ろしていた。

「おはよ〜」
「おはよ〜ります、なにやら私の話をしていたようですが。何を話していました?」

「なんだよ。俺は、お前のいびきが酷くて寝れなって話をしてただけだ」

「へえ、そうですか。てっきり私は貴方が屋上でしていた行為をこの野蛮人にも進めているのかと思いましたわ」

このやう。お前、俺に対しての切り札を切るのが早すぎだう。こつちが見せた弱みをどこで使ってくるのか、駆引きの仕方を見てみたかったのに。どんだけ気が短いんだよ。少し呆れた表情が顔に出ただろうが、気にしないでいることにしよう。オルコットの奴は今度は心底嬉しそうにしている。俺の呆れ顔を嫌そうにしている表情と、とつたのだろうか。

俺は最後の一 口を食べ終えると、席を立つことにした。が、オルコットは俺が立ち上ると同時に俺の肩に手を置く。一夏と篠ノ之も

何だといった表情をしていく。

「私はこれから食事なのですが、膳を取りに行つて並ぶのが、些か疲れますよね。取つてきてくれません?」

「そんくらい自分でやれ」

「あら、外を見れば今日はとても晴れていますのね。どこでも気持ち良くなじせそうですね。人の日の届かない所でも。ねえ?」

どんだけ、揺さぶるつもりだこのやうな。俺は中指を立てながら、オルコットの顔面へ持つていく。

「お前、絶対に後ろから刺されるタイプだろ」

俺は捨て台詞を残してトレイを持ち上げると、一夏と篠ノ之は理解が追いつかないといった表情でぽかんとしていた。しうがなく、イライラを溜めながらもつ一度生徒が並んでいる配膳列の方を田指すことにする。

「それと」

「まだ何かあんのかよ?」

首を捻つて顔だけオルコットに向ける。

「私の名前はセシリア＝オルコットです。お前ではなく、オルコッ

トと呼びなさい」

「面倒臭せーよ」

「ついでにタ・バ・スコもとつてきてくれません?」

「わかつたよ、オルコット!..」

半ばやけくそ気味に答えて俺は生徒の並んでいる列へと向かう。そ

して、まったく可愛げのない対応をしてくるオルコットに、俺は不快指数を強めていった。

あれから一週間、俺はオルコットの良い奴隸と化していた。毎日毎度毎回と、ことあるごとに煙草を吸っている事をちらつかせている。次からは絶対に弱みをみせんぞ。そんなストレスのせいで、持つてきていた煙草一箱は、僅か3日で底をついた。

そして、今日は今まで溜まつたものを吐き出すための逆襲日を迎えていた。そんな対戦当日の現在、俺は格納庫で2種類の機体を見ていた。回っていた。

両方とも量産機で、鎧武者みたいないと角張ったボディラインの多い変形ロボットみたいなのだ。ISが嫌いな筈の俺は、見るのもごめんなそれらの名前を知っている。

「打鉄とラファール＝リヴァイブの好きな方を選べ。国家代表候補であるオルコットに対し、ひよつこのお前が勝つつもりでいる根拠は正直わからん。が、あれだけの大口を叩いたのだ。勝つ算段がついているなら、結果を見せてもらう」

「わかりました。で、どこまでやつていいんすか？」

「どういこりどだ？」

織斑姉は怪訝そうな顔で此方を見ていた。俺は思つたままのことを正直に告げる。

「相手が骨折するだけの攻撃をして良いのかつてことです」

「駄目だ。これは戦闘ではない、少しは常識的に発言しろ馬鹿者が

拳骨が振り下ろされて、もろに喰らつ。頭に響く痛感覚が一瞬だけ、昔に嗅いだ硝煙の臭いを脳裏をちらつかせた。小さい頃は拳を頬に喰らついて、俺の性格を矯正しようとしていた女性がいた。

が、そんな彼女も、もうこの世にいない。ラファール＝リヴァイブの前まで来ると、手を触れてISを感じる。3年前は毎日感じていた名残と、IS入学試験に続いての感触だ。

「こっちにします。装備は自由に選んでも？」

「良いだろう。山田先生、レクチャーしてやってくれ」

山田先生がこちらに歩いてくる。

「市隈君、良いですか。装備を選ぶのはこちらのパネルに触れてください」

「ああ、大丈夫です。自分でわかりますから。予習したんで」

そう言って俺はすいすいと作業を進めていく。何てことは無い、昔居たところで使ったことがあるだけだった。だから操作の仕方も知っている。淡々と作業をこなしていく横に、山田先生が感心した表情で[画面設定]を覗き込んできた。

「随分手際がいいですね。まさか、これを扱った事があるんですか？」

「いいえ。マニュアル通りやってるだけです」

覗き込んでいる途中で、山田先生が『えつ』と言つ声を上げる。気になつたのか、離れていた織斑姉が俺の方にカツカツとヒールを鳴らしながら近づいてきた。

「ほう、長距離用のスナイパーライフルを3丁だけで、弾を積み込

めるだけ。思い切った行動だな、相手が遠距離特化型なのに自信があるのか？」

「あるとか無いとか関係ありませんよ。俺は自分がやり易いように武器を選んだだけです。もう乗り込みますんで」

「そうか」と織斑姉は言つて、山田先生と一緒に機体のから距離を取る。俺は首を捻つて回すと軽い準備運動の後で機体に背を預けた。機械の駆動音と共にピットのハッチが開く。射し込む日の光は眩しく、思わず顔を覆めた。段々と日が慣れると、外気の臭いが部屋に溜まっている微かな埃の臭いを塗りつぶしていく。一夏ならワクワクするだろうが、俺にはそんな感慨は沸かない。あるのは、過ぎり続ける嫌な思い出だけだ。

「『』の試合で勝つたほうが織斑と試合するんすよね

「そうだ」

俺が織斑姉に聞くと、簡潔に答えられた。試合の展開上で一夏の奴は専用機がまだ届いておらず、結局このまま俺とオルコットが先に試合をすることになる。ハッチが開ききると、俺はラファール・リヴァイブを地面から切り離して宙に浮かせた。

そのままゆっくりと前に進み、アリーナへと足を踏み入れる。頭上を見上げれば、視界にくっきりと映える青が基調のシルエットがこちらを見下ろしていた。画面にはブルーティアーズの名が表示されている。

『逃げずに来たことは誉めて差し上げますわ。降参を言うなら今だけ見逃してあげましてよ?』

降参なんて、冗談にも程があるだろ。

「クソ教師に言われてから考えたんだけビ、お前の中の常識的な決闘ってのはどういうルールだ？」

俺はオルコットに先の言葉を促す。

『もちろん、地面で無様に這つたときですわ。まあ、それをするのは私ではなく、貴方ですが』

なかなか良いことを言つ。同感だ、俺もそれぐらいやらないと納得がいかなかつたところだ。その透かしきつた笑顔を泣きつ面に塗り替えてやるよ。

『あらあら、いけません。私としたことが軽率でしたわ。既に貴方は這いつぱなしでしたわね、下僕さん?』

予定変更だ。絶対にこいつの笑みを後悔の2文字に変えてやる。ビーッというブザー音が鳴り響くと同時に、俺とオルコットの機体が素早く動き出した。

――――

俺は満身創痍のような状態で、地面にめり込んだまま頭上を見上げている。そこには空の色に保護色で紛れそうな青い機体が空中を漂っていた。浮いているオルコットは、余裕とも不敵ともそれそつな笑みを浮かべながら。

「口ほどにもあつませんわね。まあ、挑んできた勇気だけは褒めて

差し上げます。ワンサイドゲームで物足りませんが、これで終わりです。私を引き立てる為に華々しく散りなさい！！

上空でオルコットのブルーティアーズがライフルの銃口をこじりて向けた。田の前のエネルギー残量を確認する。53か。まあ腐ったハンデにはこれくらいで充分だろう。イグニッシュン・ブースト瞬時加速は1回程度しか使えないが、それだけあれば余裕だ。俺は起き上がりと、スナイパーライフルの銃口を無造作にオルコットへと合わせ

引き金を引いて、ブルーティアーズのレーザをこちらのレーザで相殺させた。

『な！』

「驚くなよ。これくらい射撃に特化した人間なら朝飯前だろ？」

『くう、まぐれに決まっていますわ！！』

オルコットは叫んで武器を乱発し始める。1、2、3、4、5、6発。撃ち放たれるビーム光に難なく追従し、撃ち放たれた分だけを全て相殺していく。すると、きりがないと感じたのか他の武器らしきものを射出し始めた。

直ぐに視界の右下で相手武器の説明が表示される。へえ、ビット武器ね。俺は自身が避けられる幅を確保するため、すぐさま上空まで飛翔してある程度の高度をとりだす。

「貴方、どこまで私をこけにするおつもりですか！！それだけの力量を持つていながら、最初から何故全力で私に挑んで来なかつたのです！！」

頭上からオルコットの怒鳴り声が、距離の離れている自分のどこまで響く。よっぽど腹に据えかえたらしい。オルコットはビットを4

つ射出すると、自分の周りに停滞させていた。

「別に、全力で行く必要なんかないだろ。ほら、ハンデだ。俺の残量エネルギーは53。まあ、ほぼ一撃で落ちる数値だ。嬉しいだろ？」

『ぐつ、どこまでもぬけぬけと……良いでしょう、そのまま墮ちなさい……』

話しあは終わりとばかりに、ビットを勢い良く加速させて俺の周りを取り囲もうとする。俺はスナイパー・ライフルを両腕で抱えると散歩道を歩くよつな速度で、オルコットの方へゆっくりと近づき始めた。

6時、3時、8時、0時と順次に角度が決められた位置からビットのレーザ攻撃が飛んでくる。見上げるが、本体からの攻撃はない。捻りがないな。そう考えながら最低限の移動で俺はオルコットへと距離を詰めていく。相手からしてみれば、回転独楽がヨレヨレで軸を失ったような避け方に見えるような感じだろうか。俺との距離がだんだんと縮まっていく。

しかし、当人の顔に焦りのような表情が見えない。まだ、何かもう一つくらい隠しだまを持っているのだろうか?しかし、こいつは表情に出すぎだな。内心溜息を吐きながら、距離を10メートルまで詰めた時だった。

「墮ちなさい……」

声がしつかり届く範囲まで近づいたところでオルコットが叫び、突然サイドスカートになっている部分が持ち上がる。そのまま俺に向かって実弾ミサイルが4つ、空を切るように飛び出してきた。

「勉強の時間だ。先ずは下に這うんだな」

次の瞬間、俺は呆れながらオルコットの顔面3センチ付近に、スナイパーライフルの銃口を突きつけていた。何てことはない、ミサイルの下を掻い潜つただけだ。

「そんな、イグニッシュション・パー瞬時加

相手が言い終わるのなんて、待つ道理もない。俺は構わず0距離射撃を敢行した。

「さやあ！！」

オルコットは盛大に叫び声を上げて一瞬パニックになる。絶対防御があろうが衝撃を全部殺せるわけないし、ましてや顔面に大口径の銃口を向けられたら普通は正気でいられない。俺は相手の頭上まで機体を上昇させると、そのまま足を振り上げた。

「何発耐えるか、確認してやるよ」

弓なりに振り上げた足をピタリと止める。俺の力を絞つて出された蹴りは、そのまま、矢を放つような速度でオルコットの顔面めがけて振りぬかれた。

オルコットはパニックから回復したわけじゃなく、咄嗟に庇つたのだろう。俺の蹴りはオルコットの両腕に阻まれて甲高い金属音が上空でこだました。それでも勢いは殺せなかつたのだろうか、両腕が弾き跳んで体全体が、がら空き状態になる。

「一発で終わると思ったか？」

体を捻り、全体を丸」と回転させて、続けざま2発目の蹴りをオル

『ピットの腹部に放つ。

「あやあああ……」

ズンッと沈み込むような感触に手ごたえを感じる。今度は綺麗に入り、オルコットは体をくの字に曲げると重力の従うままに地面へと落下した。

地上で土煙が膨らむように膨張し、拡散していく。俺はそのまま両手にスナイパー・ライフルを構えると、標準を覗き込んで獲物を狙う。サイトの中心はヘッドショットのあたる位置へ固定できた。

地面に埋っているままのオルコットの顔面に合わせて、トリガーを引

『勝者、市隈。終わりだ、そこまでにしておけ』

会場内に響くスピーカ越しの声。俺は思わず織斑姉の居る方向を向いた。舌打ちして、銃を肩に預けて抱ぎ上げる。

『市隈、この後どう戦つつもりだった?』

織斑姉の声がスピーカ越しに聞こえてくる。そんなことは、決まっている。

「頭にヘッドショットを打ち込んで、組み付いて武器を全損させます。相手のエネルギー残量が無くなるまでひたすらオルコットの顔面に0距離射撃の繰り返し。止めに全治3週間くらいの骨折をさせて終わりでしたけど?」

『貴様は、ピット内での私の言ったことを聞いていなかつたのか?』
『いいえ。だから最後に威力を調整して、エネルギー残量をギリギリ1にした後で、瓦解寸前の絶対防御中に折りたい場所を貫通して

打ち抜くつもりでした」

『市隈、オルコットを立たせて反対のピットへ運んでから自分のピットへ戻り、そのまま待機している。話しがある』

「イエス」

俺は、氣だるく返事をするとスナイパーライフルの武装を解除してオルコットの方へ近づいていく。最後までヘッヂショットはやり続けるつもりだったが、良い気づけにはなつただろう。地上に着地すると、オルコットは青ざめた表情でこっちを窺っていた。

おおかたさっきの会話を聞いて恐怖したのだろう。俺はゆっくりとISの纏った手をオルコットの前に差し出す。すると、「ひつ」という声が聞こえた。

「もう攻撃はしないって約束する。それに最後に貫通させるなんて言つたのは、あの教師のやり方にむかついてるから反抗してるだけ。お前は、俺があの教師にイラついてるの知ってるだろ？ それと、戦闘中に行動が顔に出すぎなんだよ。立てるか？」

俺がしばらく体勢を維持している。やがてオルコットは顔を引きつらせながら、恐る恐るといった感じでゆっくりと手を差し出してくる。手に重みを感じると、俺はそれを握つてゆっくりオルコットを立たせた。

右にまわり込んで体を支えながらピットの方へと向かつ。運んでいく途中で、オルコットはゆっくりと小さな口を開いた。

「…貴方は、容赦があつませんのね」

「そうだなあ。まあ、俺は子供の頃に防弾ガラス越しで、実弾を0距離射撃され続けたことがある。最初の2日間は、何も喉に通らなかつた。3日目でも食事を吐いてもどした」

いきなりの発言にオルコットは絶句したように、俺を見ている。

「何でそんなことを…」

「いろいろとね、毎日そんなことばっかやつてたんだ。だから、1
2までは学校なんて行つたことがない。容赦も何も、俺の基準なん
てもともとズレまくりなんだよ。音声は向こうにも届いてるからな、
俺がお前に話せる内容はこんぐらいいだ」

獨白のように俺は自分の過去を語る。じつとりと手に汗が浮かんだ
ような気がした。なんとなく、なんとなくだけれど、ISは平和に
届かない代物だと云うことと体感して欲しかったのかもしれない。
だから、自分が昔受けた過酷な思い出の一端を同じように再現した
のだろう。そこに後悔感はない。そして、それ自体はエゴだと理解
できている自分がいた。

オルコットは無言でこちら側を見ている。整った綺麗な顔立ちは、
埃で汚れても健在だった。どんな状態でも絵になるってのは、美
人の特権だな。

「なあ、競つて強くなつて、国の代表になつて世界のトップになつ
てさ。その先にあるのって何だ？もし、軍事バランスが崩れて戦争
になつた時に、お前は敵国人間をISで殺すのか？」

「…わかりません。ですが、今の私にはこれが必要なのです。」

「まあ、事情は人それぞれか。話しあは終わりだな」

そう言つてオルコット側のピットにたどり着くと、俺は自分のピッ
ト側に向かっていく。視線の向こうでは鬼の形相をした織斑姉が立
つているのが見えた。戻りたくはなかつたが、結局きつい一発を喰
らうために足を運んだ。

試合後に織斑姉のきつい一発を顔面に入れられてから、1時間の休息を挟んだ。今は一夏との試合になり、2人ともHSで空中に浮いている。一夏には黄色い声援がとび、俺には凄まじい野次の嵐だつた。前回の試合でオルコットに顔面0距離射撃なんてのを敢行したせいで、殆どの生徒が今や敵になつていて。よつは、一夏が正義で俺が悪役といった構図が生まれていた。

試合の後で一夏に「やりすぎだ」と言われたが、俺は「あれぐらいがちょうど良い」と言った。なので、今はお互にが険悪な雰囲気となつてている。

『市隈、聞こえているか？』
「なんすか？」

うつとしげ声が聞こえて、自分の口からやや剣呑な声がでた。先ほど織斑姉は、俺の治りかけの頬に突き刺さるようなパンチングを行つていて。今はさすがれだった感情のせいで、適当に答えることしかできない。

『織斑相手に手加減する必要はない。半殺しでやつてかまわん』
「はあ？ ここでは普通、俺にセーブをさせるといひじゃ？」
『お前にできるなりな』
「くえ』

「こいつ本当に教育者か？ けど、その挑発に乗つてやるよ。俺は通信

を終えると一夏に喋りかかる。

「一夏、お前の姉からお達しが出たぞ」

「何だよそれ」

一夏もつっけんどんな会話をしてくれる。話してるとビーツと試合開始のブザーが鳴った。俺はスナイパーライフルを構えながら笑つて伝えてやる。

「半殺しにされてこいだとよ。俺も人のこといえないけど、お前の姉も恐ろしいな。野郎相手だ。最初から全力でやるから、武装を呼び出せ。準備できたら始めるぞ」

「ああ」

武装の展開を促す。しかし、しばらくして一夏の奴は焦りだすと、なんの覚悟を決めたのか剣を構えだした。あいつ、何で銃器類を構えないんだ？

「一夏、何やつてんだ。お前それ近接戦闘用だろ」

「しょうがないだろ！－」こつちは武器がこれしかないだよ

「嘘つけ、ちょっと見せてみろ」

試合がしらけるがしようがない。俺はライフルをしまうと、無防備を強調して一夏に近づいていく。一夏もぶつくさしながら剣の構えをといた。俺は一夏の肩に捕まりバランスを取りながら、2人で装備と一緒に確認する。すると、ばかげた装備内容に俺は思わず戦慄した。

「お前これ、装備内容をこつそり剣一本を持ってかれてるぞ。それのせいで、スロットにも余裕ないじゃん

「何でだよーー！」

「俺に怒るなよ。つまんね、しらけた。…びつせ、まだ一次移行が終わってないんだろ。ゆっくり待ってやるから、終わったら始めんべ

俺は一夏から距離を取る為に、背を向けて距離をゆっくじと取つていぐ。それにしても、雪片一型ね。ごつい名前だこと。距離をとり振り返りながら一夏の方を向くと、俺はその場でゆっくじと待機した。

一向に試合が始まりを見せないのを不信に感じたのか。観客からは声援と罵声が消えて、一体いつ始まるんだといった雰囲気になつてきている。

『何をしている、時間がもつたいたい。早く試合を開始しろ』

そして、観客の声と入れ替わるように織斑姉の命令がどぶ。

「一夏の準備が終わつてないし、剣のみじや話しがならないですよ。そつちが、何を考えんのか知らないし、知る気もないです。俺は俺のやりたいようにやらせてもらいますよ」

『始めるければ、お前を失格にするぞ』

一夏の方を見れば、一次移行がいまだに終わる様子がない。俺は肩を上げながら織斑姉に答えた。

『やつたきやれよ。俺は別に勝ち負けに興味なんてねえよ、最低限で適当に卒業できりゃ良いしな。バトルジャンキーは他を当たれや

『やつか』

そのままビートといふブザー音が鳴り響き、今日の試合は終了した。
もちろん勝者は一夏になった。

――――

俺はここで生活にきつと疲れ始めている。女ばかりの空間は色々な意味で苦痛なのだろう。愚痴を吐ける相手もいない。現に今も、試合放棄と目上への態度不謹慎の罰をくらっていた。

試合後に課せられた罰は寮の大浴場の掃除だ。俺の隣では一夏も掃除している。俺だけ罰を喰らうのは納得が行かないらしい。律儀なんだが、意見を押し通す辺りが頑固だな。眞面目で頑固で一本気なんて俺と正反対だ。

「なあ、喜久。お前なんで、俺の一次移行まで待つてたんだ?」

「そらあ、オルコットの奴は最初から戦える状態だったしな。一夏の場合はわけもわからず乗つてただろ。フェアじゃないのは嫌いなんだよ」

お陰でデッキブラシ片手に床を擦つてるけどな。織斑姉め、殴つても無駄だと判断したら今度はこれかよ。オルコットとの試合で、俺だって少なからず体を酷使してんだぞ。一夏は笑いながら喋りつつ、ブラシを床に当てる。

「おまえって律儀だな」

「お前にだけは言われたくないな」

「なんだよそれ」と一夏が言って、仲良く1時間かけて風呂を端までブラシをかけた。掃除が終わって片付け終わると、俺は気になっ

てこることを一夏に聞く。

「それより、一夏。オルコットと試合すんだって？」

「ああ、お前が試合放棄して俺が勝つたことにしたんじゃ、負けたオルコットは意味不明な状態だろつからな」

教室へ向かいながらも話は続き、一夏はうんうんと考え込んでいる。

「そらそつか。確かにそれじゃ、むしろせんも納得しないわな

「だらう。俺だって、あいつと同じ立場なら考えちまつよ」

まあ、俺の気分で試合をぶち壊したんだ。そら、悪いのは俺だしな。他の女子連中からは、随分生意気に見えるだろ？

「試合は明日だっけ？」

「ああ」

「まあ、一夏じや勝てないだろーけど、応援はしてやるよ

「言つたな。暗にお前の方が強いつて聞こえるぞ」

俺もオルコットも搭乗時間が一夏よりも圧倒的に長い。この差はどうにも埋めようがないし、一夏はそれをわかつてないらしい。

「さあな。まあ授業以外、俺は極力ISに乗るのはじめんだからな
「なあ、なんでお前そんなにISを否定してるんだ？」

純粹つてのは怖いね、人が聞いて欲しくない質問も平氣でしてくる。
俺はどう答えるべきか。理由を話せば、言いたくない過去も話すことになる。出来ればそれは避けたい。

「授業中に言つた通りだよ。IS否定の本人がISに乗つてるんじ

や、矛盾してるけどな

「そうか、喜久のEIS嫌いも少しでも良くなるといいのにな。俺は、ギスギスしたのって苦手なんだよ。オルコットとは、俺も含めてだけ仲直りしてくれよな」

「それこそ、説得力のない言葉だな。まあ、向こうは基本が上から目線だからな。蠟燭と鞭を持つたら、さぞ似合つだろつよ。結局は、相手の態度しだいだろ」

教室で鞄を取つて寮に戻る道すがら、俺の耳に入ってきた言葉がある。市隈は女の敵で外道だと。やつた後の後悔もあれば、後の祭りかんも否めない。が、生徒たちから絶大的な人気のある教師にまでたてついたんだ。当然、悪口にも拍車がさらにかかりました。寮まで来ると、そのまま一人して俺の部屋に向かう。ノックをすると、ドア越しからオルコットの「開いてますわ」と声が聞こえた。自室なのに、何が悲しくてノックしなけりやならないんだろう。

「織斑も一緒に良いか。オルコットと、話したいことがあるんだそうだ」

「どうぞ」

「だとさ、入るつぜ一夏」

「ああ」

一夏を促して部屋に入ると、セシリアが西洋アンティークみたいな椅子に座つて足を組んでいた。一夏が思わず部屋の状態に驚いている。西洋家具で埋め尽くされた部屋は、学園でもここだけに違いない。俺も周りを見渡して驚いたから、当たり前の反応だわな。

「オルコット、試合中は悪か

「セシリアと呼んで下さいな、喜久さん。一夏さんもすいませんでした」

そつ言つて、オル「ソトは俺の言葉を遮りながら頭を下げた。

「「はあ？？？」

俺は思わず一歩仰け反つて部屋の壁の端に頭を打つてしまい、一夏も驚いて俺の方を怪訝な表情で伺つている。まるで、お前なんかしたんだろうといった顔だ。てか、何があるのかと俺の方が勘ぐつちまう。痛む後頭部を摩りながら、俺はあわてて弁明する。

「待て、俺は試合以外は何もしてねーよ
「じゃあ何で俺にまで、謝つてんだよ」

「一夏さん、勘違いですわ。喜久さんは何もしていません。私が間違つた行動をしていたのです。ですから、謝罪するのは当然のことです」

俺も一夏も驚きすぎて、頭の中で慌てふためいている。これじゃ、話が進展しない。しじうがない、核心だけ聞こづ。

「なあ、オルコギト。何で
「セシリニアと呼んで下さこまし」

何で親しくもない相手に呼び捨て強要すんだよ。

「なあ、セシリニア。間違つたなんて言つてるけれど、何を間違つた
と感じたんだ」

「そうだな。俺も聞きたい」

俺の後に一夏が言葉をかぶせる。セシリニアは一拍置いてから独白の
ように喋り始めた。

「私の両親は既に亡くなつていて、この世に生きていません。両親が生きている間、父は婿養子という立場もあり母に引け目を持つていました。IJSの登場で女尊男非になると、余計に父は臆病になつていつたのです。私はそれを端から眺め、情けない表情に嫌気が差していました。情けない男は嫌いだと。それがいつしか周りにいる全ての男性に当てはめていたのです。喜久さんと試合をして、恥ずかしながら自身の勘違いに気づかされました。喜久さん、あなたが疑問に感じていることをお答えします。私は家族から残されたものを守るために、IJSに乗るという手段を選んで学園に来ました」

セシリアの口から出たのは、なかなかヘビーな内容だった。しかし、拒絶的からの友好的な態度への変換が激しい。俺は理由には納得いくが、未だに疑つてた。

何せ、この一週間を下僕のように扱われてきたのだ。自業自得だつたが、腑に落ちない。一夏は素直に納得し、俺の肩にポンと手を置いている。わかつてやれよといった表情で見られると、俺だけが悪役みたいだ。

「喜久も俺もだけど、セシリアと仲直りしたくて話をしに来たんだ。こつちこそ、ありがとうな。だろ、喜久？」

「入つたら、鬼の形相で構えてると思ってたんだけどな。しおらしくなつてるから、正直びっくりしたよ。まあ何にせよ、俺にも謝らせてくれ。試合中は悪かった、俺も頭に血が上つてたよ」

セシリアは嬉しそうに頷くと、泣きかけだつたのか軽く目尻を拭いた。俺も一夏も頷いて、その場に和氣藪々とした雰囲気が広がる。俺は奴隸から解放されたことを確信し、それも嬉しく感じた。

「そつかそつか。じゃあ、引き続きタバコのことは黙認することで良

いんだよな

「なに！？おい、喜久。お前、煙草なんて吸つてんのか！？そんなの駄目だ決まってるだろ、直ぐにやめろ」

なに！？一夏は反対派なのか！！

「それとこれは話が別です。今すぐお止めになるべきです」

結局、俺はセシリア側に援軍を送つてしまい、そのまま一人に煙草をやめるという説教を小一時間垂れられる。告げ口はしないが、止めるようう散々言われた。

見上げる晴天に広がる青空は清々しい。世界中どこで見ても、この光景だけは変わらないからだ。そんな上空で、2機のISが浮遊している。そして、急降下して一機だけ派手に地面へと激突した。無残にも埋つたのは一夏の展開している白式。で、これが俺の目の前に広がるIS学園での授業風景のひとコマだ。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする」

織斑姉から檄が飛ぶ。周りのクラスメイトはクスクスと笑っていた。これは一夏の奴、精神的にくるだろうな。

「ふむ。おい、市隈。お前が手本を見せてみろ」

「嫌ですよ、面倒くさい」

「私は寛大だからな。風呂掃除を一週間連続と、どちらが良いか選ばせてやる」

このやうつ。俺は反抗的に視線を向けながら、学園から半ば強制的に与えられた俺専用のラファール＝リヴァイブを展開した。専用機なんて欲しくもなかつたが、受け取らないと懲罰扱いだなんて言われりやしうがない。だが、受けとつた直後はアクセサリーの状態を見て、溶鉱炉へ投げ込んでやろうか考えた。それなくとも入学してから一ヶ月近く経つが、未だに織斑姉とは仲が悪いまだ。手早く終わらせるために、無言のまま一気に上空まで急上昇する。

そのまま、今度は一気に急降下すると、減速と反発的に一瞬だけ瞬時^{ツイントン・ブースト}加速を行つた。織斑姉は、珍しく感心したような声を上げる。

「ほひ。スピードも殆ど落とさず」^{イケ}に一センチ以内か
「どうも」

まったく、面倒だ。周りの女子達からは、失敗しないことへの舌打ちなどが聞こえた。IISの展開を解くと、俺は輪の中心から外れようとして移動する。

「市隈、まだ戻つて良いとは言つていなげ。武装展開の開放課題が残つている」

「そんなん、俺じやなくとも良いじゃないすか」

「3度目は言わんぞ、戻れ」

「イエス」

俺が再び輪の中心に戻ると、一夏とセシリアは既に部分展開を行つてゐる。セシリアはある程度が順調だった。一夏は上手くいつたが展開時間のせいで怒られている。織斑姉が俺の方を向いた。

「市隈、やつてみろ」

「イエス」

俺は面倒くさがりながら、無言でスナイパーライフルを呼び出す。それを引っ込めるとブレードを展開して、また引っ込んだ。あんまりすんなりと行つたからだろう。教師一人以外がぽかんといった表情で見ていた。

「市隈、もっと早く行つてみる。手抜きは許さん」

「んだよ、これが限界ですから」

ち、提出した経歴以外で、どんだけ俺のことを探りを入れるつもりだ。

「風呂掃除は確定だ。これ以上増やされたくなかったら、各自の手に違つ武装を同時展開をしてみろ」

「…スバルタめ」

そんなに俺の全力が見たいなら一回だけ見せてやるよ。

「いきますよ」

言いながら両腕に違つ武器を同時にそれぞれ呼び出した。これには、織斑姉以外が驚いて俺の方を見ている。

「やはり異なつた武装の同時展開も、素早く使えるのか。もう良いぞ、展開を解け。市隈、お前は授業後に織斑とグラウンドの穴を埋めるように」

「そら、嬉しいご褒美だな」

俺は展開を解くと、そのまま輪から外れて適当なところを陣取る。すると、そこで授業があわつたらしく、織斑姉は号令をかけて授業を終わらせた。クラスの奴らが教室へ戻るうとする中で、俺は一夏に声をかける。

「なあ、一夏が開けた穴を埋める為の土は、一体どこにあるんだ？」
「いや、俺が聞きたいくらいだ」

周りを見れば、余分な土を貯蔵している場所は見当たらない。しょうがなく、2人して地面の穴を埋めるための土を探すところから作

業を開始した。

—＼—／

「ふーあ。おちつくわ」

星が微かに見える夜の時間に、俺は寮を抜け出してこつそり喫煙タイムに耽っていた。最初のストックが三日で切れた俺は、中学時代の不良仲間にカートンで煙草を小包にして送つもらつている。そして、囮として一箱はわざと同室のセシリアに見つかることにして、取り上げられた。次いで、しつこく返してもらえるよう食い下がるのも忘れない。これで、煙草はもう吸えないと向こうは認識しただろ。しばらくして、吸い終えてから吸殻を携帯灰皿にしまつと、俺は寮を田舎して歩き出した。

「ちよっと、そこのアンタ。道を聞きたいんだけど?」

「んあ。ああ、俺のこと?」

寮への帰宅がらご、声を変えられて後ろを振り向く。すると、見慣れない髪形の女子に声を掛けられていた。

「そうよ。寮つてどうやって行くのかしら?」

「そりや、ちよつじ良かつたんじやない?俺も今から寮に戻るところだよ。何なら一緒に行くか?」

「ラッキー!とこひでさ、あんたはIJS学園の生徒なの?」

「一応な」

「へえ。男子は一人しか居ないって聞いてたんだけど。情報が古い

のかしげ

情報も何も、俺のことは学園自体が最近把握したばかりだからな。3ヶ月前までは国の一帯の奴らも知らなかつたわけだし。まあ、言う必要もないか。そんなことを考えていると、横を歩く女子Aはしげしげとこちらの顔を覗き込んでいた。

「あのさ、織斑 一夏は知つてる？」

「一夏つてのはあの天然だろ」

俺が寮から少し離れた方向を指差すと、一夏が篠ノ之と何か口論になつていた。いつも良く見慣れた夫婦喧嘩だろうから、そういうのはほつとくに限る。しばらく観察していると、篠ノ之を慌てて追いかけるよつに、一夏が去つていいく。

「な、なな、なんで…」

横から声が聞こえて向けば、イライラした女子Aが一夏の方をずつと睨んでいる。この反応だと、一夏の知り合いかなんかか？だつたら、ここは数蛇は突付かないに限るな。

「そのまま、まっすぐ行けば寮の正面玄関だから。それじゃ「ちょっとちよつと、あんたも寮に戻るんじやなかつたの？」

俺は前方の寮を凝視して見ると、仁王立ちしたセシリ亞が外に向かつて睨んでいた。こっちにはまだ気づいてない。

「俺は鬼の居ない裏口に行くとするよ。正面に、金髪の子がいるでしょ」

誰が好き好んで捕まる方へ行くというのか。この前の試合のあと、一夏とセシリ亞が試合してセシリ亞が勝つた。どちらも相手の武器を把握していたが、遠距離に徹したセシリ亞に軍配があがつたのだ。しかし、セシリ亞は経験をつんで欲しいからと一夏にクラス代表を譲つた。

まあ、俺のせいで試合形式自体が滅茶苦茶になつたせいもあるが。そんなわけで、今日はクラス一同が一夏の代表祝いと称して騒ぐらしい。俺は行きたくないが、一夏とセシリ亞は強引にでも連れて行く算段らしかつた。

俺が行つたところで、場がしらけてしまうがないうだろうに。外に不服しに行つた理由も、だいたいそこにある。

「なにあれ、あんたの彼女？」

「良いなあ、その発想は好きだな。残念だけど、彼女じゃないし俺には高嶺の花だな」

「ふーん、まあ良いわ。ここまでありがとね。ところで名前を聞いてなかつたわね。私は凰 鈴音ていうの。どうせ、学年一緒だしました会うでしょ？」

「同じ一年なら、そうだな。俺は市隈 喜久。適当に呼んでくれりや良いよ。凰て苗字からして中国人だろ？最近の海外の人って、みんな日本語がそんなに流暢に喋れるん？」

セシリ亞の時もそうだが、IS学園に居る海外人は總じて日本語が上手だつた。この凰て子も綺麗に滑舌が回つてている。

「さあ、それはわからないわね。私の場合は、日本に住んでいたことがあるから」

「ふーん。ハーフかなんかか。悪いな、長話して。それじゃな」

俺は適当に話しきれると、凰を見送つてから寮の裏口へと戻つて行

つ
た。

次の朝、いつもの様に一夏と篠ノ之、最近加わったセシリ亞の4人で教室のドアを潜る。すると、教室は、いつもより少しづつしていた。

4人分かれて各自の席に向かうと、鞄を置いたセシリ亞が俺の机に近づいてくる。一夏と篠ノ之もやってくるのだが、遠巻きに見ると一夏は他の女子に捕まっているっぽく見えた。篠ノ之は基本が一夏に追従なので、まだこちらにはやって来ない。

「なにやら朝から騒がしいようですが。一体なにがあつたんでしょうか?」

「そらあつと、どつかのクラスに転校生なんてのが来たからじゃない?」

俺は昨日会った、時期外れの転校生を思い浮かべながら頬杖をつく。が、行儀が悪いとセシリ亞に睨められ、なくなく頬杖を止めて適当な他の姿勢をとることにした。

「喜久さんは何かご存知ですか?」

「ほら、昨日俺は外に逃げてただる。その時に寮の場所を教えてくれって、そいつに頼まれて案内したんだよ」

「へー。私から逃げている間に、そんなことをしていたんですね」

「何を勘ぐつてんだか。今さら、女子高みたいなとこ来て、女子に夢見たりなんてしないから。この1ヶ月で現実をよく学ばせてもらつたよ」

「そうですか。なら、良いですわ

セシリ亞はにこにこと笑つ。好意もつてくれても妬いてくれるのも嬉しい。本人が俺をどう思つているのかもの気持ちも予想はつく。が、セシリ亞と過ごしていて、毎日ねつとりと甘つたるい関係はそこにはない。今の関係は、まさに母親のセシリ亞と悪ガキの俺という構図と化していた。俺にとっては、そんな状態で恋愛感覚もへつたくろもない。

「それはそうと、昨日案内した凰は教室の入り口で何やつてんだ？」

俺に言われて、セシリ亞がドアの方を向く。そこでは、凰が一夏に向かつて「一組の代表は私よ」と言つていた。そして直ぐに織斑姉が出現し、叱責と出席簿による打撃攻撃をくらう。そんな光景を見ていた俺は、顔面パンチよりあっちの方が良いなと考えていた。隣を見ると、セシリ亞はおずおずと自分の席に退却している。俺は、女子でも容赦なく振り下ろされるあの凶器は、セシリ亞も怯えてるんだろうなど感じた。

—＼／—

午前の授業が終了して、何時もの昼休み風景になる。俺は席から腰を上げると、一夏がこちらを向いて手を上げていた。それを見たクラスの女子達が、恨みがましそうに俺の方を見ている。しようがなく、俺は溜息を吐いて一夏を牽制することにした。

「おい、一夏。俺が邪魔でクラスの女子がお前を誘えずにいるぞ。たまには、他の奴を誘つたら？」

「セシリアのことは、もう済んだだろ。現にセシリアも一緒に飯を食べるようになったたし。大体、昨日はそれを改善しようと、ずっと寮で待つてたのに来ないお前が悪いぞ」

「わかつてるけど、反省する気もないからって、痛え！」

後ろからいきなり耳を引っ張られた。

「何に黙々を捏ねていいのです？早くしないと、食堂が埋りますわよ」

「なにすんだよ……い、やめ、わかつたから」

セシリアに引っ張られて、一夏と篠ノ之が苦笑している。クラスの女子もいい気味だとばかりに笑っていた。俺はピエロじゃないぞクソッタレ。しかし、そんな気持ちも置いてきぼりをくうへりこいて、セシリアが耳を引っ張り続けた。

「待つてたわよ、一夏！」

そして、食堂につけば着くで、今度は例の転校生が待っていた。適当に席を陣取って、昼食を取りながら話をする。聞けば、やっぱり一夏の知り合いだつた。篠ノ之と幼馴染だとは聞いていたが、凰も同じような感じらしい。先ほどから会話を交わしているが、どちらも一夏が好きなのがわかる。はつきり言って、傍から見てる分には面白い。が、当人だつたら嫌な板ばさみだな。俺がセシリアと話していると、凰の顔がぐるりといじらを向く。

「といひでさ、嘉久。隣の人は本当にあんたの彼女じゃないの？」

いきなり話を振られて、今まで話をしていたり聞いていた面子が俺の方を向く。俺は溜息をつくと箸を下に置いた。隣とは、もちろん

セシリアのことである。

「俺とセシリアの関係は、羨む母親と羨られる子供みたいなもんだよ」

「なによそれ？」

凰は「その意味不明な解釈はなんなの」と反応し、一夏と篠ノ之は納得したような顔をする。セシリアは対照的に少し拗ねた顔をした。そして肘内を地味に鳩尾に入れる。

「痛いんだけど、それ。無言で肘を入れるなよ
「おほほほ。何のことでしょうか？」

俺はセシリアのじとつとした抗議の視線を受け流しつつ、再び食べ物を口に運ぶ。そして水を飲んで、口内を空にする。

「とうわけだ、凰。そっちが肴に出来るようなものは提供できな
いよ」

「ふーん。でも、一夏よりぼけてもいなさそうね」

「一夏より酷かつたら、入院確定だろ」

仲良くなつてから聞いた話だが、一夏は両親がいないと言つていた。織斑姉が育てたのだろうが、どうしてそんなに異性関係に疎いのか。

「なあ。何で俺は酷い言われようなんだ？」

「お前が鈍すぎるのだ」

一夏が抗議の声を上げるが、篠ノ之がそれを撃沈した。こうこうことは自分で気づくしかないだろう。というか、篠ノ乃と凰が可哀想なので、直ぐに気づいてやって欲しい。凰が興味を無くして、話が

近況に変わる。するとHISの話になった。

「悪い、俺ちょっと先行くわ」

「ああ、後でな」

一夏が返事をして俺は席を立つ。

「ちょっとー? 待って下さいな!」

食事中今までHISの話は聞きたくない。トレイを片付けるために歩き出すと、少し遅れてセシリアが後を追ってきた。

—＼／—＼／

あれから、数週間の時間が過ぎた。どうも、一夏と凰は喧嘩したらしく、俺とは会話しても一夏は無視されていた。まあ、一夏が何かやらかしたのだろう。そして今日は、クラス対抗戦の当日。俺は人気の無い寮の屋上で煙草をふかしながら、アリーナの活気を見下ろしていた。

なんとも大規模な行事だ。学園で唯一の専用機持ち男子の一夏と、新しい専用機持ちの凰は話題性抜群だろう。セシリアも見に行つたから、今ごろ篠ノ之と隣同士で観戦中にちがいない。

あの二人は協力して、毎日一夏を鍛えてたからな。俺は嫌なので参加しなかつたけど。アリーナから少し視線を動かせば、外に設置されている金の無駄遣いを象徴しているような、一際大きなモニターが目を引く。

「HISにいたんだ」

「はあ？」

後ろを振り返つてみると、初日に会話を交わした貝田がこちらを見ていた。今の俺は手に煙草が握られている。つまり、もう隠すのは手遅れだという事実だけは理解できた。

貝田も少し驚いた様子でこちらを見ている。

「えー、黙つてくれません?」

「どうしようかなー?」

「ですよねー」

もういいやとばかりに、やけになつて俺は隠しもせず煙草を吸う。フェンスに腰掛けると、何故ここに来たのか聞くことにした。

「俺と話してると、他の女子に仲間外れにされる。それに、一夏の試合見に行かなくて良いんか?」

「友達にはトイレに行くつて伝えてて、先にアリーナに行つてもらつてゐる。なかなかこういう機会つて、ないから。市隈君には、どうしても謝りたくて」

貝田は申し訳なさそうに言う。女子同士は男子のそれよりも、付き合い方がめんどくさいことは知っていた。それに、いつもは一緒にいるセシリ亞も今日は試合を見に行つてゐる。貝田はセシリ亞が俺の傍に居ないのを見計らつてたのか。俺は貝田に対してもう手を振ると、吸いきつた煙草を携帯灰皿にしまった。

「別に気にしてないよ。もともとは、授業中に俺が取つた行動が原因だしね」

「それでも、無視してたのは私だし。市隈君が織斑君やセシリ亞さんとかと普通に話してゐるを見て、私が考え方を変えた方が良いな

と思つたの

「さいですか。まあ、どうでもいいけどね。とりあえず、貝田さん的好意には甘えておくよ」

「ありがと」

貝田は「これは仲直りのしるしね」と言つて、背中に隠していた両手を前に出す。そこには缶ジュースが2本握られていて、そのうち一本を俺によこした。特に断る理由も無いので、受け取つてフルタブを開ける。2人して飲んでいると、少しの間を置いて貝田が話しかけてきた。

「市隈君は、なんでISが嫌いなのに学園に入ったの？」

「まあ、やむにやまれぬ事情つてやつかな。そつちは？」

セシリ亞の時は事情が事情だつたけど、他の奴はどうなのだろうか。

「私の理由は単純だよ。ただ、ISに乗つてみたかったから。そのためには猛勉強もしたし、そのおかげで憧れの織斑先生にも会えたし。クラスのみんなは良い人多いしね。前から聞きたいことがあつたんだけど、何で市隈君はISの操縦があんなに上手なの？」

「感覚が良いからじゃ答えにならないよな…。じゃあ問題だ。代表候補生がISに乗つっている時間はどのくらい？」

「え、いきなり！？うーん、300時間くらいって覚えてたけど」

貝田が答える。はい、良く出来ました正解です。俺は空を見上げながら上空に手を翳す。貝田は俺の行動に何をしているのか、ぽかんとした表情で見ていた。

「まあそんくらいだよな。1日1時間として、約一年くらいだろ。じゃあさ、俺が乗つてるのがそれくらいだとしたらさ。まあ、こん

な具合になるわけだ……」

上空からアリーナの方へ飛来する人型めがけて、瞬時展開した腕とさらに展開したスナイパーライフルから弾を発射する。人型は挨拶代わりの攻撃をかわして、こちらを見据えていた。

「煙草のことは黙つといてくれよな

ISを部分展開から全面展開すると、イグニッシュン・ブースト瞬時加速で人型と同じ高さまで上空を一気に駆け上がる。相手の姿を完全に視界に納めると、そいつは異様な光景だった。

全身が完全に装甲で覆われている。こんなISの型は今まで見たことが無い。軍事系列の特殊な物でもこれは何か異質だ。俺はスナイパーライフルを展開しながら前を見据える。普段の校則では普通時のIS展開は禁止だが、今は緊急事態だから知ったこっちゃない。

「ビームに行こうっての? 部外者はやつたと退場してくれよ。全身装

甲さんよ」

「

少しの間のあと、相手からの答えは腕部から発射されたビーム砲だった。

1・9 クラス対抗戦（後書き）

お気に入り、ポイント評価ありがとうございます。ストックを投下致しました。後は、誤字脱字を修正いたしました。稚拙で汚い文書になってしまい、申し訳ありません。

戦闘行為が始まって5分。最初に体当たりで海上へ押し出すと、そこからお互いが得物の撃ち合いによる膠着状態になつていていた。無骨でゴリラみたいな姿形から予想していたが、こつちのラファールよりも向こうの方が明らかに火力が高い。たまに瞬時加速を混じらせながらでないと、避けようもない攻撃もある。

このままだと、いづれはこちらがエネルギー切れでジリ貧になつてしまつ。機能停止させるなら、相手のエネルギーを無くすか核を潰すしかない。核は大抵守りやすい背中辺りにあるはずだ。

やってみるか。

「いくぜ、木偶の坊！！」

喝を入れる為に叫びながら、瞬時加速イグニッショングーストで相手の懷に潜り込もうとする。すると、相手は腕部のビーム砲を止めて、振りかぶりながらパンチングしてきた。

「甘えんだよ」

さらに単発的に瞬時加速イグニッショングーストを連続で使い、ぐるりと相手の背中に回り込む。ライフルを1発を後頭部へ、高速切替ラピッドスイッチで両手にブレードを取り出す。

「避けるもんなら、やってみろ！」

そのまま、両手を相手の背中に振り下ろた。ものすごい勢いで、紫電と火花が散つていく。俺は、俺だけが持っている能力がある。しかし、これにはでかいリスクがつく。迷つてる暇なんて無いからな、忌々しいがやつてやるよ。

「ふきずり出されり、クソッタレ……」

叫んだとたんに、自分の五感が鋭くなる。そして、ピシリと音がする、ブレードが瞬間的に絶対防御を突破したのがわかった。そのまま、背中の装甲へとブレードがめり込んでく。これで終わ

「なん、ぐああ……」

視界が回転する。

「うん、がふあ……」

したと思つたら、今度は何かに叩きつけられた。色が青から、より濃い青へと変わる。混乱したあとで、そこが海中だと気づいた。くそ、視界が霞みやがる。海面に激突したのが効いたか。俺は一息に体制を戻すと、海面から飛び出して再浮上した。

「足掻んで、投げ飛ばしやがって。核^{コア}が背中に無いなんて反則じゃねーか

「

「だんまりか。そら、そつだよな。無人機のくず鉄じや、喋るわけ無いわなあ」

俺の読みが外れて、核は背中に無かつた。目の前で、胸に穴が空いている無人機ISが佇んでいる。そして視線を移せば、初回に消耗した分のせいでエネルギーが100を切っていた。

形勢が一気に逆転して、有利な状況が無人機ISへ傾く。手にはジトリと汗が滲むのを感じる。このままじゃ最悪は殺される可能性もあるだろうか。もう一度、力を使うなんて論外だ。あれは、使い続けると俺自身が危なくなる。

くそ、どうすれば良い？

『市隈、聞こえているか？』

突然、織斑姉から通信に入る。

「冷静な対応なんて出来ないけどな！…今、良いところなんだよ！」

敬語で話す余裕なんてないし、会話を待つてくれる相手じゃない。再び、無人機が腕部からビーム砲を撃ち始めた。

『お前が所属不明ISと交戦中なのを確認した』
『遅い報告よりも、援軍を寄せす連絡だろうな！…こつちは、もう持たねえぞ！…』

俺は戦闘が学園内なので、騒ぎに気づいて直ぐに援軍が来るものと期待していた。が、今はその読みも外れている。

『今、手の空いている教員を大至急向かわせている。あと3分でいい、持たせろ』

『死んだら、絶対に呪つてやるからな！…覚えとけよ体罰教師！…』

俺は集中するために通信を一方的に強制遮断する。正直、3分なんて今の状態じゃ持たない。考えている間にも、どんどん相手の攻撃でエネルギーは削れて行く。イグニッショングースト瞬時加速も残りは最悪2回しか使いない。やるしかないのか。

くそったれ、死んだら本当に化けて出でやるからなーー！

「行くぜ、鉄くずーー！」

俺はもう一度、3年前に決別したはずの呪われた能力を引きずり出す。瞬間、今度は何かが脳天に突き刺さったような感覚に陥つて

全てがクリアな世界に感じられた。

「
」

無人機は両腕を前に突き出して、ビーム砲を打ち出してくる。

「遅せえ、んだよーー！」

まっすぐ突進しながら、ビーム砲を直視だけでかわしていく。俺の目には、視界の入る全てが止まったように見えていた。ビーム砲の弾幕を抜け切り、相手の無人機を前にしてブレードを発生させる。俺は勢いよく、そのまま両腕を振りあげた。敵が砲撃を止めて、そこのまま俺を殴りとばそうとする。俺は最後の瞬時加速を使って、ギリギリのところで無人機の側面に回り込む。

「顔ががら空きだぞ、鉄くずーー！」

「これで核^{コア}があるとしたら、人の顔^{コア}が普段ある頭部だ。それじゃなくとも、せめてカメラを仕込んでそうな視界だけは潰してやる。

「ぐりえやあ！…」

もう一度、無人機の絶対防御を突破する。ブレードは相手の顔^{コア}を捉えるとそのまま、顔面にめり込んでいく。

「ぐう…！」

後ろを取つたわけじゃない。無人機の腕^{コア}が俺の体を鷲掴みして握り潰そうとしていた。ラファールの装甲が、ひしゃげた音をどんどん増やして悲鳴を上げていく。俺はそれを無視して、力の限り叫ぶ。

「く、た、ば、れええ！…」

数秒後、綺麗に無人機の頭を吹き飛ばした。無人機の腕^{コア}がだらりと下がる。やがて、停止そのまま力なく海中へ落下していった。核^{コア}は潰せた手ごたえはないが、エネルギーは切れたらしい。

「俺の方が一枚上手なんだよ、ざまあみろ！」

結局は援軍が来る前に、俺が無人機を壊して戦闘は終わった。だるい、眠い。俺はもう嫌だぞ、こんなの。

――――

無人機I-Sの破壊を終えて、勝手に自室に戻る。そこで初めて気を

抜いた。俺に貸し与えられたラファール＝リヴァイブは、もはや半壊の様相を呈している。だけど、今はそんなこと知ったこっちゃない。

「はは、だつせえ。異物に頬つちまうなんて最悪だな」

自嘲氣味に咳き、一と切れたように思わず床に倒れこむ。全身の発汗作用が止まらず、体中がガクガク揺れる。3年ぶりに使ったITS TS『IS同調システム』は、とても反動のきついものだった。強い力には跳ね返りも強い。使用の代償は、俺の寿命だ。今回せいで、確實にそれを蝕んだらう。鏡に自分の像が写る。そこには見慣れた赤髪はなく、白髪で真っ白だ。眼球も真っ白になっていた。こうも完全に色が変わってしまった、最早1時間は元に戻らない。しううがないとは言え、とても見慣れたくない姿だった。

キィッとドアの開閉音が聞こえる。頭だけ動かしてセシリ亞の姿が目に入った。クラス対抗の試合が終わって戻ってきたのか。

「…よお、お帰りさんだな」

「喜久さん！大丈夫なのですか！？なぜ髪の色が変わっているのです！？」

セシリ亞の困惑した声だけが耳に入る。声も籠つていてるような聞こえ方しかしない。第一、自分がちゃんと喋てるかもわからない。が、人が来たのなら後はお願ひしてしまえば良い。俺は樂になりたいとばかりに、その場で意識を切り飛ばした。

学園内の一室は薄暗く、光源はとしては青白い発光色に照らされている。そんな中で無人機IRSが寝かされ、スキヤニングをかけられていた。

「先ほどから調べていますが、登録されていない核コアでした」
「そうか」

教員である、千冬と麻耶が会話を交わす。

「IRSの核コアは世界で467しかありません。しかしこれには、そのどれでもない核コアが使用されていました。どこから、誰が一体こんなことを…」

「それもそうだが。まさか、無人機がこんな状態で回収されるとわな」

お互たがい、疑問は尽つくきることがない状態だった。麻耶が続けて報告を行う。

「無人機の状態も頭と胸部が欠損しています。随分激しい戦闘を行つたようですね。しかし、これは一体どうしたら…」

「無理やり絶対防衛を突破した結果だろう。しかし、尋常ではない威力がなければ無理だがな」

疑問の焦点が核コアから、もう一つの問題へとスライドしていく。現在、

彼女達は一つの問題で悩まされていた。

「市隈君ですが、彼の個人履歴は本当なのでしょうか？」

「政府直轄で通達が来た人間だからな。中身の公表も殆どされていない。麻耶、これを見てみる」

千冬が手元に持っていたファイルが麻耶に手渡される。それには、喜久から一時回収されたラファールの行動履歴が記載されていた。しばらくすると、麻耶が絶句した表情になる。

「これって、戦闘の際の動きや切り替えも凄まじいです。ですが、記載されている同調率が、ところどころで計測不明なのは一体なぜでしょうか？」

「これはあくまで仮定だが、100%を超えたのだろう。私としては、それ以外に説明がつかん。それにしても、これではISに選ばれた男というよりは、ISのために作られた男といった感じを受けるな」

二人して思考の渦に呑まれそうになる。麻耶は不安な顔をして千冬を見た。

「それにな。もう一点だが、オルコットから妙な報告を受けた。試合観戦の後に部屋に戻ったら、市隈の髪と眼球が真っ白に染まつていたそうだ。しばらくしてから元に戻つたらしいが。それも関連性があるのかもな」

「…彼は一体何者なのでしょうか？」

「さあな。だが、いざれは本人に聞かなければならないだろつ」

沈み込んだ雰囲気は誰しも好ましくない。千冬はわざとらしく肩を浮かせて苦笑いした。

「まあ、それじゃなくても手のかかるガキには困ったものだ」

「そう言つてますが、手の掛かる子はそれだけで愛着が湧きますよ

ね」

追従するように麻耶が言葉を返す。

「そういうものか？」

「そういうものですよ」

麻耶が笑い、つられて千冬も笑う。

「まあ、感情が素直に出やすいからまだ可愛げはあるがな。さて、
こいつの解析を済ませてしまおう」

「はい」

2人は再び作業を再開した。

— 11 —

「目が覚めましたわね」

セシリ亞の声が聞こえた。俺が意識を手放してどのくらい経ったんだろう？ 目だけ動かせば、俺の周りにはセシリ亞の他に、一夏、篠ノ乃、凰がいる。そして、いつもより一人多く貝田が追加されていた。依然として全身が疲れを訴えていたが、俺は構わずに身を起こす。

「おはようさん」

「嘉久、体の調子はどうだ？」

「おおかた大丈夫かな。悪いね、心配かけたな」

俺は、無理やり背伸びをして体に鞭を打つ。しばらくは、抜けなさそうなダルさに軽く嫌気がさした。時計を見れば、夜の8時を回っている。うーん、寝すぎだな。

「貝田さん、いきなり話きつて悪かつたな。教師に連絡してくれたのって貝田さんでしょ？」

「ええ。それより、本当に大丈夫なの？ さつきまではあんなに髪が白かったのに」

思わずぞきつとして、周りを見渡した。脳裏には恐怖感が渦巻く。

「あら、見ちゃったの。理由を挙げるなら、俺は特異体質でちょっとだけ体が変なんだよね」

「それより喜久、俺たちはアリーナに居たんだ。それなら、直ぐに助けを求めれば良かつたのに。なんで一人で戦つたんだ？」

一夏が話をすらしてくれて、恐怖感が薄れる。

「そうですね。会場には私もおりましたのに。なぜですか？」

一夏とセシリ亞が俺を見て怒っている。あの無人機に向かって行く時、後で言われると思つていたことだ。もちろん、言い訳は用意している。

「焦つてて、余裕なかつたんだよ。一夏のねーちゃんと通信会話もしてたけど、すごい暴言しか吐いてないし。それにさ、アリーナは人だらけじゃん？そんなところに突っ込むわけにも行かないでしょ」「本当はどうなんだ？」

一夏が俺を見据えながら言う。いやに突っ込んでくるな。なんだよ一体さ。

「なに？それしかないけど。じゃあ、本音を言えば1人の方がやり易かつたからだよ。俺以外は足手まといだつたからだ」

「アンタ！！それが、心配した人たちに言うセリフなの…！」

黙っていた見ていた凰が、いきなり噛み付いてきた。こりや、殴られるかな。そう思つていたら、一夏が凰を手で制止する。なんだ？

「鈴、ちょっと待つてくれ。喜久、お前ぞ。誰かが傷つくのが嫌だつたからじゃないのか？」

「俺にそんな良心なんてないぞ。大体ISが大嫌いな人間がそんなことするかよ！」

おいおい、なんで今のお前は変に鋭いんだ？

「喜久がISを嫌いなのは知ってるよ。でも、俺や他の連中とは普通に接してるのはなんでだ？お前つて、ISは嫌いだけど人は嫌いじゃないからだろ。違うか？」

一夏の澄んだような黒い瞳が俺を見る。俺は少し沈黙した。
たく、くさいセリフ平氣で吐きやがって。俺は話を続けるために口を開く。

「アリーナに被害はいつてないだろ？一夏は今日、勝ったのか？」

言つた途端、凰が苦虫を噛み潰した顔をした。対戦相手は君だつたのね。俺は対戦表ぐらい見とけばと、少し失敗感を感じる。しかし、勝つた一夏も嬉しくなさそうな顔をしていた。

「ああ、お前が守ってくれた試合だからな。勝つたよ。でもな、次からは必ず俺たちに頼れ。試合なんかより、お前が傷つくのを止められない方が俺は嫌だからな」

「そうですね。何も知らずにいる方が、辛いです」

すっと、少しだ緊張の糸が解れるのを感じる。思ったよりは、ここで俺の存在を認めてくれる奴らがいるんだな。俺は一夏とセシリ亞に心の中で感謝した。

「わかった。次からは、必ず知らせようとしてしますよ。一夏、右手出せ

「あん？」

わけもわからずと叫んだ感じで、一夏が右手を俺に差し出した。

「違うよ。握つて出すんだ」

俺は一夏の握つた右手に、自分の右手を軽く打ちつけて静止をせる。

「おめでとせん」

「おお、サンキューな

中学以来、男同士の碎けた会話が愛おしく感じる。だから前が当たり前で、今がストレスの連発だと感じていた。しかし一夏と知り合ったおかげで、ここでの生活も少しあまんざりでもなさやつだ。
そして、当たり前のよう恐怖の時間がやつて來た。

「市隈、体の具合はどうだ？」

「つおつー..」

ノック無し、ドアの開閉音無し、歩行音も無い。いつからそこにいたんだよーー一夏の横からスライドするよつて、軍曹織斑姉が現れた。当たり前だが、他のメンバーも驚いて一步その場から離れている。

「何を驚いている。私も鬼じゃない、今のお前を殴ることはないから安心しろ」

「はあ

ああそうだ、俺は暴言を吐きまくつたんだよな。今度はどんなだけサンドバッグにされるんだ？

「お前に渡したラファール＝リ、ヴァイブだがな。随分派手に壊してくれたので、回収して修理の方に回したぞ。それとな、お前は今回

ISの無断展開使用で、一週間の謹慎処分が学園から通達された。

良い機会だ、一週間は部屋に籠つてそのまま休んでいい「ひ

「なんでそんな温いんだ？退学にしてもおかしくないだろ？」

俺の発言に、織斑姉は軽く溜息をついた。

「教師には敬語を使えと言つていいだろ。まあ、今回は学園を守つたという大義名分があるんだ。しかし、ナジめはつけなければいけない。学園長は擁護側だったがな。しおがなく罰したというのが、本当のところだろ？」

「そ、すか

俺は気が抜けたように背中を丸めた。

「市隈」

「まだ何か？」

「今日は、あの状況でよく凌いだ。良くやつたな

「は？」

俺はぽかんとして、織斑姉の方を見た。え、なに？なんか今、褒められたの？俺が？

「お前、今日はもう時間だ。さつと寮に戻れ」

織斑姉がみんなを保健室の外へ追い出していく。俺は、一緒に退出しようとする織斑姉に慌てて声をかけた。

「先生、ちょっとー」

「何だ？」

「迷惑かけました」

「 そりゃ。だつたら、今の反省は今後の態度で示すんだな」

笑った顔のまま、織斑姉はドアをスライドさせた。俺はしばらく保険医が来るまでの間、狐につままれたようにしていた。

クラス対抗戦が無事に終わって、外は緩やかな空氣に包まれている。五月病なんて言葉があるが、俺の五月病は女子の空間に慣れすぎて麻痺したことかもしれない。が、俺の横ではもう一人、それに慣れちまつた人間が一緒に教室へと向かっていた。ちなみに今は六月の梅雨を迎えていた。

「なあ一夏」

「ん、どうした?」

「何で、ここつて男子が少ないんだろ?」

何を今更と言つたような顔で、一夏が俺を見返してきた。

「貴方たちが他の殿方と違つているからでしょう。それよりも、そのだらしない姿勢を直しなさいな」

一夏とは俺を挟んで反対側を歩いていたセシリ亞が、ありがたくな注意をとばす。凰と篠ノ乃は一夏を挟んで反対に並んで歩いている。

「しかし、なんで俺らの部屋は別々なんだ。一夏は、なんでか聞いてない?」

「いや、なんも知らん」

2人して首を捻る。そう、セシリ亞との精神的に落ち着かない同居

生活は、このほど教師の天の声で終了を告げた。そして、蓋を開けて引っ越してみれば、一夏との同室にはならなかつた。これが腑に落ちず、俺は織斑姉の不敵な顔を思い浮かべる。前回は、本当にほめられたと思った。だからこそ、今回も考えてしまつ。

「私としては、同室でも構わなかつたのですが……」

横でぶつぶつとセシリ亞がぼやく。

「この国は、男女7歳にして同衾せずっとな。それじゃなくとも、今までがりえない状態だつたんだよ」

「なにそれ。アンタ、ジジ臭いよ」

「なに！？ そんなことはないぞ」

俺の言葉の変なところに凰と篠ノ之が反応した。俺たちは「またな」と言って凰と別れ、そのまま教室のドアを開ける。ついで、いつもと違う違和感を感じた。

「なんだよ。これが理由か」

「理由とは何だ？ 先がつかえるぞ、進んでくれ」

俺が先頭で教室に入ろうとしたために、後ろでつつかえた篠ノ之が声を上げた。俺は進みながら指を2回ほど別々の場所へ指し示す。

「ほら。他の連中は気づいてないけど、机が一つ増えてないか？」

「あれ、ほんとだ。喜久よく気が付いたな」

一番後ろの列に見慣れない、はみ出した机が二つ並べられていた。

「もしかしたら俺と一夏のほうか、篠ノ之とセシリ亞のどちらかに

ルームメイトが増えるかも」

「なんですの、それ！！喜久さんの部屋に女子が来ると云ひ」とですの！！」

「冗談ではないぞ！！一夏の部屋に女子が来ると言つのが……」

「うお、なんで2人して俺に食つて掛かるんだよ。そういうのは、一夏だけにしてくれ。俺は、一夏の方を向きながら話を進める。

「まあ普通は転入生ならそうだろうさ。とはいへな、それじゃあ俺と一夏が同居から外れる意味がないだろ。そしたら、最低1人は男だろうつて結論は考えられない？」

「でもよ、それじゃあ世界で1人を扱える男はそいつを含めて3人にならないか？そんなに、ぽんぽんと男の適正者つて見つかるもんなのか？俺は来るのは女子だと思つぞ」

一夏の馬鹿野郎。そこでまた、女子なんて単語を出すんじゃねーよ。

「一夏あ！！お前は、女子が来た方が良いのか！！」

「一夏さん、不健全ですか！！」

「なんでだよ！！俺は、ただ単に予想しただけじゃんかよ……」

矛先が俺から一夏のほうへ向ぐ。俺は一步下がつて、呆れ顔でその様子を眺めた。しようがないな、まったくよ。

「なあ、賭けないか？転入生の最低1人は男かどうか。俺は男だと思ふけど、一夏は？」

「良いぜ。喜久が男子なら俺は女子にする。どう見てもそっちの方が可能性が高い」

助け舟とばかりに一夏が話しかけてくる。

「学生が、そんなことしていいわけないだろ？！私はやうんぞ！」

「」

「あら、では私は分の悪い方が愉しそうですので、男性に賭けさせて頂きますわ。篠ノ之さん、意外とお堅いのですね」

ぎょっとして、篠ノ之がセシリ亞の方を見る。セシリ亞が意外とノリが良いのにびっくりしてゐるのか。いや、賭博はイギリスが本場だぞ。イギリスの競馬場は社交場でもあるんだからさ。チャイムが鳴ると、俺たちは各自の席に座り、教師2人が入ってきた。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介しますー！しかも2名です！」

「え……」

「「えええええつー？」」

朝のホームルーム中に山田先生が告げた報告で、一気に教室内が騒がしくなる。数秒遅れて教室のドアがスライドすると、2人の生徒が教室に入ってきた。

「失礼します」

「……」

俺は一夏のほうを向くと、当の本人はそんな馬鹿などでも言いたそうな顔をしていた。篠ノ之も呆気にとられている。セシリ亞と2人して満足げにアイコンタクトしあうと、俺は前を向いて転校生を確認した。

そして、実は一夏のほうが当たりかも知れないと思つた。

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。この国では不

慣れな」とも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします「

フランスの方が挨拶する。柔軟な笑顔を皆に向けるが、俺は一番後ろの席から食い入るよつに観察していた。金髪を後ろに束ねて、中世的な顔をしている。男にしては体が角張つていないので、スマートさが際立つて見えた。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を」

誰かが声に発し、丁寧にデュノアが返事をする。

「ちゃんとした、3人目の男子！！」

「根暗に見えないし、どつかの誰かとは全然違う！！」

「美形の男子が2人もうちのクラスにいるなんて！！」

拍手喝采で女子に迎え入れられるデュノアに対し、対比として俺が槍玉に上げられる。一瞬、昔みたいにぐれてやろうかと思考が過ぎつた。

教師2人は騒ぎを止めるために口を開く。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんまだ自己紹介が終わってません。静かにしてください

」

もう一人の銀髪が姿勢を正したまま、微動だにせず立っている。肩より下に伸びた髪とナチ党みたいな黒い眼帯が特徴的だった。だが、独特の威圧感のようなものがその特徴を圧倒している。背はシャルルより低いが、そんなことを感じさせない軍人のような印象を受け

た。なんか、ヒトラー・ユーゲントみたいだな。

「……挨拶しり、ラウラ」

「はい、教官」

呼ばれた女子は、織斑姉に素直に従つている。教官なんて呼んだってことは、前のどこかの教え子か?しかし、織斑姉はめんどくさそうにしながら続きを喋りだす。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒とかわらん。呼称は先生を使え」

「了解しました」

自己紹介で、随分面倒臭い状態になつてゐるな。ラウラが織斑姉から生徒側を向いて、俺らを見据える。へえ、随分蔑んで見るんだな。姿勢を正すと、ただ一言だけラウラは自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……あの、以上ですか?」

「以上だ」

しばらくの沈黙の後で山田先生が続きをうながすが、当人はきつぱりとそれを拒否した。続けて、ボーデヴィッヒは俺のことを探差しながら睨み付ける。なんでだよ。

「お前が教官の弟か?」

「はあ?髪の色が違うだろ。一夏はお前の皿の前にいるよ。なんだよ、片目のせいで見えにくいいのか?」

俺が指摘すると、無言でこちらを更に睨みつける。

「貴様、後で顔を貸してもいい。お前が織斑教官の弟か？」

「やうだけど」

一夏が答えると、ボーデヴィッシュはその場で激昂した。

「貴様が！」

パンツ

綺麗な音が教室内に木霊す。すげえな、綺麗に一夏の頬を叩きやがつた。おいおい、なにやってんだよ。

「こきなりなにじやがる！…！」

「ふんっ」

一夏が怒って席を立つと、ボーデヴィッシュはそのままつかつかと無視して歩いていく。俺の横を通り、空いている席に無言で座った。そして、それは位置的に俺の真横になる。

「貴様、逃げるなよ」

ボーデヴィッシュが小声ですごみながら、こっちを見てきた。あとは、機械のように静かに前を向き続ける。俺にも平手打ちつてか。そんなの、絶対ごめんだね。俺はにやりと笑って、先手を打つてやうつと手を上げた。

「先生、ボーデヴィッシュさんが部屋に忘れ物をしたそうです
「なに、本當か市隈？ここに来て、まだ不慣れなのはじょうがない
か。ラウラ、何を忘れた？」

いきなりのこと、ボーデヴィッシュが戸惑い俺の方を睨みつける。

その後、立ち上がって姿勢を正すと、織斑姉に答えた。

「いえ、何も忘れていません。ん？な、そんなはずは！！」

「なんだ、何か忘れたのか？ならば今すぐとりにいって来い。時間は厳守だからな、この後の授業には遅れるな。各自、着替えて第2グラウンドに集合だ。今日は2組とISの模擬戦闘を行うので、迷惑をかけないようにな。解散！！」

織斑姉はパンパンと手を叩いて、先を促す。まあ、恥をかかすならこんなもんだる。俺は手に隠し持っていたボーデヴィッシュの部屋の鍵を奴に向かつて軽く放った。

他の方を向いていたボーデヴィッシュは、即座に反応してそれをキヤツチする。なんてことはない、さつき俺の横を通りかいにボーデヴィッヒから掏つただけだ。

「手癖が悪いのが特技なんだ。俺は急ぐんで、用があるならまた今度な」

「貴様……」

一拍の間を置いてから激昂するボーデヴィッシュを無視して俺は席を立つ。そのまま、逃げるよろしく教室の出口へ向かうと、いきなり後ろから襟首を引っ張られた。

「うぐお、誰だよ……」

「私だが？」

見ると、織斑姉が後ろに一夏とテュノアを従えていた。

織斑姉が後ろに一夏とデュノアを従えている。そのまま、廊下に引き釣り出されると、やつと襟首を離された。俺は、喉の調子を確かめながら半眼で織斑姉を見る。ちなみに、俺を追いかけてきたボーデヴィッシュは、織斑姉を見て悔しそうに引き下がつていった。

「時間厳守じゃ？」

「織斑とお前で、デュノアの面倒を見ろ」

二人で見る必要なんてないだろ。俺は嫌々な顔をしながら答える。

「一人で十分なんじゃないすか？」

「デュノアはお前のルームメイトだ。しつかりみてやれ」

デュノアの部屋の割り当てが、なんで一夏でなく俺なんだよ！…くそ、強制的に決めやがつて。これが教員特権てやつなのか。次から次へといらないものを俺の頭に落としきやがつて。

「嘉久、数少ない男子じゃないか。お互ひ助け合あうぜ」

「あのなあ」

俺は溜息をついてデュノアのほうを向ぐ。

「ごめん、迷惑だったかな？」

「はあ。…着替えに行こうぜ、デュノア。それじゃ、急ぐんで」

俺は織斑姉に礼を取つてから、三人で歩き出す。そして、廊下の角を曲がったところで今度は女子の一群がやって来た。多分、デュノアを見に来たのだろう。俺はしょうがなく、デュノアの手を掴んで早歩きをする。

「え、ちょっと」

「なんだよ、おい」

デュノアと一夏が、戸惑つたように声を出した。面倒を見ると言われたのはデュノアだけだ。後は知らん。俺は早歩きから、ダッシュに変更して走り出す。

「遅刻したくなれりや、一気に突つ切るぞ」

「うわあ！！」

俺は悪評のせいで、周りの人だからが十戒のようにして廊下の真ん中を開いていく。しかし、一夏のほうで、潮が引き返すように入間の壁が出来上がって行つた。デュノアを捕まえられない分だけ、全て一夏へ集中されていく。

「待つてくれ市隈、デュノア！！」

「あ、え、あれ、大丈夫なの！？」

「先に行つてるぞ、一夏」

後ろで薄情者とか呼ばれたが、気にしないことにした。更衣室に到着すると、後ろから一夏が息切れしながらやってくる。

「たす、けて、くれたつて、良いじやんかよ…」

俺は、水の入ったペットボトルを投げて渡す。一夏は蓋を回して開けると、それを一気飲みした。デュノアが思わず一夏に声をかける。

「大丈夫？」

「女子に群がられるのは、俺のせいじゃないし。時間ないから、早く着替えて集合場所行こうぜ」

扉を開けてロッカールームに入る。俺は適当なロッカーを開きながら、デュノアのほうを向いた。

「俺の呼び方は適当でいいから。なあ、呼び方はデュノアで良いのか？あとさ、デュノアってフランスの会社に同じような名前があるけど？」

「そうだね、僕の父はその社長だよ。呼び方は喜久でいいかな？僕のことはシャルルで良いし、織斑君もそう呼んでくれると嬉しいな」

「ああ、わかった。しかし、社長の息子かー。道理でさ、気品みたいなもんがあると思った。シャルル、俺も一夏で良いからな」

「よろしくね一夏」

シャルルのしぐさを観察していくと、俺の中で核心だけが深まっていく。それにしても、戦争屋の子供がご入学か。良い宣伝にはなるだろうな。そう思いながら上を脱いで、着替えを取り出す。

「うわ！？」

「どうした！？」

デュノアが叫び声をあげて一夏が反応する。なんか阿吽の呼吸みたいだな。くだらないことを考えながらシャルルのほうを向くと、シャルルは両手で顔を覆つて下を向いていた。

「『めん、なんでもないよ…』

「？」

一夏は原因がわからず俺は判つたために、やつぱりなと内心で溜息をついた。気づかない一夏もだが。シャルルもなんで、男装なんぞ馴れないことしてんだ。

「一夏に喜久さ。ちよつと向ひに向ひて着替えてくれない？」

「？？？　いやまあ、人の着替えジロジロ見る気はないが……つて、シャルルはジロジロ見てるな
「見てない！別に見てないよ！？」

一夏に指摘されたシャルルが慌てて否定する。しううがない、少しいじつてゲロらせるとか。そう思いながら、俺はシャルの近くに歩み寄つた。

「なあに、女子みたいなことしてんだよ」

俺はシャルルの尻をスパンと叩く。

「ああああーーーな、何するんだよーーー！」

すると、シャルルが泣きそうな顔をした。俺は氣にせず言葉を続ける。

「何言つてんだよ。野郎同士じや、こんがらこ普通だろ？なあ、一夏？」

「うーん、そうだな。まあ、体育会系の部活じや当たり前だな
「えええ、そうなのお？」

シャルルは情けない声を上げてその場に崩れ落ちそうになる。

「喜久、シャルルは慣れてないみたいだし。今後はそういうの、やめてやれよ」

「一夏ああ

そして、一夏の言葉に復活して心の底から喜んでいる。まるで餌と鞭みたいなだな。俺はわかつたよといいながら着替えを続ける。すると、シャルルは慌てて一人だけ、ロッカールームの反対側に移動した。俺はそれにかまわず、反対側に聞こえる声の大きさで話を続ける。

「それより、一夏や俺の着替えだけで反応するなんてさ。シャルルつて、同姓に欲情するタイプか？」

「…え？」

俺の言葉に一夏がびっくりした顔をしてこちらを向く。すると、既に着替え終わつたらしいシャルルが、真っ赤な顔して飛び出していく。

「ゲイなら先に言つといってくれよ。国や文化が違つても俺は受け入れるからさ」「ない！…それだけは絶対にない！…」

かなり必死の形相に一夏が引いてしまう。そんなシャルルの猛烈な抗議に、俺は笑いながら対処する。結局、見かねた一夏が止めに入つた。

「おい、落ち着けシャルル。喜久、お前も煽るようなことすんな」「つい、からかいやすそうなんで」

「つ、いー？ つ、いつて、どうこ、う」と…。」

本当は早くぼろを出すか、正体を明かして欲しいんだけどな。シャルルを見ると、今のところはまだ耐えているように見えた。俺は着替えを終えると、ロッカーを閉めて扉の方へ歩き始める。

「悪気はないんだ、それじゃ遅れないように行きますかね」

「おい、ちょっと待つてくれよ。てか、シャルル着替えるのはや！なんかコツでもあるのか？」

「い、いや別に……って、一夏まだ着替えてないの？」

一夏は、まだ半分くらいしか着替えていない。俺は時計を見て、これは遅刻確定だなど内心で覚悟を決めた。それにしても、どういう仕組みのスーツなのか年頃のシャルルの胸が殆ど平らだ。制服はわかりにくいが、どうやって胸を抑えているのか。着ている本人が苦しくなさそうなので、体系を隠せる機能に感心する。

「これ、着るときに裸だろ？ 履こうとすると、引っかかるんだよ」「ひ、引っかかるって！？」

俺がシャルルにしたセクハラより強烈だな。気づいてない一夏のほうがわかっていない分だけ、発言がストレートだ。なので、シャルルは顔を真っ赤にしてしてもじもじしている。

「… なあ、シャルル。その行動じや勘違いされてもしょうがないぞ」

俺が言うと、はつとなつたシャルルがこちらを向く。男連中の中に1人だけ女子が放り込まれると、こんな感じだろうか。

「だから、違うって……」

「じゃあ、お前の好みのってどんなの?」「えー?」

俺がシャルルに質問すると、困惑した表情になる。

「え、えっと。優しい人かな」

「そう言つお前はどうなんだ?」

すると、着替えが終わつた一夏が俺に話を振つた。

「そうだな。乳と尻がでかいだけのお頭の弱い女かな」

「…喜久、さいてーだね」

シャルルが死んだ魚のような目で、じつりを見た。一夏も「なんだよそれ」とシャルルに追従していく。

「まあ、本当は違うけどな。そういうえば、シャルルは向いつの口いのとか持つてきてるか?」

「そんなもの、ここには必要ないでしょ。持つてきてないよ

「持つてきてないってことは、持つてほいるんだよな?」

俺の回答に、もはや投げやりだったんだろう。適当に答えたのが失敗して罰の悪そうな顔をしている。俺が何もしていないのに、勝手にドツボにはまつたよ。

「向こうつてモザイクもないんだる。過激なのも多いのか?」「知らないよ!! 僕は先に行くからーー!」

つこと、シャルルは限界を超えたらしい、キレて先に行くために走

り出した。

「どうせ遅刻だしな。俺はゆっくり行くけど、一夏はどうする?」

「おまえ、シャルルをいじめすぎだ。あれじゃ嫌われるぞ」

そう言って、一夏はシャルルの後を追いかける。俺は、欠伸をしながらグラウンドを歩いていった。

俺が歩いて集合場所にたどり着くと、既に授業が開始されていた。一夏とシャルルは既に混じって話を聞いている。一番後ろに混ざるうとすると、織斑姉が授業を中断して俺を呼び止めた。

「市隈、お前が一番最後だ。何をしていた？」

「遅刻が決まっていたので、諦めてゆっくり歩いて来ただけですけど」

はあ、と織斑姉が両手を腰に当てて溜息を吐く。織斑姉の中で俺の評価が駄々下がりだろうが、もう既に底に着地しているので落下しようもないだろうな。

「市隈、これはお前のだろ？」

そんなことを考えていると、織斑姉は手に収まるサイズくらいのものを俺に向かって軽く投げた。すかさずキャッチすると、手に重みが加わる。それは、ラファールの待機状態になつていてのアクセサリーだった。

「ラファールの修理が終わつたのでな。次は壊してくれるなよ。それと、お前には遅れてきた罰として、模擬戦闘をしてもらひ。良いな？」

全然良くない。反抗したくてしょうがない。だいたい、ISなんて

もう持たなくて済むと思ったのに。俺が嫌そうな顔をすると、織斑姉はそれ見て軽く笑つた。

「はあ。イエス。で、相手は誰ですか？」

「お前が遅れている間に、説明は既に終わっている。相手は凰とオルコットだ。お前方には山田先生がつく」

「よ、よろしくお願ひします」

織斑姉に言われ、IRSを装備したままの山田先生は律儀に頭を下げてきた。セシリアと凰は準備万端と言つた感じで、こっちを見ている。なんか、妙にやる気があるようを感じる。織斑姉に何か吹き込まれでもしたのか？

「鈴さん、喜久さんは氣を抜ける相手ではありません。最初から全力で行きます」

「なによ、そんなに警戒しちゃって。喜久って、そんなに強いわけ？」

「やればわかります。向こうは、山田先生と私が5人はいると仮定してください」

「へえ、それは意外と歯ごたえがありそうね」

前回、戦闘をしたことがあるセシリアは明らかに俺を警戒していた。おいおい、5人分は過剰評価しそうだろ。対照的に俺と対戦経験がない凰は、余裕の笑みを浮かべている。そして山田先生の扱いが軽く、蚊帳の外に置かれていた。

ひどいな。仮にも先生なんだから、生徒より弱いわけないだろ！。俺はIRSを展開すると、山田先生に話しかけた。

「山田先生、俺が場をかき混ぜるんで。適当に後ろから、あいつ等を誘導して詰めてください」

「はい、わかりました」

俺は山田先生にお願いして、ISの状態をチェックする。別段変わつたところなく、特に問題なく動くみたいだな。一通りチェックを済ませていると、音声センサーがシャルルと一夏の会話を拾った。

『ねえ、一夏。喜久が乗ってるのってラファールみたいだけど。彼つて強いの？』

『それがさ、セシリ亞とやつた時は、あいつ最初はわざと手を抜いててさ。真面目にやれば一方的過ぎて、千冬姉が止めてたけどな。初回からちやんとやるのは、今回が初めてじゃないか？』

悪いな一夏、正直いって真面目にやるかどうかは悩んでる。

『あんなに変態なのにエスを操るのが上手なのなら、なんかずるいね』

『うーん。あいつ普段は下ネタなんて、あんまり言わないんだけどな。あそこまでしつこいのって、正直いって珍しいぞ。実はあいつも新しい男子が増え浮かれてるのかも』

浮かれてもいいし、シャルルの中じゃ俺は変態が確定か。意識を切り替えて織斑姉の方を向くと、模擬戦開始の合図が出よつとしていた。

「始め……」

4人で一斉に上空へ上がっていく。俺は誰よりも早く動き出し、瞬_{イグ}^{ン・アースト}時_{イグ}^{ン・アースト}加速で凰の後ろを取ろうとした。

「甘いのよ……！」

すると、両手にある斬撃武器見たいな二刀を連結して、一刀の得物を勢いよく振りぬいてくる。画面には双天牙月なんて名前が表示されていた。

「一つとつたぞ。俺は、一夏みたいに直線的な動きはしないよ」

瞬時加速からの一回目の瞬時加速で変則的な動きを加えて、双天牙月を避けきり凰の後ろを取る。

「それじゃな
「ぐう……」

そのまま凰の背中に蹴りをお見舞いして、反動を利用し加速する。続いてやつて来たブルーティアーズの4つ分のビットとライフル攻撃をそのまま紙一重で避けきった。

今度は垂直に上がり、セシリアと凰から距離をとりつつスナイパーライフルを取り出す。下を見れば、山田先生がスナイパーライフルの射撃で見事に2人の行動パターンを削っていく。

面白いように、みるみる2人の逃げ道が消されていく。そんな中を、凰が強引に突破して俺の方へ向かってきた。

『喜久……よくも、踏んづけてくれたわね……』
「あー、女子の怒った顔は怖いね」

俺は急降下して、タイミングを計りながら一気に凰へと接近を開始する。さつき見ていたが、凰の奴は突破していく際に山田先生に向かつて、肩から見えない砲弾を打ち出していた。

しかし、ラグがあるらしく撃ち出すまでにほんの少し時間を食う。なら、撃ち出される前に近づいた方がいい。咄嗟に俺の読みに気づく

いたらしい凰が、再び双天牙月を構える。俺はそれにかまわずスナイパーライフルを逆さに持つて、フルスイングしながら突撃を敢行した。

スナイパーライフルは射撃武器で、打撃武器じゃない。一発で凰の双天牙月に粉々に破壊され爆散する。

「へりええーー！」

凰が双天牙月を振りぬいた勢いで、一回転しながら切り込んでくる。しかし、その瞬間に凰の腹部で衝撃と爆発が起きた。

「が、ぐうー？」

奴が驚いた顔をして見ると、俺の手には新しいスナイパーライフルが現れている。

「なんでそんな早い展開ができるなんてって顔してるな。手品みたいだろ？」

瞬時展開でもう一丁ほどスナイパーライフルを取り出して、面射撃を行う。

「きやあー！」

「ライフル一本壊したぐらいで、油断してんなよ」

殆ど間近にいた凰は、俺の攻撃を両手で庇いながら防御一辺倒になる。ハイパー・センサで位置を確認すると、山田先生がセシリ亞をこつちに誘導してきている最中だった。

「じりや詰んだな」

俺は急いでその場から離脱する。すると凰から距離を取った瞬間に、セシリ亞のブルーティアーズが凰機に激突した。

お互い一瞬のこととで、何がなんだかわからないのだろう。案の定、凰は俺と勘違いしてセシリ亞を殴り飛ばしかける。そして、山田先生はタイミングを見計らうと、2人同時に当たるよつにグレネードを投擲した。

ドンッという綺麗に命中する音と共に、2人仲良く地面へ落下していく。激突して煙が晴れると、セシリ亞と凰が地面にめり込んだのが確認できた。

俺と山田先生はお互いを確認して地上へ着地し、俺だけISの展開解除を行つ。

「アンタねえ…。良いように誘導されてんじやないわよ。しかも、ビットを早く出しすぎなのよ」

「そつちこそ、あれ程言ったのに。喜久さんに一撃も当てられないではないですか！…完全に手のうちも読まれて衝撃砲も出せずじまいですし！」

セシリ亞と凰の間で、ギヤーギヤーと責任の擦り付け合いが始まつた。今更だが、品格も何もあつたもんじゃない。周りを見れば、そこの女子から笑い声が出ている。俺は一夏とシャルルの方へ近づくと、シャルルが意外そうな顔で見ていた。

「喜久って、本当に強かつたんだね」

「その発言はどうから聞いて出た言葉だよ。俺は自分が強いなんて、一言も言つてないぞ」

一夏を見ると、『めんなと言つた具合に苦笑していた。いや、お前らの会話は途中まで聞いてたけどな。俺はシャルルの背中に組み付

くと、軽くヘッドロックをかます。慌ててシャルがじたばたし始めた。

「わ、なにするのさ！…ギ、ギブ

「シャルルから見ると、なんで俺は変態なんだ？」

そう言つた瞬間に、シャルルの顔が青くなつた。

「お前らの会話は、ISを展開してる間だけ筒抜けだつたぞ。言いたい放題だからって、勝手に言つてくれやがつて」

俺はシャルロットを開放して、一夏を軽く睨んでから織斑姉の方を向いた。織斑姉は全員をして喋りだす。

「さて、これでIS学園にいる教員の実力は解つてもらえただろう。以後は敬意を持つて接するように。専用機持ちは全部で5人か。専用機として貸し出している市隈を含めると6人だな。これから専用機持ち一人につき、7人8人のグループを作るようだ。各リーダーは専用機持ちが勤める。では、行動を開始しろ！」

途端にものすごい勢いで迫る女子の群集によつて、俺が跳ね除けられる。専用機を持っていない女子たちは、猛アピールをしながら一夏とシャルルに群がつて行つた。

2人はどうしていいかわからず、困惑して対応に追われている。

「この馬鹿ものどもが……。出席番号順に1名ずつ各グループに入れ！次にもたつくよくなら、今日はISを背負つてグラウンド百周させるからな！！」

恐怖の怒声が響くと、女子たちが無言で迅速な動きを發揮する。2

分もせずに整列すると、俺の前にはとても嫌そうな顔をした女子の一団がいた。

「最初からそういう。馬鹿ものどもが」

織斑姉のはじりもつともな意見だな。他の奴らを見渡せば、わりと和氣あいあいにやっている。無言の空間が吹雪いているのは、俺とボーディヴィッシュのグループだけだ。まあ、お互い今更な光景だな。山田先生の指示で、俺と同じ型のラファールリヴィア イブを女子達が運んでくる。待機姿勢を取らせるべく、一同が嫌そうな顔をしながら寄つてきた。

「ああ、織斑君の方が良かつた。なんでこんな奴に習わなきゃいけないの？」

「デュノア君のところも楽しそう。今日は最悪な一日ね」「あなた、二人のことを知つてゐる限り私に提供しなさいよ」

残りのメンバーも大体同じ言葉を口走つてゐる。俺は首を軽く鳴らしながら、適当にやさうと待機状態のラファールに近づいていく。そして、やつぱりやってられないとばかりにその場で胡坐をかいた。

「雑談するなら練習に付き合つ必要はないよな。俺は適当に休むしぬらぬから良いけど、あんたらはどうするの？」

「なによ！…男のくせに生意気ね」

「だったら、生意気な俺よりこの操縦が上手いよね？」

しかし、えらい嫌われようだな。正直ここまでだと、付き合つてられないよ。

「ちょっとぐらり動かせるからつて、調子にのつて……」

「俺、本当にもう休んでいいか?」

俺は胡坐から雑魚寝へと姿勢を変更する。欠伸をしていると、後ろから肩を軽くタッチされた。見れば、貝田が俺を上から覗き込むような姿勢で立っている。

「あれ、貝田さんじやん。グループ一緒だつたつけ?」

「そうよ。良かつたら教えてくれない?」

女子が全員同じように見えていたのか。俺はまったく貝田の存在に気づかなかつた。一人だけでも受け入れてもらえると、ちょっとは気が楽になる。彼女には感謝しないとな。今度、なにか奢つて借りを返そ。

「良いよ。ラフアールに乗つて、そのまま起動してくれる?」

「わかつたわ」

「え、ちょっと貝田さんー?」

貝田の行動で女子一同が困惑し始める。まあ、当たり前か。貝田はラフアールで立ち上がると、直立の姿勢を取つた。

「試験の時もそつだつたけど、視線の高さが違つだけで面白いね」「上手いじゃん。じゃあ、歩かなくて良いから、俺の手に掴まつてくれる?」

貝田がラフアールの手を俺のまづに伸ばしていく。

「これで良い?」

「じょうとうだよ」

俺は笑いながらその手を掴むと、ゆっくりと左右前後にラフアールをスライドさせ始めた。移動する感覚に慣れさせると、今度は実際に歩いてもらひ。一通りEISに慣れさせてから、俺は他の組とは違う事を提案した。

「それじゃあ、最後に軽く飛翔でもするか」

「ええ、そんなの今日のカリキュラムにはないわよー?」

「そつちは何もしなくて良いから」

俺はEISを開いて、貝田の後ろに回り込む。そして、相手の腰回りに腕を軽く回して10メートルほど飛翔した。

「わあ、すごい」

「だろ?」

貝田が子供のよつこにはしゃぐ。そのまま少しだけ静止してから、俺はゆづくじと降下した。すると、タイミングよく織斑姉の怒声が聞こえた。

「市隈! 今日のカリキュラムに含まれていない」とをするな……!」「イエス」

適当に答えて織斑姉のほうを向いて会釈する。他の奴らはどうかな。俺は一夏の方を見ると、奴は篠ノ乃をお姫様抱っこしていた。どうも、前の奴が待機姿勢を取らずに降りたらしい。おかげで篠ノ乃是嬉しそうにしている。そのまま視線を動かすと、凰が悔しそうに歯をギリギリと鳴らしていた。

あれは、一夏は後が怖いな。そしてもう一人。セシリ亞が俺の方を向いて、いつでも刺しそうな雰囲気でいた。

俺は気にしないようにして、貝田に待機姿勢を取らせつつラフアール

ルから下りるようにお願いする。空を飛んだことに感動したのだろう。畠田が嬉しそうに俺から離れていった。

「それじゃ、次に飛びたい人いる?」

「え、先生にさつき怒られたばっかじゃない。なに考えてんの?」

俺が適当に話すと、聞かれた女子達が怪訝な表情をする。まあ、当たり前だわな。

「俺はどっちでもいいよ。でも、ISに乗れる時間は限られてるしな。少しくらい他のやつより無理してやんなきや、どんぐりの背比べで終わっちゃう。上手くなるなら貪欲にならなきや。俺がサポートする限りは、怪我をさせるつもりはないし。制限時間はあるの軍曹が俺の頭に拳固を落とすまで。誰からやる?」

みな一様に黙っていたが、一人が耐え切れずにその場で笑い出す。

「ふ、軍曹つて。貴方、先生に怒られるわよ」

「拳骨が落ちるのがあんただけなら、やつてやつても良いわよ」

限られた時間だけ、貪欲に。エリート思考の女子達へと煽りを入れていく。それに反応した何人かは、俺のやり方に同意した。ISは嫌いだが、この学園に来てから少しだけ考えを改めることにしたことがある。

「そんじゃ、始めますかね。まずは、起動からやってみようか」

それは、ISを乗りたいと思う人間を否定してはいけないと感じたことだ。ここで出来た友人は、俺と違ってみんな素直で良い奴ばかりだった。それを否定すんのは、なんか小門が違う気がする。だつ

たら、協力してやるほうが筋だろうと考えた。

俺は名前も知らない女子に行動を促して、練習用のラフアールを起動させた。

ー＼ー＼

結局のところ、授業中に無理やり最後のメンバーまで俺は飛翔させた。しかし、その間に織斑姉からは頭に3発、減らず口を叩いて顔に1発の拳骨をもらう。なので、田下2箇所からの痛みに耐えていた。俺が無理やりやつたことにして、女子達の分もこっちに集中していた。

「一人の馬鹿が暴走したが、お前達は絶対に真似をするな。お前だぞ、市隈！ 今度こんな真似をしてみる。お前にだけ、特別メニューを加算してやる」

「イエス」

面倒臭いので、適当に答える。一いつちを見ていた織斑姉は、俺から生徒全体へと向き直った。

「では、午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人収納庫に班別で集合すること。専用気持ちは、訓練機と自機の両方を見るようだ。では、解散！」

そのあと、俺は織斑姉に指示された通りにEIS用のカートで訓練機を運んでいく。しかし重いよこれ、人力っておかしいだろ。かといって周りを見れば、みんな同じように運んでいた。

同じ班の女子達に任されたとはいえ、ぐだらないぐらいやつてられ

ん。俺はISを展開してカートを押し始める。すると、一夏から非難の声が飛んで来た。

「おい喜久、普段のIS展開は禁止だろ
「楽なほうが良い。ばれなきゃ良い。共犯者が多ければ怒られた
が分散するので、なお良い」

反省なんて、はの字もない。俺はカートをすぐさま運び終えてISを粒子化する。後はシャルルと一夏を待つだけだが、シャルルは他の力がありそうな女子数人に運んでもらっていた。一夏はうらやましそうにそれを見ている。そして、俺に「ズル野郎」と嘆きなら運んでいく。あいつは真面目だな。ISの状況を確認していると、一夏が訓練機を運び終えていた。

俺は作業を終えて一夏のほうへ歩いていく。

「そんじゃ、戻って飯にしますか」

「そうだな。もう、いい加減にくたくただ

2人してシャルルの方へ歩いていくと、本人はまだISの確認作業中だった。シャルルは作業を中断して、こちらへ振り向く。

「一夏に喜久さ。僕はちょっと機体の調子を少し見たいから、先に行つてくれないかな」

「良いよ、終わるまで待ってるから。早く終わらじて飯くいにいこ
うぜ」

「そうだな。少しくらい時間も余裕あるだろ。シャルル、後どのく
らいかかる?」

俺の返答に、シャルルはどう答えたものか、少しの間が空く。一夏は何気なく、俺は理由を知りつつ聞いた。おかげた、着替えを見ら

れたくないんだろう。

「まだ少しかかりそうかな。本当に大丈夫だから、2人とも先に教室に行つててよ」

「ああ、まあそれなら。それじゃシャルル、できるだけ早く来いよ。行くか喜久

「そうだな。シャルル、ほらよ」

おれは、持つてきていたドリンクとタオルをシャルルに放つて渡す。それを見た一夏が驚いた様子で見ていた。

「お前、それどこから出したんだよ？」

「授業に来るさいに持つてきといで、グラウンドの端に置いといた。まあ、飲み物の方は外気で温くなつてるけど。陽射しは直で暑いし、これくらいないとやつてらんないよ。シャルル、ボトルは適当に捨てといてくれればいいし、タオルは適当にそこらへ放つといてくれ。あとで回収しとくから」

シャルルの奴は、信じられないといった目で俺の方を見る。しばらく鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしていたが、やがて笑顔に変わつた。まあ、もともとは俺が飲みたいから用意してただけどな。それは、言わぬが華だろう。

「ありがと、喜久

「またあとでな。行くか一夏

「そうだな」

俺と一夏はシャルルから離れて教室へと歩き出した。

昼休み、俺は屋上で昼食をとつてゐる一団に混ぜてゐる。今日は天氣も良いので、食後はそのまま授業をすつ飛びまして昼寝でもしたいような穏やかな気候だつた。

それにしても、この学園は寮もすぐければ、屋上も綺麗に完備されすぎでいる。俺は思わず首を捻り、金の使いどころがおかしい気がした。

「……どういふことだ？」

「ん？」

座つてゐる篠ノ之は明らかに不機嫌で、一夏はそれに疑問を感じている。大方、篠ノ之は一夏と2人で食べたかったんだろうな。結局、言いあつた末にシャルルの世話をことを一夏から切り出されて、篠ノ之は押し黙つてしまつた。

納得できるが納得できないといった表情が、ありありと浮かんでいる。今は凰とセシリ亞、篠ノ之、一夏、シャルルのメンバーで場を囲つてゐる。そして、女子側はみんな揃つて弁当を用意していた。ちなみに俺は来る途中のコンビニサイズみたいな、ばかでかい購買のところで菓子パンを買つてきている。

「一夏、アンタの分よ

「お、酢豚だ」

一夏が美味しそうに食いつき、喜んで食べている。隣を見れば、篠

ノズの雰囲気が悪化していた。

「今日はお弁当を用意してみました。みなさん、どうぞ召し上がる
つてくださいな」

セシリ亞がバスケットみたいなものを取り出して、サンドイッチが
入っているのが見える。一夏は、それにも嬉しそうに手を出していく。
しかし、一口つまんで停止した。

「…お、おこしょ。ありがとな、セシリ亞」

美味しいんなら、何でそんなに言葉がたじたじしいんだよ。

「まあ！ ありがとウザります。是非、喜久さんも食べてください
！」

確かに見た目は大丈夫そうだな。セシリ亞は貴族だって聞いてたら
ら、料理なんてしたことあるんだうつかと思つてたけど。まあ良
いか、好意に甘えさせてもらおう。

「ああ、ありがとさん」

何気なく掴んで、一口かじる。途端、劇薬のような刺激が口の中を
占拠した。

「があ、ぐおお…」

俺は、急いでわざわざ買つていたペットボトルの中身を一気に口の中を
へ流し込む。流し込んだ後も、変な味がまだ舌に残つていた。

「セシリアーお前は俺を殺すきか……一夏……お前、騙しやがったな！」

「え！？どうしたんですの？」

まるでわかつていなセシリアが、きょとんとした表情でこっちはを見ている。

「おい、嘉久……」

一夏は俺の口を塞いづとするが、俺はそれを強引に払いのけた。

「セシリア、自分の作ったサンドイッチは味見したのか？」

「い、いいえ、していませんが」

「してみる。一夏、お前は良い格好しそぎると、後で絶対におかしなことになるぞ。この場合に指摘しないのは優しさじゃなくて、甘やかしてるだけだ。本人も後で苦労するしな」

俺が興奮しているのに対し、皆がついていけないような表情をする。一夏は疲れた表情をしていた。

「全員、セシリアのを食べてみる。舌が破壊されるから

一夏と俺を除いたメンバーが口にして、その場が全体的に固まった。まるで時間が止まつたかのようだ。再び動き始めた時は、食べた全員が飲み物を口に流し込んでいた。例えるなら地獄絵図だな。正直に言わなかつた一夏は、少しばつの悪そうな顔をしている。

「…確かに、一夏は女子に対する甘すぎるわね」

「どうやつたら、こんな味になるのだ？」

「これは、誰かにきちんと習つたほうが良いかもね」

凰、篠ノ之、シャルルは俺と同じような感想を漏らす。

「そんな。こんなはずでは……」

そして、落胆と共に肩をがっくりと落とすセシリ亞がいた。
男はいいが、女子が料理できないのは後々で響きそうだな。しょうがないな、駄目元で提案するか。

「なあ、わかつたところでも。俺は菓子パン持つてるの見ればわかると思うけど、料理はからつきしだしな。それでさ、誰かセシリ亞に料理を教えられない？」

その場にいる全員が、顔を見合わせる。そして、思わずところから手が上がった。

「それなら、僕がお教えしましょ？？料理は趣味でよく作るんです」

シャルルが手を上げたことによつて、一夏と女子たちが驚いている。まあ、本人は女だろうし、料理が上手い場合があつてもおかしくないよな。

「じゃあ、シャルル。セシリ亞のこと頼むな」

「ちよつと、待つて下さいまし。さすがにいきなり頼むというのね

セシリ亞が慌てて話を中断しようとしたが、俺はそれを更に進めていく。

「俺や一夏よりは作れた方が良いだろ。俺は最低限はできるけど、

一夏なんかそこの女子ができるんじゃないかな？」

俺以外が驚いて一夏のほうを見た。少し前に、夜中で腹が減つてたが食堂が開いてなかつたことがある。なので、それを見かねた一夏が夜食を作ってくれた。

意外のほか上手なので、将来は主夫でやつてけばと背中を叩いた記憶もある。注目された一夏は、いきなり振られてあたふたしていた。「俺だつてそんなできるわけじゃない。家じゃ作る人間はないから、しようがなくやってただけだよ。千冬姉は、家事全般は苦手だしな。しかし、シャルルって意外と女趣味だな」「そ、そつかな!? たまたまよ、作つててたまたま面白く感じただけ」「

シャルルもあたふたしている。俺はセシリアの肩を叩くと、一夏に告げた。

「決まりだな。頑張れよセシリア」

「はあ。でしたら、喜久さんも付き合つて下さいな。発起人なのですから、一緒に練習致しましょ」

セシリアがにこやかに答えて、俺が道連れされかける。え、何で俺までやらなきゃいけないの? 俺はすぐさま助け舟を求めて周りを見渡した。すると、一夏が俺の肩にわざとらしく手を置く。

「お前は部活とか入つてないし、部屋もシャルルと一緒にだから大丈夫だろ?」

女子が喜びそうな極上のスマイルを浮かべてサムズアップする。「一夏、いつもの仕返しをここですんじゃねえ。」

「せうだね。どうせなら喜久も本格的にやつてみたら？僕が喜んで、
びしづし鍛えてあげるよ」

シャルルがとても嬉しそうに告げる。お前も溜まつた鬱憤をここで
発散すんな。

「そうね。アンタは料理でもやつて、少しばかの女子に嫌われる要
素を改善したら？」

「今時の男は料理も出来た方がいいだろう？」

凰と篠ノ之が同意して、最後の誓もなくなつた。

「くそ、何でこうなつたんだ。しうがなく、俺は両手を上げて降
参のポーズをとる。

「わかつたよ。付き合こますよ。これで良い

かと言づ前に、セシリアに胸倉を掴まれ引っ張られた。ドンドンと、セ
シリアの顔が目の前に来ると、ここにこして笑つている。これは、
間違いなく怖い方の笑顔だ。

「空返事で逃げないでトさーいね」

「……はい」

俺は本当に觀念すると、がっくり肩を落とした。この後、一夏と篠
ノ之の夫婦のようなヒコマがあり、荒れた凰が一夏に自前の酢豚
を食わせていた。

今日も一日が終了し、俺とシャルルが部屋に入る。シャルルの荷物は既に届いていたらしく、俺が使っていないベッドとその脇に置かれていた。何でシャルルは一夏の部屋じゃねーんだ、隠れて煙草が吸えないじゃん。

「おじやまします」

勝手知ったるなんとやらだが、シャルルは初めてなのでそんなセリフをいって入室する。俺はベッドに寝転ぶと、大の字になつて盛大に背伸びをした。それを見て子供っぽく思えたのか、シャルルは笑いながらもう一つのベッドに腰掛ける。

「喜久、今日はありがとう。一夏にもすゞく良くしてもらつてるし、何かの形で一人に返せればいいんだけど」

「俺も一夏もそんなの気にしないよ。そうさな、だつたら一夏の工S訓練を見てやってくれない? あいつまだまだ慣れるのに大変みたいだからさ。俺は教えるのとか苦手だし」

「わかつたよ。是非そつさせてもらひうね」

「ここに」しながら、シャルルは身の回りの整頓を始める。荷物はさほど多くない。セシリ亞の荷物量はおかしいが、それでも同年代ならもう少し荷物は多くても良いと思つ。

「あのや、シャルル。荷物少くない?」

「え、ああ。いつもこんなもんだよ」

「いつまでじまかすんだ？異性の真似事なんて苦しいことして。俺は呆れ気味にシャルルのほうを見るが、本人は気づく様子もない。しようがない、止めの一言でもいつてやるか。後の対応はおいおい考えればいいよな。」

「なあ。同室だから先に言つとくんだけど、お前がシャワー先に使つてくれよ」

「いいよ、喜久が使って。僕は後で大丈夫だから」

「いや、いいつて。湯上りのシャルルを見てみたいし。年の割に出るとここでそうだから、田の保養になるしな」

「…え」

シャルルは勘違ひして、思わず俺から距離を取る。顔は少し青い気がする。わるいけど、俺は断じてゲイじゃない。

「えつと。喜久って、そつちの気が…」

「あるわけないだろ。たんにレディファーストしてるだけだ」

シャルルの顔が今度は違う意味で顔面蒼白になる。

「えつと……喜久ったら、なに言つてるの？」

「ばれないとも思ったのか？」

「じひひなしか震えているように見えた。」

「外見でじまかそつとしたつて、そんな線の細い骨格の男がいるかよ。流線型の体格じや限度があんだよ、お嬢さん」

シャルルがいきなりがっくりと、肩を落とした。そして、じばりくしてから緩んだネジみたいな双眸を俺に向ける。

「…僕のことを見ついたの？」

「そこは俺の領分じゃないよ。何が嬉しくて、鬼の首を取ったようにチクリに行かなきや行けないんだ。俺も煙草吸つてんけど、それを内緒にしてくれるなら誰にも言わないよ。どうだ、交換条件としては良心的だろ？」

俺は笑いながら、備え付けの冷蔵庫から水のペットボトルを取り出す。2人分のボトルのうち、俺は片方をシャルルに渡した。ぎこちない動きで受け取ったが、怯えて俺の様子を窺っている。

……しょうがなく、俺は真剣な顔に戻して対応することにした。

「正直言つてな、俺はボーデヴィッシュって奴より素性を隠してるお前のほうを警戒してる。『テュノア社がバックにあるせいなのが、一番大きい理由だけれどな。わざわざ大切な一人娘のご令嬢様を男にして入学させるのはなんでだ？』

俺が言うと、やがてシャルルはボトルの水を一口飲んでからベッドの脇に立てかける。俺は彼女がゆっくり喋りだすまで黙ることにした。

これじゃ、シャワーを浴びる余裕もないな。
それから何分が経つた頃ぐらいだろうか。ぼそりとシャルルが喋りだした。

「…僕はね、社長である父の命令に従つてここに来たんだ」

「それで？」

「父の会社はね、今傾いてるんだ。第3世代の開発が遅れているん

だよ。男子として来たのは広告塔と、同じ境遇の人間に近づきやすくなるため。一夏だけだと思ってたから、喜久がいてびっくりしたけどね。僕が受けた命令はね、一夏や喜久のデータを取つてフランスに持ち帰ることなんだよ

「データ採取なんて、他に幾らでもやりようがあるだろ?」。それよりもさ、俺が聞きたいのは違う部分だ。何でそんな危険な行為を身内であるシャルルにやらせたんだ?」

俺が引っかかっているのはそこだ。メリットよりデメリットの方しか見えないし、非効率すぎる。

「それは、僕が愛人の子だからだよ」

頭の中でパズルのピースが揃つて少しすつきりした。それなら、シヤルルを人身御供みみたいに出来るわな。

「大体わかったから、これ以上は無理して喋らなくて良いよ

俺は、今どんな顔をしているだろうか?ちよつと眉間にしわが寄つてるかもしれない。

「しかしさ、ISが絡んだ奴つて、中には本当に境遇が恵まれない奴がいるよな。……で?」

「でつて?」

シャルルが聞き返し、俺は軽く手をぶらぶらとさせる。

「これからどうする? わざわざ、フランスくんだけからこんなところまで来たんだ。ここにこりや、3年間は身の振り方を考える時間が設けられるけど?」

「僕に選ぶ権利なんてないよ。それに、僕の存在が知れたところで、自身としては父の会社なんてどうでもいいんだよ。もともと着もなにも、そんなのないんだから」

部屋の空気が重く感じられる。俺はシャルルに近づくと、頭にナックルピンをかましてやつた。

「痛つたあー！何するんだよー！」

「暗いんだよ、お前さ。投げやりになつて考えないで、これからをもう少し考えて生きろよ」

シャルルは両手で頭を抑えながら、諦めの顔をしている。

「そんなの無理だよ」

「無理なのか？俺なんて30まで生きれる保証もないのに」

本人にとってわりとショックの強い言葉だったらしい。シャルルは「えつ」と言つた後、そのまま固まつてしまつた。

「シャルルはもつと生きれるだろ？だったら、建設的に考えないと勿体無いだろ」

「フェアじゃないのはしつくつとこない。俺は、自分のことをどうまで話せばいいのだろうか。少しの間だけ、頭の中で逡巡する。逃げないで聞けよ？」

「俺の秘密を教えてやる。煙草の校則違反なんてめじやないくらい、生易しくない内容だ。これを話して、俺らは秘密の共有者になる。逃げないで聞けよ？」

する。シャルルは口ボットのよつに、とりあえず頷いた。

「俺はアメリカ軍の軍事ラボで生まれた。試作型試験管ベイビーで、よつは使い捨てのモルモットだ。卵子の時点で、ISへ適応出来るよつに試薬品を投与される。だから、その反動で30までしか生きられない。一夏みたいな純粹にISへ適応した人間じゃないし、このことは公に出来る内容じゃないんだ。俺はなシャルル、あることをじでかして軍から逃げた。俺がIS学園に入った理由はな、身の安全の為だよ。最近になつてCIAに見つかったんだ」

CIAはシャルルの知つている単語だよつ。黙つていたが、口を開いて俺に質問した。

「喜久は何をしたの？」

この先を言つには勇気がいる。手に嫌な汗が出ている気がした。ここでなら、まだ話を止めてうやむやに出来る。

「俺はどうしたいのか？」

「話すことと何を得られる？」

一拍間を置いてから、俺は口を開いた。

「12歳の時にな、軍の任務で中東に駐留したときだ。作戦中にISに乗つたままで暴走して、自軍と敵が滞在してる町一つを壊滅させた。一人残らず、その場に居た人間を殺したんだ。軍は隠蔽したが、一部の連中にはばれてる有名な話だ」

シャルルが両手を口に当てて、絶句する。それは、まるで考えられ

ないといった表情をしていた。

「…それは、ISのシステムが暴走したの？」

「いや、俺の意思でそうしたんだ。女も子供も何もかも区別なく撃ち殺した。一緒にいた、仲間も含めてな。当時の俺にはな、それがTVゲームと一緒に感覚だったんだよ」

話していく、気持ち良い話じゃない。言っているだけで、吐き気がこみ上げてくる。俺は言い終えると、ゆっくりとシャルルから離れてボトルに残っていた水を無理して一気飲みした。

「さて、シャルルの自由だ。これを教師に告げ口でもするか？シャルルの場合はまあ、本国で豚箱が良いところだろうな。俺の場合は、アメリカで死刑扱いだろうがな」

吐き気は治ましたが、喉に///ズが這うような感覚が残っている。

「喜久。なんで、そんな釣り合わない秘密を僕に話したの？」

「そんなん、決まってるだろう。信用を買うには相手より大きいものを見し出すのが大事だからだ。ちなみに、今の話を知っているのは学園には一人もない。そして、俺のまわりで知っているのはシャルルを含めて6人だけだ」

シャルルは、しばらく俯いてから顔を上げた。

「僕には見し出されたものが大きすぎて、とても判断できないよ。

…でも」

「でも、なに？」

「ありがとう。喜久が言つたように、少し考えてみる。それと、喜

久

「ん？」

「喜久の顔も暗いよ」

そりゃないだろよ。頑張つてこっちも話したんだから、むしろ抱擁して欲しいくらいだ。

「いや、これは普通の顔だる。あとで、どのみちひつかで一夏にもばれるだらうから。シャルルが抱えてる問題は早速うちに自分で言つとけよ?」

「わかったよ」

「それじゃあ、レディファーストだ。先にシャワー浴びて来いよ。俺は30分ほど、外で一服していくから、その間に済ませておいでくれな」

俺はシャルルをうながして、先にシャワーを浴びせることにした。

「そうだね、そうさせてもらひつよ。喜久、ありが…とつ?」

最後が、なぜに疑問形? シャルルの顔がすこくいい笑顔になる。しかし、全然笑つているよう見えない。俺はゆっくりと距離をとつて、ドアノブに手をかける。

「…今日一日も、僕のお尻叩いたり抱きついたりしたね。午前中の一夏が言つてたけど、わざと下品なことばかり会話に混ぜてたのは何で? 僕が女だつて知つててやつてたの?」

「そらそらだろ。いつになつたら根をあげるか、試したに決まつてんじやん。シャルルが最後まで根を上げない分だけ、俺はやりたい放題だしな。いい思いさせてもらいましたよ、こちそつさん」

俺は即座にドアを開けて、廊下に飛び出してから勢い良く閉める。

同時にドアへ衝撃が走った。きっと何か手近なものを投げたのだろう。ドア越しにシャルルの大声が木霊する。

『喜久の変態……馬鹿……女の敵……もう、お嫁に行けない』

最後のセリフで、シャルルがうちひしがれたような声が聞こえた。しばらくは、部屋に帰らないほうがよさそうだ。余計な世話だけど今のシャルルの状態なら、少しは家庭のこと以外を考えるだろうか。俺は、部屋を離ると屋上を日指すためにゆっくりと歩き出した。

IIS学園は土曜の午後をフリーな時間として用意されている。いつものメンバーは、新たに加わったシャルルを追加してアリーナに向かう予定になっていた。もちろん、俺は行かないが。授業が終わって寮に戻ると、シャルルは午後練習のためにIISのゲートをチェックしながら話し掛けてくる。

「ねえ。喜久ってIISが嫌いなのはわかるけど、練習しなくて大丈夫なの？」

「俺は別にIISで強くなりたいわけじゃないし。それじゃなくとも、今日は軍曹に呼び出しをくらつていいんだよ。あー、めんどくせ」

軍曹とは、もちろん織斑姉を指している。あれは教師ではなく、間違いない軍人教官だ。

「また何か、良くないことをしじでかしたんですの？」

「…なんでセシリアがここにいる」

今、この部屋には俺とシャルル、そして当たり前のようセシリアがいた。俺はベッドにひつ伏せになりながら、顔だけをセシリアのほうに向ける。

「別に良いじゃない。喜久は、女の子の気持ちをもつと考へるべきだと思つよ」

「まあ…シャルルさんは、とても良いことを言つて下さりますわね」

シャルルの援護にセシリアが喜びの声をあげている。どうせなら、セシリアはシャルルとくつ付きや良いのに。もちろん性別的に無理だろうけど。俺はくだらないことを考えながら話を進める。

「話、戻して良い？ セシリアが言つてるようなことなら、まだましなんだよ」

「怒られたほうが良いなんて、喜久つて本当に変わってるね。まあ、でも嗜好は人それぞれなもの。僕は気にしないよ」

「シャルル。毒舌が冴えてるんけど、ひどくない？」

「喜久が疲れてるだけじゃない？ 僕はいたつて普通だよ」

シャルルと知り合つて5日になる。あの秘密を打ち明けあつた次日から、こきなりシャルルの毒舌が際立つようになつた。主に俺にだけ。1日毎にやりすぎたのはわかつてゐるが、まさか次の日からこんな状態になるとは思わなかつた。そんなせいでクラスの女子からは、俺に毒舌を吐くシャルルは違う意味でとても喜ばれている。

俺の扱いつて一体なんなんだ。

「それで。そんなにやる気が無いのはいつものことですけど、何があつたんですの？」

セシリアの言つてゐることも地味に酷いが、まったくそのので言い返せない。

「机の上に答えがあるよ。見たければ、勝手に見てくれ

「お言葉に甘えさせて頂きますわ」

セシリアが俺の机に向かい、薄いパンフレットが置いてあるのを確

認する。そして俺の方に振り返ると、突然はしゃぎだした。

「すゞいぢやないですかー喜久さん、 IIS 系企業からオファーがあつたのですか！？」

「喜久の性格は別として、 IIS の操縦技術は買つてくれてるみたいだね」

シャルルめ、なんどでも言つてろ。後で、きつちり仕返しをしてやるからな。

「受けける氣は無いよ。そのパンフだつて無理やり渡されたんだからヤルルの前で言つわけにはいかないけどな。

宇宙開発事業の手伝いと、武器開発の手伝いではまったく趣旨が違う。たとえ良いことをしていても、根本のところは武器商人だ。シャルルを指名した IIS 系企業は半繩技術研究所。一般の第3世代機開発とは、違うアプローチの仕方をしている場所だ。通称、思考力先行特化型 IIS 研究所。従来の物理的現象における武器装備ではなく、思考によるイメージで武器を生成することに重点を置いて研究実験をしている。その特殊性故に、まったく IIS のテスト操縦者が見つからない変わった研究機関である。ようは、従来の IIS よりも、乗り手の方に要求度が高い IIS を製造しようとしている場所なわけだ。俺に白羽の矢が立つたのは、男性だからなのかもしれない。セシリアはシャルルのほうを見て、シャルルも肩を竦める。なんでそんなに意固地になるのかといった様子だった。

「そんな無体に扱わずに。せつかくの機会ですから、一回ぐらい会社の方に会われては？」

「だから、無理やり軍曹が会わせるつもりなんだよ。こつちは一回でも多く、 IIS に触れる機会を減らしたいのにな」

まるでIS学園の趣旨を根本から否定する発言だが、俺の考えがそうなのだからしょうがない。現に支給されてるラファールは、アクセサリーのまま机の上に投げっぱなしになっていた。

「僕とセシリアさんは専用機持ちだから大丈夫だけど、今の発言はクラスで言わない方がいいね。じゃないと、喜久の立場が本当におかしくなるよ」

「忠告はありがたく受け取るよ。でもな、本音としては極力触れたくないんだ」

ISが嫌いなことを知っているセシリアと、なぜ嫌うのかの本当の理由を知っているシャルル。2人とも微妙な顔をしている。俺は、相変わらずずつ伏せのままで時計の方を向く。時間がか。

「もうそろそろ、一夏たちと待ち合わせの時間だろ。2人とも部屋を出て、アリーナに行つたほうが良くないか？俺はまだ時間あるし、鍵はしつくから」

「一緒に出よう。僕としては、喜久に持ち物を漁られたら困るし」

シャルルが軽蔑のような視線を俺に向ける。ち、ばれたか。漁る気なんてさらさら無いが、ベッド辺りに何か仕込んでおこうと思ったのに。俺は起き上がりながら、自分の机に向かっていく。

「シャルルさん、喜久さんも流石にそこまではしないと思いますが」

セシリ亞には悪いが、する気は満々でした。俺は、机の下に潜り込むと、隠してあつた煙草を取り出す。前にシャルルと話し合った結果、部屋は禁煙でその他はOKになつた。

セシリ亞に見つからないよう、直ぐに制服の内ポケットに隠す。

「喜久さん、何をしているんですの？」

「いやあ、筆箱を机の後ろに落つことしたのを思い出しても」

カモフラー・ジユにわざと落としておいた筆箱を見せる。すると、エスのチェックを終えたシャルルが立ち上がりて俺の側までやつてきた。

え、なに？

そして、しげしげとわざとらじしく俺の胸辺りを覗く仕草をする。

「おい、ま

「喜久、煙草を隠すならもっと上手にやつた方が良いよ。ああ、セシリアさんは前の同居人で喜久から聞いてるから、もちろんこの場で指摘しても大丈夫だよね？」

俺が待てと叫ぶより早く、シャルルは一気に言葉をまくしたてた。俺は、にこにこ笑つて、その顔に本気で怒りを覚える。お前、俺との秘密協定はどうした？

「おまえ。後で覚えてろよ」

「なにを覚えれば良いのかな？喜久の煙草の保管場所なら全部覚えてるけど」

……」いつ。まじで下の穴を全部、塞いでやうつか。

ダムは一度決壊すると、貯水された水が放流されて空になる。同じように、セシリアに煙草のことがばれると、俺の煙草のストックは無くなる。現に、セシリアは冷めた目でこちらを見ていた。

「喜久さん、少しお話しが。その前に、出すものを出してください。もちろん、机の中もチェックして構いませんわよね？」シャルルさん、

あとで私に煙草のある場所を教えてくださいね

「ええ、喜んで。それじゃ、僕は先に行くから。セシリ亞さんと仲良くな

そつ言つてシャルルは部屋を出て行つた。取り残された俺は、無言で煙草を机の上に置く。次いで、仁王立ちのセシリ亞に肩を両手で握られた。しかも、爪を立てられながら。

「俺も人に会いに行かなきやな。じゃ、あと頼んだ」

「まだ、時間は大丈夫なのでしょう?」

セシリ亞! その笑顔が怖いんだけど! -

「いいから! この場で正座なさい! -! -! -

セシリ亞の怒声が室内にびりびりと響く。このあと、俺は1時間はこつてりと説教をくらつた。

- \ - / -

俺が応接室にノックして入ると、そこには織斑姉の他に3人の男女が居た。

「失礼します」

「市隈、何を考えている。時間厳守と言つたださう」

織斑姉からの叱咤がどぶ。くそ、俺は守るつもりだったんだよ。セシリ亞のやつ、自分がすつきりするまでがみがみ言いやがって。

セ

「イギリス製の紅茶でお腹を壊したので、トイレに行つてました」「なにをふざけたことを言つてこる。先方を待たせるような教育を私はしていなはずだが?」

あとで殴らせろといった様子で、織斑姉の額に青筋が立つたのがわかる。すると、織斑姉と対面に座っていた若い痩せ型の男が口を開けた。

「まあ先生、そこまで生徒さんを叱らないで頂けると助かります。私どもは、今日は彼にお伺いを立てにきた身ですから」

丁寧な言葉遣いで対応され、俺は内心で一步後ひたすらがる。どうせ、この会談からは離れることは出来ない。じばらくは、観察させてもらつか。

「遅れて申し訳ありませんでした。織斑先生、僕はどこへ着席すれば宜しいでしょうか?」

「……私の隣の席に座れ。」

織斑姉は俺が入学以来、初めてとつた礼儀正しい態度に呆気にとられながら席に座るよう促した。一礼して着席し、挨拶をする。

「市隈と言います。本日はお忙しい中、僕のような一学生のためにわざわざ足労頂きありがとうございます」
「いえいえ。こちらこそ、私達の社にご興味を持つて下さりありがとうござります。私、谷中と言います。他は部下の根本と斎藤です。いやあ、先生。良い」教育をなさっていますね
「え、ええ。ありがとうございます」

織斑姉は俺の方を見て困惑し、曖昧に答えてしまつ。俺はと言えば、そんな対応に腹の中で笑い転げていた。そして、もちろん追撃もある。

「織斑先生には普段とても優しく、いつも丁寧に教えていただいております。まるで教育者の鑑のような方ですし、僕の誇りでもあります。将来は先生のような人間性を身に付けることができるけど、常々考えて行動させて頂いております」

「すばらしいです！織斑先生は生徒たちにとって、とても魅力のある先生なんですね！！」

俺が普段は織斑姉に對して思つてゐる正反対のことを言葉で羅列するも、根本と紹介された若い女が手放しにして喜んだ。ざまあみろと、心中で舌を出してやる。織斑姉は耐えられなつたらしく、すぐ嫌そうな顔をして俺を見た。

「い、いえ。申し訳ありません、ほんの少しだけ席を外させてください。市隈、一緒に廊下へ出る」

「先生、お客様をお待たせてしまつのは失礼かと存じます。先生のお話を後ほどお聞きできるのでしたら、先件を大事にされるのが宜しいかと」

廊下で縛り上げようつてか。そつはさせらるか、滅多にない逆襲の機会を逃す手は無いからな。

「市隈さん、ありがとうございます。先生、お手間は取らせません。ほんの少しあ時間を戴ければ、我々も退散させて貰いますので」

嬉しいことに、半縄の人間も合ひの手を差し伸べてくれる。後の恐ろしい出来事なんて、この際どうでもう良い。今をとことん楽しん

でやる。織斑姉はしおうがなく席に体を下ろした。

「ぐ、わかりました。」説明よろしくお願ひします

「ありがとうございます。市隈さん、パンフレットはお読みになつて頂けましたか？」

谷中に問われて、俺はパンフレットの中身を思に出しながら答える。

「はい。一通り田を通させて頂きました。素晴らしいコンセプトですね」

「これはこれは、恐縮です。でしたら今日は契約の書類を用意させて頂きましたので、一度我が社にお出で下さい。見学していただいた折に、お眼鏡に適いましたらサインを頂ければと思います」

契約書類に研究所の見学ね。どうだかね、俺は行く気なんてせらざら無いけどな。まあ、そんな面倒事は横の人にも投げてしまえば良いや。それよりも、内心の高笑いが止まらない。気味悪がつている顔が最高だ。

「了解致しました。日程の調整などは学生の本分を超えてしまいますので、織斑先生に一任して頂ければ宜しいかと存じます。先生、厚かましいお願ひではありますが、宜しいでしょうか？」

「あ、ああ。了解した」

ははは！終始俺のペースだ。話のたずなを握りたければ、奪つてみろ。

「市隈さん、ありがとうございます。織斑先生、後の詰めは追つてこちらから連絡をさせて頂きます。いや、本当に話がわかる方で助かりました。それでは、私どもはこれで失礼させて頂きます」

「先生、僕はこの後ですが、友人の手伝いがありますので退室しても宜しいでしょうか？」

話も終わり、俺は八つ裂きにされる前に退散を開始する。ふいに、織斑姉は不敵に笑うと余裕の笑みを返してきた。やりすぎてキレたか？

「市隈、退室して良いぞ。しかし、随分と氣に入ったのだな。それなら、私が手間を省いといてやる。サインと判子は押しといてやるから、お前は後日エスの調整と受け取りをだけをしに相手先へ出向しそう」

なんだと？俺が遊びすぎたつけなのか、織斑姉はとんでもない爆弾を投下してきた。

「それは、本当ですか！？でしたら、直ぐにサインを！…」

谷中の目がＬＥＤ電球のように輝きだし、余りの勢いに喋っている口から唾が飛ぶ。「冗談じゃない！ちくしょう、引き際を完全に見誤つた。

「了解しました。どうした市隈？退室しそう」

「いえ。一応、本人の希望を大切にし、成長の糧とする」とも教育として大切に思います。僕としましてはやはり見学に行き、この目で確認し判断させて頂きたいのですが」

ふざけるな。何としてでも阻止してやる！！

俺が意気込むと、織斑姉は最後の止めを刺してきた。

「友人を待たすと言つ教育をした覚えは私には無いが。早く退室し

て、駆けつけてやつてしまひうだ？」

ぐう、筋の通つたこと言こやがつて。何か言葉は、反論する材料はないのかよー！

……浮かばない。へそ、やられたー！

「……わかつました」

織斑姉は俺の肩を掴みながら顔を近づけてくる。そして、耳元で小さく囁いた。

「私を丸め込むなんて百年早いぞ。もつと人生を勉強しろ、ガキ」

ぐあー、ムカツク！！俺は無言のままドアを開けると、ゆっくりと閉めてその場を退室した。

織斑姉にノックアウトの完封負けを帰してから、俺の精神は疲れきっていた。唯一の癒しだった煙草は、セシリアに駆逐されて完全に無くなってしまった。そして、シャルルには毎度の如く毒舌の嵐をくらっていた。

「喜久さん、今日は流石に練習に付き合ってくださいまし」

俺はいつもより、やる気がさらにない状態で第3アリーナに来ていた。主にセシリアに無理やり引っ張られてだ。なにが悲しくて、授業外にこんなとこ来なきやいけないんだよ。

「セシリア、俺は基本的に傍観だぞ。補助と助言はするが、お手本になるような実演はごめんだ」「私はそれで、全然構いませんわ」

2人で話しながらアリーナのピットゲートを潜ると、俺たちより先客がいた。

「あれ、凰じゅん。あいつも練習か?」「そのようですね」

セシリ亞と一緒に凰の方へ歩いていく。音でわかったんだろう、向こうもこちらに気づいた。

「あら、随分珍しいわね。アンタが来るなんて、今日は雨かしら?」

「良こなあ、雨で練習中止になれば最高だな

皮肉なんて単語は知らない。

「ぐ、相変わらずやる気がないわねー」

しかし、ほんとに雨天中止にならんかね。セシリ亞は、HSUを展開してその場に待機する。

「鈴さんも学年別トーナメントに向けて練習を?」

「そうよ。私としては、この前のアンタとの決着を直ぐにでもつけたいんだけど」「

凰が挑戦的な発言をする。ビリセ授業の模擬戦のことをいつているんだろ?「…勘弁してくれよ。俺は手をぶらつかせて答える。

「やうが、二人で仲良くやってくれ

「何言つてんのよー!アンタよ、喜久ー!」

興奮しながらHSUの展開が出来るなんて、器用な奴だ。すると、セシリ亞が俺と凰の間に割つてはいった。なんだ?

「待つてください。鈴さん、貴方とは一度よくお話ををしておくべきだと思っておりますの。この意味、おわかりでしょう?」「

「ふーん、何なら一人一緒にでも私は構わないわよ?」

俺は、セシリ亞の後頭部を軽く拳骨する。

「痛あ!喜久さん、何しますのー?」

セシリアはぱりぱりとした表情で俺を見た。

「セシリア、なに挑発してんだ。凰も練習すんだろ? だったら、この

ん

ドンッ!!

なことと、俺が言つ前にアリーナへ砲撃音が響き渡つた。俺はとっさに部分展開して、攻撃を防ぐ。

「ぐうあ!!」

着弾した爆風の衝撃と爆音から来る耳鳴りで、意識が吹き飛びかかる。セシリアと凰は攻撃を避けきつて、既に空中に浮いていた。片目の視界が赤い。ち、額かどこかを飛び散った破片で切つたか? 俺は、顔を拭つて砲撃の飛んできた方を向く。黒いボディに赤いラインが特徴的な機体は、俺の視界画面にドイツ製シュヴァルツェア・レーゲンと表示される。乗つているのは銀髪のチビだ。

「おい、てめえ。冗談にしちゃ程があんだけ。なめてんのか、ドイツ人!」

『フン。今のは、この前の礼だ。貴様は教官を侮辱していると聞く。ならば、ここから消し飛ばしてやる!』

ボーデヴィッヒが再びレールカノン砲を構えた。

良い度胸だ。久しぶりに、切れちまつたよ。最低でも、腕の一本はへし折つてやる。

「喜久さん! ご無事ですか!! 貴方、一体何を考えていますの!!」

「ちょっとアンタ、無防備な人間に攻撃つて頭がおかしいんじゃな

いの！！」

セシリ亞と凰が叫び、ボーデヴィッヒが嘲笑の笑みを浮かべた。そして、手招きするように挑発する。

『お前らは所詮は有象無象の雑魚だ。私は三人でも構わんぞ。とつとと來い』

「セシリ亞、凰。お前らは絶対に手を出すな」

できるだけ低い声を心がけて出すと、セシリ亞と凰が俺の方をぎょっとして見てくる。ISを展開しながら、俺は笑つてボーデヴィッヒの方を向いた。

「なあ、ドイツ人。そんなにあの教師がお気に入りか？お前の国じや同性愛が美德なのかよ。お前は、あのメスゴリラの妾でもなりたいのか？」

『貴様ア！！それ以上、教官を侮辱すると許さんぞ！』

ボーデヴィッヒの琴線に触れたらしく、冷静だった目つきが怒りの色に染まる。思考を鈍らせるなら、もう一押しつてところか。

「なんだあ、聞こえねえよ。ああ、でもお前みたいな小さい奴じや肉もついてないしな。粗大ゴミに混ぜられて捨てられるのがオチか。いや、もう捨てられてんのか？」

『殺してやる！』

完全にキレたボーデヴィッヒが一直線に突進してくる。すると、奴の機体から突然、電子ワイヤーのようなものが飛び出した。

全部で4つか。俺は避けるのも面倒なので、ブレードを瞬時展開して先の2つを叩き落とす。次いで、残りの一ひとつをさらに瞬時展開し

たスナイパー・ライフルで弾き飛ばした。

『ぐりえーー』

ボー・デヴィッシュが叫びながらレールカノン砲を発射する。俺はスナイパー・ライフルを撃つて砲弾の軌道をずらしながら避けると、そのままブレードを構えた。

途端、俺との距離を縮めきつたボー・デヴィッシュが片手を前に翳す。は、腕をプレゼントしてくれんのかよ。だったら、お望み通りに切り飛ばしてやる。

俺は高速切替(ラピッドスイッチ)でスナイパー・ライフルからブレードへ変換して一刀流に代えた。そのまま沈み込むよつな構えで、両手を後ろに下げて攻撃の瞬発力を溜め込む。

「ふん、馬鹿め！」
「なあつ！？」

次の瞬間、ガクンッと何かが落ちたようにラフアールの機体制御が効かなくなつた。俺は両手を後ろにまわしているので、正面ががら空きになつている。

くそ、なんだこの歪んだシャボン玉の膜みたいなのは！？こんな攻撃方法見たことないぞ！－

有無も言わさず、ボー・デヴィッシュのレールカノン砲が俺の顔面に下ろされる。

「五体満足で済むと思うなよ。貴様は絶対にハツ裂きにしてやる」

くそつたれが、挑発したわりに思つたより言葉が冷静じゃねえか！－俺は忌々しいＩＳＴＳを一瞬だけ発動すると、やたら軋む音を無視して全力で片腕だけ前に出した。

「なに！？動けるだと！！」

ドンッ！…と発射音が鳴り、俺は砲弾の直撃をもろに受けた後ろで吹き飛ばされる。

「があ！…！」

転がりながら体制を立て直すと、片腕がだらりと下がる。視線を動かして確認すると、攻撃を受けた装甲が破損して使い物にならなくなっていた。

これじゃ、武器の出し入れが出来ないな。おまけにISTSの反動で、体も少しだるくなる。あれじゃ、まだ隠し玉があるんじやないだろうな。俺はしようと、壊れていない腕の方を高速切替してブレードからライフルに持ち替えた。

『まさか、停止結界が破られるとは予想外だったが。貴様のIIS、面白いものを積んでいるようだな。それにさつき、一瞬髪の色が変わった理由は何だ？』

「誰が教えるかよ。知りたきゃ俺を潰してから聞けよ、スクラップ」

口が裂けても教えられるわけがない。しかしISTSを使って、ぶつつけ本番で相手のIIS同調率へ侵食を試みたのは初めてだ。出来なかつたら、間違いなくさつきの一発で病院行きだったな。挑発に乗つたボーデヴィッシュの目が鋭利になる。

『貴様、本気で死にたいらしいな。望み通り殺してやる』
「やつてみろや」

ボーデヴィッシュは再び突進を開始する。俺も瞬時加速で真っ直ぐに

イグニッシュ・ブースト

進みながらスナイパー・ライフルを放つ。しかし、さつきと同じように停止結界とかいう、ふざけた膜にライフルの弾が止められた。くそ、何でもかんでも止めやがって！！

「ふん、学習能力のない猿め」

「余裕ぶつこいてんじやねえよ、スクランプー！」

俺は短連續の瞬時加速^{イグニッシュション・ブースト}で無理やり方向軌道を変える。後ろを取ったが、奴が動じる気配は無い。

「その程度で取つたつもりか？」

ボー・デヴィッヒが電子ワイヤーを射出する。そんなこと、とっくに知つてんだよ！俺はスナイパー・ライフルを投げ捨てて、そのまま奴の背中に組み付く。奴の電子ワイヤーが一瞬だけ動きを止めた。

「貴様……」

そのまま、瞬時加速^{イグニッシュション・ブースト}でボー・デヴィッヒを掴んでアリーナの端まで飛んでいく。俺の後ろから組まれた腕のせいで、奴は腹を圧迫されて息に詰まつた。

「ぐつー！」

「一発、壁にぶち当たつて来い！！」

俺はボー・デヴィッヒを切り離して上空へ離脱し、奴はそのまま壁に激突する。衝撃を受けた壁は、方円上の盛大な亀裂が走った。

本人が速度を出して突つ込んだんだなら、例の停止結界つてのも意味ねえだろ。仮は返したから、これでイーブンだ。俺は起き上がるうとするボー・デヴィッヒを上空から見下ろす。

「来いよ、スクラップ。本番はこつからだろ?」

ボーデヴィッシュの声から、今度こそ本気でキレたのがわかる。おも
しけえ、来てみ

『そこまでだ！！一人とも戦闘を停止しろ』

…ち、良いところで水差しやがって」

織斑姉の言葉がアリーナに響き渡り、ボーデヴィッシュがビタリとその場で停止した。俺は織斑姉のいる管制室の方を向く。

「今は模擬戦中ですが。続行はさせてくれるんですね？」

模擬戦で壁を破壊せしる黒鹿がいるか。市隈、また謹慎をくらへたいか?』

『教育やせで下さい!』この反抗分子は今すぐはでても
べきです!』

俺とは違う理由で、ボーデヴィッシュが織斑姉に食い下がる。

『馬鹿者どもが。市隈、生徒から報告があつたぞ。私のことを隨分言つてくれたようだな』

知るかよ、別に減るもんじやねーだろ。俺は気にせず織斑姉の方を向き続ける。

『ラウラ、3度はないぞ。今すぐEISを解除し自室へ戻れ』
『く、了解しました』

『く、了解しました』

ボーデヴィイツヒは言われるままに、ISを解除して地面に着地した。

「おじおい、ふざけんなよ。…しらけちまつた」

『市隈、貴様もISを解除しろ。今なら一発殴り飛ばすだけで勘弁してやる』

地面に着地してISを解除する。俺がボーデヴィイツヒのほうを見る
と、奴も俺のことを親の仇のように見ていた。

『お前、学年別トーナメントがあるのは知っているな？ちゃんと
した公式の場で勝負を競えば、今後の禍根は残さず済むだろ。そ
れまで、お前たち一人の戦闘行為を禁ずる』

「了解しました」

「クソッタレが。わかったよ」

織斑姉を無視して攻撃してやりたいが、向こうが返して来ないんじ
や意味がない。

『教師には敬語を使わないか。市隈、保護者に連絡を入れて欲しい
か？』

「…イエス」

流石にこんな下らないことで、姉さんに迷惑をかけるわけにはい
ない。しうがなく、俺は織斑姉の言うことを聞くことにした。

『解散しろ』

ボーデヴィイツヒは無言でアリーナを後にした。すると、直ぐにセシ
リアと凰が走り寄つてくる。俺は疲れた笑いをしながら、地面に腰
を下ろした。

「よう、大丈夫か？」

「喜久さん、直ぐに保健室へ…！」

「アンタ、なにやってんのよ。馬鹿なんじやないの？」

俺はボーデヴィッシュが歩いていったアリーナの出口を見る。すると、一夏とシャルル、篠ノ乃が走ってきていた。

「ボーデヴィッシュ、意外と強いな。驚いたよ。痛あ！」

セシリアが俺の後頭部を叩く。確かに初対面でもされたよな。

「何を考えていますのー。もう少しは、体に氣を使いになるべきです」

だよね、俺もこんな模擬戦は2度とごめんだ。

「喜久」

「ん？」

俺は走り終えて到着していた、シャルルの向く。そして、ボーデヴィッシュが対面初日に一夏を引っ叩いたように、今度はシャルルが俺を引っ叩いた。俺の周りにいた全員が驚いて固まっている。

「どういづつもり？こんな危険な真似して」

「勘弁してくれよ。先にやってきたのは向こうだし」

俺が適当に反発して言つと、シャルルはそろそろ見せた。

「それを買ったのは、喜久でしょ？」

「あ、それは反論できないな。とにかく、シャルル

俺は手をシャルルの方へ差し出す。

「なに？まだ、説教は終わってないよ」

「肩貸してくんない？頭から血が出続けたせいで、貧血なのかわからぬけど視界が悪いんだよ」

この後、俺は保健室に連れて行かれて治療された。

壊したラフールは、また修理行きになつて一時返却扱いになる。
そして、シャルルの説教はアリーナから、俺が自室で寝るまで途方もなくくらい続いた。

こんなんだつたら、毒舌の方が良いと俺はぐつたりする。今回の騒動で一番多く俺を叱り飛ばしたのは、何故かシャルルだった。

2 - 7 | 荒レル砲擊音（後書き）

ストックを全て投稿しました。連投は、これで終了になります。この後は、ゆくつり書を上げながら投稿させて頂きます。

シャルルに散々怒られてから数日が経ち、俺は自室でぐつたりとしていた。

回収されたラファールは欠損部分が思った程ではないらしく、もう少しすれば修理が終わるらしい。しかし、今の俺にはそんなことはどうでもよくて、全然違うことを考えていた。

「…煙草が吸いたい」

「それって、禁断症状だよね。一体、幾つか喫煙してるの？」

シャルルが私物らしきノートPCでEISのデータチェックをしながら、呆れたように聞いてくる。

「14」

「ヘビースモーカは早死にするよ。いい機会だから、この際に辞めちゃえば？」

うるさい、こんな状態にしたのは全部お前だろ。俺の備蓄してた煙草は、前回シャルルのせいでセシリアに根絶やしにされた。そのせいでの、今は一本も無い。

「ああ、購買に売つてれば良いのに」

「未練たらたらだね」

「おかげ様で、たらたらだよ」

俺とシャルルが適当な会話をしていると、ふいに廊下に出る為のドアからノック音が聞こえた。

「一夏だけど。入つていいか?」

「シャルルが着替え中だ」

俺が答えると、一夏はドアを開けてそのまま入ってきた。

「だつたらお前は部屋にいないだろ、喜久」

「あら、シャルルはちゃんと一夏に自分のこと話したんだ」

一夏の返答に、俺はシャルルが自分の秘密を一夏に告白したことを知る。ベッドで寝転んでた姿勢を直すと、一夏に席を勧めた。シャルルは作業を中断して、3人分のお茶を入れ始める。最近なんだか緑茶にはまつたらしく、そればかり飲んでいるみたいだ。

「はい、一夏。熱いから気をつけて」

「サンキューなシャルル」

一夏はシャルルからお茶の入ったコップを受け取って、手を添えながら膝の上に置く。俺も受け取って、ベッド脇の備え付けテーブルにお茶の入ったコップを置いた。

「喜久はシャルルの秘密を自力で気づいたんだつて?」

「まあ、そんなど」。変わりに煙草のことを黙つてもうつてるけど

黙るも何も、もはや一本たりとも残つてないがな。

「まだ吸つてるんだつてな。喜久、いい加減に禁煙しろよ。セシリ

アが辞めてくれないって嘆いてたぞ」「だろうね」

一夏が困った顔をして、シャルルが頷いた。勘弁してくれ、あいつは俺の姑かよ。

俺は本題を切り出すため、この話を一旦区切ることにした。

「話しへ変えるけど、一夏はシャルルのことをどう思つてる？」

「シャルルがしたいようにすべきだ。俺は、そう考へてるし協力もする。生き方を決める権利は本人だけが持つてるとんだからな。それに対しても親なんてのは関係ない」

一夏の意見は、随分と熱意の籠つた返答だった。

「ありがとう、一夏」

暗に守つてやると言われたシャルルは、とても嬉しそうにしている。

「一夏が言つた方向で、概ね俺の意見も一緒だから。まあ、問題はなさそうだな」「そうだな」

これで今のシャルルにとって、一番アウトになりそうな原因が除外された。それにしても、シャルルは俺が思つてたよりも早く一夏に打ち明けたみたいだな。これは、予想して考えてたより良い傾向だ。

「喜久、ありがとね」「ん？」

ふいにシャルルが俺に話し掛けてくる。

「喜久が僕の背中を押してくれたから、一夏にも正直に話すことが出来たんだ。だから、ありがとう」

「そう思うなら、なんで煙草の在り処をセシリ亞に教えたんだよ？」

「決まってるでしょ。それは、僕も喜久に煙草を辞めて欲しいからだよ」

「ああ！…敵が2人から3人に増えやがった。

俺は心の中で、早く20にならないかと虚しく願う。シャルルは気分よきそくに満面の笑みでこっちを見ているが、俺の気持ちは沈み込む一方だ。そんなことを考えていると、一夏が話題を変えてきた。

「それより、喜久は誰とペアを組むんだ？俺はシャルルと組むことになつたけど」

「そうだね。僕は一夏と組むけど、喜久はセシリ亞さんと組むのかな？」

ペアを組むとは、学年別トーナメントのことだ。今回は、学年別トーナメントでペアを組んでの参加が義務付けられている。俺は、内心でそれに対しての方針を既に固めていた。

「俺はセシリ亞とは組まないよ。フリーで良いし、組んだ奴に合わせて行動するよ。ただし、ボーデヴィッヒの奴と当たるまでだけだな。あいつに当たつたら、全部好きにやらせてもらひ

「セシリ亞さんと組まないのは1対1で勝負したいから？」

俺は心中で手放しに、シャルルへ賞賛を送る。相変わらず女の勘てのは鋭いよな。恐れ入るし、すごい能力だと思つ。

「そうだよ。あいつは連携を望むだらうからさ。でも、それじゃあ

一夏のねーちゃんにお預けくらつてる意味が無いだろ？「気持ちはわかるけどな。でも、ラウラは強いだろ」

前に頬を叩かれた記憶が過ぎたのか、一夏が少し嫌そうな顔をした。

「シュヴァルツェア・レーベンにはAICOもあるしね。喜久、勝算はあるの？」

「無いよ。だけど、一回は身をもってAICOをくらつてるからな。もう、あんな不意打ちは食らわないさ。皮肉だけどな、ISの操縦だけなら俺はあいつに負ける気はしない」

俺が意氣込んでいると、来客を告げるノックが廊下側のドアから聞こえた。俺は話を中断してドアの方へ向かう。

「どちらさんすか？」

「セシリ亞です。開けて頂けますか？」

うわ、話題に上がつてた人が来ちゃつたよ。俺が後ろを向くと、一夏とシャルルが苦笑していた。

さて、なんて言って向こうに納得してもらおうか。俺は頭の中で思案しながら、ゆっくりドアを開けてセシリ亞を迎えた。

——

学年別トーナメントの当日。俺は、相方になつた人間とアリーナの中央で相手チームを見ていた。そして、相方に対して盛大に舌打ちをする。

「くそったれ、何でお前が相方なんだよ」

「それはこっちの台詞だ。これでは、貴様との勝負を預けた意味がないではないか」

よりもよって、自動的に決められた俺の相方はボーデヴィッシュだつた。

これじゃあセシリアに、ものすごい苦労してペアを断つた意味が無い。俺の労力を返せや、このドイツ人め。自分の中でのやる気がどんどん萎んでいくのがわかる。

「俺はお前とやる以外、なにも興味ないからな。試合が始まつても、戦う気なんてさらさら無いぞ。むしろ、棄権したい」

「貴様との勝負は預けといつてやる。私は織斑一夏にも用があるのでな。もし勝手に棄権してみる、その時は貴様を血祭りに上げてやるから覚えておけ」

「は、言つてろよ」

最早、チームプレイのチの字もない。俺はだらけた姿勢のまま、対戦相手を見る。そこには、やる気満々な一夏とシャルルが居た。

「お前の力は借りん。せいぜい後ろで指を咥えて観戦しているのだな」

「名案だな。そつちが全部やつてくれんなら、俺は後ろで寝てるとするわ」

ビーッと試合開始の合図が鳴ると、ボーデヴィッシュが前に。俺は後ろに下がりエスを粒子化した。そして、そのまま寝転んで欠伸をする。樂をさせてくれると言うのだから、喜んで答えよう。前方ではボーデヴィッシュと一夏、シャルルがアリーナを最大限に利用して戦

闘を開始している。そして、一夏から「喜久、まじめにやれ……」と大声が聞こえた気がした。

そんなの知ったこっちゃない、文句はボーデヴィッシュに言え。IISは完全に仕舞い込んでしまったので、今は通信さえできはしない。織斑姉の阿修羅のような怒り顔が浮かんだが、気にしないで俺は観戦を楽しむことにした。

しかし、やうはさせまいとアリーナ中に響く、織斑姉のふざけた命令が俺の耳に入る。

『織斑にデュノア、お前たちの試合形式を変更する。暫定ルールだ。参戦していない馬鹿を倒したら、その場で勝利したことを認めてやる。今すぐに銃弾を浴びせろ……』

ふざけんな、何でそんなにドンなんだよ……！Sを瞬時展開してスナイパー・ライフルを構えると、シャルルが俺の方へ向かってきた。おいおい、俺のことは無視してくれよ本当にさ。

「さほる喜久が悪いんだよ……そのままやられてくれない？」
「やだね！だいたいな、俺は”面倒臭いは放棄する”つてのが、座右の銘なんだよ……！」

オレンジの装甲に包まれたシャルルが高速切替(ラピッドスイッチ)を使いながら多種類の武器から銃弾を弾幕のように放つてくる。俺は短連続の瞬時加速(イグニッショングースト)を利用して、それを一発も弾が掠ることなく避けきった。すると、シャルルはライフルとブレードに装備を整えながら俺との距離を計つて、その場で停滞しだす。

「さすがは喜久。怪物じみた動体視力だね」

「そんな評価は嬉しいねーよ」

俺はスナイパー・ライフルを両手に持つて、弾丸を発射した。シャルル目掛けてそれを撃ち放つと、そのまま急接近を仕掛け^{する}。すると、シャルルは俺の攻撃を避けながらライフルをすぐさま高速切替^{ラピッドスイッチ}し、マシンガンの乱れ撃ちを開始した。

「じゃあさ、これには付いて来れるか？」

俺は笑いながら言つて、持つているスナイパー・ライフルをシャルル目掛けて思い切り投げる。次いで瞬時展開で取り出した2つ目のスナイパー・ライフルを構えると、そのまま投げぬいたスナイパー・ライフルに向けて弾を発射した。シャルルの近くで投げたスナイパー・ライフルが爆散して、円状に飛び散る破片と煙を発生させる。

「くう！」

「破片の散弾効果だ。避けられないだろ？」

俺はそれに構わず、シャルルの元へと突進した。煙の中へ突っ込むと、シャルルが盾を構えているのが目に入る。どうやら、ぎりぎりで高速切替^{ラピッドスイッチ}して防御したらしい。本人の技巧が優れている分、その堅実な部分が硬さになつてISに反映されているのがわかる。

打撃は受けられる。しかし、掴むことはできるだろう。俺は、すかさずシャルルの後ろに回りこむと、持っていたスナイパー・ライフルを粒子化してシャルルの片足を両手で掴んだ。

「股が裂けたら、責任とつてやるよ
「なあ！…変

変態と言いかけてんだろう顔の真つ赤なシャルルの言葉が千切れで、俺を軸に盛大な回転を開始する。片足ジャイアントスイングはIS

の力を借りて、ジオットコースターの速度を直ぐに叩き出した。

男じゃなけりや、股関節が地味に痛くなるくらいの筈だ。俺は目標物の狙いを定めるために、辺りを見回す。確認すると、離れたところで一夏とボーデヴィッヒが接近戦を行っていた。

「一夏あ！プレゼントだこの野郎！！」

「ええ！？きやあああ！！」

最後の一回転に瞬時加速で捻りを加えて、悲鳴を上げたシャルルを投げ飛ばす。人間砲弾の如く飛んでいったシャルルはボーデヴィッヒの背中に激突して、そのまま仲良く一夏を巻き込んでアリーナの端に激突した。

すると、いち早く起き上がったボーデヴィッヒが、お返しとばかりにレールカノン砲から弾を発射してくる。俺はそれを再び瞬時展開したスナイパーライフルで射撃し、飛んでくる砲弾の軌道をずらしながら避けきつた。

『何の真似だ、貴様ア！！』

激昂したボーデヴィッヒが、俺に向かつて叫ぶ。もちろん、俺の方に一人よこしたから送り返しただけだ。当然、織斑姉のことをボーデヴィッヒに八つ当たりするのも忘れない。俺は姿勢を直すと、スナイパー ライフルを更に展開して両腕に装備を整えた。

「一夏に投げたんだ。でも外れたみたいだな」

『ぬけぬけと嘘を吐くな！！思いつきり、狙つただろう！！』

「俺を殴りたきや、2人に勝つてからしろ。もちろん俺は手伝わないから、あしからず」

『終わつたら、覚えていろ！！』

やなこつた。俺は適当にその場で待機して、戦いを見守る。対戦相手の一夏とシャルルも、俺のやる気が完全に無いのがわかったのだろう。2人掛かりでも厳しいボーデヴィッヒの方へ、攻撃を集中し始める。戦闘が本格化して時間が流れていくが、有利だったボーデヴィッヒがあるところで押され始めた。

ボーデヴィッヒの能力値は高いのだろう。が、連携の取れた一夏とシャルルにやり返され始めている。俺は戦うつもりが無いので、ボーデヴィッヒが負けたら棄権するかななどと考え始めた。

そして、一気に試合進行が変化し、シャルルがボーデヴィッヒを追い詰め始める。いつの間にやら覚えたのか、イグニッショントースト瞬時加速で一気に距離を詰めていく。しかしそれも束の間で、このままだとシャルルがボーデヴィッヒのAICに止められてしまつ。

『ふつ……。だが、私の停止結界の前では無力!』

ボーデヴィッヒが勝利を確信した台詞を叫ぶ。あれじや、まんま悪役の台詞だな。

しかし、ボーデヴィッヒがAICを発動する前に、一夏がシャルルのアサルトライフルで発射した弾丸を奴に当てた。

続けざまに、シャルルのパイルバンカーみたいな攻撃が決まる。ボーデヴィッヒの表情が歪んで見えると、威力が強すぎて人体にも影響が出ているのがわかつた。

シャルルはそのままの勢いで同じ攻撃を放ち続けながら、ボーデヴィッヒと一緒にアリーナの端まで移動し続ける。これは、流石に決まつただろうな。俺は棄権するために、手を上げて白旗を揚げる準備をする。

「一夏、俺は棄権する

からと言いかけた瞬間にボーデヴィッヒを中心に閃光が走って、シヤルルがその場から吹き飛ばされた。

2・8_学年別トーナメント（後書き）

このお話を読んでいただいている皆様、大変にありがとうございます。
お話を更新させていただきました。また、各話の誤字脱字の修正及び、
一部加筆修正をさせて頂きました。

「ああああああつ……！」

ボーデヴィイツヒの悲痛な叫び声がアリーナ中に響き渡る。それは何を求めて叫んだのか、理解不能な雄叫びに聞こえた。

ツシュして、尻餅を着いているシャルルを立たせた。

「大丈夫か？」

一夏の方を向いて異常が無いのを確認すると、俺は再びボーデヴィイツヒの方を向く。そこには、IS以外の何かに変態していくような、シユヴァルツェア・レーゲンの姿があった。

黒いアライムがホーリーヴィンビを覆いきり、中に取り込んでいく。そして、それは人型に落ち着くと、原型となるで違うエスの形をしていった。

「VTSシステム」

「え？」

俺が無意識のうちに黒く象られたHISの名前を呴き、それにシャルルが反応した。

昔にいたところで学習させられた知識が蘇る。しかし、あれは条約なんかで禁止されている筈だ。なぜこんどころで、ボーデヴィ

ツヒの奴がそれを起動させてる？

俺が焦りながら考えていると、突然に一夏がＶＴシステムに飛び掛かつた。

その行為に思わず叫んでしまう。

「馬鹿やううが！！」

その場から俺は咄嗟に瞬時^{イグニッシュン・ブースト}加速をして、一気にＶＴシステムへ距離を詰める。

一夏は剣戟による一撃の打ち合いの後、二撃目を避けた瞬間にＩＳが粒子化した。エネルギーが切れてＩＳが強制解除されたらしい。

「それがどうしたああっ！」

「どうしたじゃねえだろ！！お前は阿呆か！－！」

俺はＩＳの腕で、一夏の顔に軽くラリアットをかます。極力加減して抑えだが、ＩＳの威力は凄まじく一夏は後ろへ盛大に吹っ飛んだ。まずいな、思つたより吹つ飛んだよ。

「死にてーのかよ、一夏」

「うるせえ！！邪魔すんじゃねえ、喜久！！」

立ち上がり、ＶＴシステムに一夏が再び突撃しようとする。溜息を吐いた俺は、持っていたスナイパーライフルの銃口を一夏の目の前に突きつけた。

流石にこれは効いたのか、一夏は思わずその場で立ち止まる。

「もう一度聞くぞ。お前は、死に行きたいのか？」

「頼む喜久、どいてくれ！！あれは、千冬姉なんだよ！！千冬姉だけのものを……あいつは！！」

「頭冷やせよ。お前、興奮しすぎだぞ」

俺は説得するよりこ、ゆっくりと話す。少し落ち着いたのか、VTシステムばかり見ていた一夏がやつとこちらを向いた。俺は視線だけ動かしてVTシステムの方を確認する。奴は俺と一夏が問答している最中に、攻撃を仕掛けた来なかつた。

そのことから、カウンター型に設定されているらしくことがわかる。

「それには、喜久。俺はあんなものに振り回されてる、ラウラのことも気に入らねーんだよ。ISもラウラも、一発ぶつ叩いてやらねえと気がすまねえ」

俺は周りを見渡す。アリーナは騒然としていて、既に緊急用シャッターが閉まり始めている。そして、警報音と共に、緊急避難の呼びかけが始まった。

よく聞いていると、生徒と来賓がアリーナから出るよう言われている。そして、教師達は騒動の鎮圧にくるらしい。俺は、一夏に笑つて答えてやる。

「なあ、一夏。そんなんに、あの黒いのをぶつ飛ばしたいか?」

「ああ」

「じゃあ、乗つてやるよ。そつこつのは大好きだからな。俺がバツクアップしてやる」

一夏は嬉しそうに頷き、俺は両手に1丁づつ持っていたスナイパー・ライフルを^{ラピッドスイッチ}高速切替で二刀流のブレードへと展開する。それを見ていたシャルルは、溜息を吐きながら一夏に呼びかけた。

「一夏、ISのエネルギーはどうするの?普通のISじや無理だけど、僕のなら変換して白式にエネルギーを渡せると思つよ。良けれ

ば使う?」

「ほんとかシャルル!?」

「その代わり約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。喜久もついてるからな、これで負けたら男じゃねえよ」

一夏が籠手のついている腕をシャルルに差し出す。

「じゃあ、負けたら喜久と一緒に、女子の制服で学校に通つてね」「はあ!? おい待てよ、何でそつなる?..」

俺は、慌てて抗議の声を上げる。何で俺はいつも、他人に巻き込まれなきやいけねーんだよ。すると、シャルルが俯いた仕草でぼそりと呟いた。

「さつきから、下半身がズキズキするんだよね。喜久、なんとか知らなーい?」

「行くぞ、一夏! さつきとエネルギーを転送してもうえ!」

待ってくれ、そういうネタ振りは後でにしてくれよ。俺は一夏を慌てて促し、一夏はエネルギーをシャルルから転送してもう。転送が終わると、俺は一夏にどう動くか指示を出した。

「俺があいつの一刀を止めてやるよ。その間に、一夏は止めを刺せ」「ああ、頼んだ」

一夏が部分展開で零落白夜を発動させると同時に、俺は一気にV-Tシステムに突っ込んだ。反発して振りぬかれるV-Tシステムからの一撃は、とても綺麗な剣戟の軌跡を描く。普段なら、避けきるのは難しいような剣速だ。

「俺を切りたきや、もつと早く振りぬくんだな！！」

俺は、ISTSを発動させて五感と同調率を強化する。そのまま両腕をクロスさせると、敵の得物と俺のブレードがかち合って青い火花を散らした。

俺の横を一夏が鋭い切り込みで飛び込んでいく。

「いえあ！！」

叫びの咆哮と共に、一夏がVTSシステムの胸から下へと零落白夜を切り付けた。

飛び交う戦闘機が突然、視界内に入る。俺は辺りを見回そうと首を動かすが、まったく動いてくれる気配がない。俺はどこにいるんだ？ここはコックピットの中なのか？

泡が見える。世界は薄い緑色のフィルターが掛けり、泡はぶくぶくと下から上がりつづけている。俺はそれを眺めながらガラスの外を見た。外では、同じようなタンクが並んでいた。

大人の軍人らしき人間たちと、同じようにライフルのスコープを覗いている。的に狙いを定め、的確に的を撃ち抜いた。そこで、俺は初めて理解した。これが、ボーデヴィッヒの記憶なのだと。

「遺伝子強化試験体C-0037、今日から君の名前はラウラ・ボーデヴィッヒだ」

軍人の格好した男から名前を言い渡されている。… そうか、お前も俺と同じ側の人間だったのか。

織斑姉が視界に入る。外見は変わらないが、軍服を着ていた。

「……よくわかりません」

ボー・デ・ヴィイッヒが何かに対して返答している。

「今はそれでいいだ。いつか日本に来ることがあるなり会

そこで、俺の視界が再びアリーナに戻る。まるで、ビデオのフィルムが一気に巻き上がったような感覚だった。俺が慌てて状況を確認すると、一夏がV-T SYSTEMから出てきたボー・デ・ヴィイッヒを抱えようとしていた。

「終わったか

俺は混乱したままで、ぼそりと呟く。

「……まあ、ぶつ飛ばすのは勘弁してやるよ」

ボー・デ・ヴィイッヒに笑いかけながら話す一夏に安堵し、ISTSの反動で疲れが増したのを認識する。俺はもう、くたくただよ。いつの間にか到着していた教員がこちらにやってくる。俺はISTSを粒子化して、今の混乱した頭を整理しだした。

現在、俺は一人でだるく感じる体を引きづりながら、ある部屋を目指している。どうしてもやつておきたいことがあって、俺は体に鞭打ちながら移動していた。

目的の場所につくと、先客がドアから出でてくる様子が遠巻きに見えた。タイミングが良いのか悪いのか、俺は出てきた織斑姉に呼びかけられる。

「市隈、何をしている?」「見舞いですよ。そんだけ」

織斑姉は俺を一瞥すると、にせりと笑った。

「どうしてこいつも、ラウラの見舞いに来るのがお前だとわな。いがみ合つてた割に、馬が合つのか?」

「それならそれでも良いですよ。俺にはビックリも構いませんからボーデヴィッシュに不意打ちをくらったのを思い出すが、今の俺にはまったく怒りなんてもんは湧いてこなかつた。」

「ほつ、ちゃんと成長してるじゃないか。あまり時間をかけるなよ、相手は病人だからな」

「イエス」

織斑姉がツカツカとヒールを鳴らしながら去っていく。俺は軽くノ

ツクして目的の部屋へ足を踏み入れた。

俺が部屋に入ると、ボーテヴィッヒが「ひひひひひひ」って話し掛けて来る。

「なんだ? やられた私を笑いに来たのか」「いや。そうして欲しかったのか?」

俺の返答に、ボーテヴィッヒが嫌な顔をした。

「馬鹿をいいえ。そんなことされて、喜ぶ人間がいるわけないだろ」「いもつとも。かけてもいいか?」

俺はボーテヴィッヒのベッド近くにあるパイプ椅子に座つていいか質問する。奴は少し迷つたようだつたが、そっぽを向きながら俺の返答に応じた。

「好きにじる」

「お言葉に甘えさせてもらいつよ」と

俺は椅子を引いて座らせてもらつ。そして猫背になりながら、両手を組んでぼそりとボーテヴィッヒに言葉を発した。

「コード0211つて単語を知つてるか?」

「いや」

「じゃあ、中東で3年前に起きたHISの暴走事故つて言えばわかるか?」

瞬間、ボーテヴィッヒが驚いた顔をして俺の方を向く。

「なぜ、お前がそのことを知つている。あれは、アメリカが必死に

隠蔽工作をしてくるものだぞ。…まさか、関係者が？」

「いや、当事者だ」

ボーデヴィッシュの目が見開かれるのがわかつた。俺は気にせず話しつづける。

「そして、加害者だよ。あの事故で暴走したＩＳ操縦者ってのは、俺なんだ」

少しの間2人揃つて沈黙した。やがて、ボーデヴィッシュがゆっくりと喋りだす。

「しかし、それでは私の知っている知識と矛盾する。資料では暴走したＩＳは、そのままＩＳのコア以外は抹消されたと記されていたぞ」

「それは、向こうがでっち上げたもんだよ。いつもそうだけど、表に出るものと本当のものは違う。現に俺は生きているし、こうして今もここにいる。這つても這つてもな、拭えない業を背負つてゐるだよ」

ボーデヴィッシュは考へ込むような仕草をして、頭の中を整理していくようだった。しかし俺の独白が腑に落ちないらしく、その疑問をぶつけてくる。

「なぜ。お前は、秘匿しておかなければならぬことを私に話す？
ひけらかして、語る内容ではないだろ？」

「俺はな、ボーデヴィッシュ。お前と同じだよ。お前と同じ、試験管ベイビーだ。まあ、俺の場合は使い捨てのタイプだったけどな」

ボーデヴィッシュの過去を俺が知っていることに、奴はいきなり慌て

始めた。取り乱したといった方が正しいだろうか。

「待て！何で、お前は私の過去を知っている…？」

「まあ、最後まで話させてくれよ。相手の話はちゃんと聞くもんだら？」

興奮しているボーデヴィッシュをしばらく宥めてから、俺は話の続きを口にする。

「そして、俺にはエレとの同調を促すなんて能力もある。もちろん、代償はあるし負荷がすさまじいんだけどな。前にAICを無理やり破つたことがあるだろ？あれば、俺がお前の同調率に侵食したから出来たんだ」

まあ、あの時はぶつけ本番で使ったんだけどな。正直、今でもよく成功したと思つよ。

「…そりゃ。いやしかし、そんなことが可能なのか？…だが、事実だからな。お前が持つている能力で、私の停止結界をキャンセルしたのか。しかし、それと私の記憶がどう繋がる？」

「一夏が、お前のことを助け出しだろ。俺は補助に回つてな。お前を止めるために、少しだけ能力を使用したんだ。その時、原因は不明だけど俺はお前の記憶を覗いた。不可抗力だし、見たくて見たわけじゃない」

俺が、ボーデヴィッシュの記憶をなぜ覗けたのかはわからない。だが、俺は相手の大切にしているものを盗み見してしまった。

「俺のエゴだけどな。フュアじやなきや嫌だつて感覚がある。ボーデヴィッシュが差し出したわけじゃないが、俺は何か返さないといけ

な」と思った。これが、お前の腑に落ちない」との答えだよ

俺はそのために自分でリスクを犯す。だから、シャルルの時もそれに見合つものを差し出したつもりだ。俺が真剣な顔をしていると、ボーデヴィッヒは何がおかしいのか突然に大笑いし出した。

「ふう、あはははは！…だあ、めだ、あはははははは…！」

部屋中に笑い声が木霊す。何が、つぼに入ったんだよ。俺はボーデヴィッヒのなにかに変なスイッチをいたのか？

「いやあ、すまん。ひー、腹がよじれそうになつた」

やつと笑いが收まり、ボーデヴィッヒは一呼吸置いて喋りだす。

「お前のHゴトやらにな、思わず笑つてしまつた。理由を聞けば、フェアではないからと来たもんだ。まるで、子供の理屈じゃないか。随分と、リスキーな性格をしているものだな」

「ごもっともで。否定はしないよ」

「楽しませてもらつた礼だ。今のことば、私の胸の内に閉まつておいてやる」

「感謝しますよ、お嬢さん」

ボーデヴィッヒが笑い、俺もつられて笑う。俺は和やかな雰囲気に、思わず浸かるような気持ちになつた。

「私から、お願ひがあるんだが

「おや、珍しい」ともあるもんだ。

「なんでしょうか？今だけなら、何でも聞いてやるよ」

「教官にもつと、誠実に接してはくれないだろうか？あの人は、私にとつての恩人であり憧れでもある。そしてなにより私にとつては、とても大切な家族のようなものなんだ」

家族に恩人ね。ボーデヴィイッヒが本音で語ったであろう言葉に、色々なものが俺の胸辺りでぐるぐる回る。自分にも、もちろん家族のようないい人がいるだけに、これらのキーワードは心によく響く。俺は一夏を大切にしている織斑姉を思い浮かべた。その中に、ボーデヴィイッヒが加わる。三人は仲良く笑っていた。

「きつついこと、要求してくれるな。でも、俺にも血の繋がつてない大切な家族はいるしな。できるだけ、努力はさせて頂きますよ。保証は出来そうにないけどな」

「そうして欲しい。できれば、保証もして欲しいのだがな」

俺が苦笑いし、ボーデヴィイッヒは小さく笑った。ふと、夕暮れ時の陽射しが無くなり始めたのに気づく。窓の外をのぞけば、夜の帳が降り始めているのが確認できた。

2・10 対話ノ時間（後書き）

読んで頂いている皆様、大変ありがとうございます。まさか、一週間も経たないうちに、ここまでランキング上位に食い込むとは思つてもいませんでした。自身が小心者なので朝に確認して驚愕してまい、挙句の果てに少しですが吐き気を起してしました。

感想で頂いております千冬さんの扱いですが、主人公を制御できる人で当てはめて書いてしまったために、あのような設定にしてしました。大変申し訳ありません。自身の中での主人公像は不良のような少年で、扱いの難しい生徒としていました。そうすると、教育者という立場から、千冬さんの中での生徒をどうやって育てていけば良いかということに発展します。その上で、千冬さんなら主人公に対してもここまでやつて良いか、距離を測りながらやるといつなるのかなと自分なりに田測を立てて文章を書いていました。

長々と書いてしまいましたが、理由としてはこのような感じになります。ご指摘を受けまして、オリジナル設定を変更しました。無い頭で考えるのですが、結局はISTSという設定を利用するくらいしか思いつきませんでした。これで、主人公の考え方には新しい方向性を植付けられたと思うのですが、どうでしょうか？

ここまでこの後書きを書くために、2話ほど一気に書き上げたので、少し疲れました。なので、ペースを少し落とさせていただきたく思います。申し訳ありませんが、よろしくお願ひします。

ここまでに、個人で感想を書いていただいた方へ。申し訳ありませんが、返信を少し待ついただけます。後日、必ず返信いたします。

――――――

夕食を食べ終えて俺が自室に帰ると、シャルルは外出中みたいだった。眠い。そう考ながら明かりも点けづに、そのまま着替えることもなくベッドへと倒れこむ。ひんやりとした感触が、無償に気持ち良い。そう思ついたら、ふいにノック音が聞こえた。

「市隈君、いますか？」

「開いてまーす」

もう、動く気力が残つてないので返事だけする。すると、山田先生がなにやら嬉しそうに入室してきた。

「良いお知らせがあります！…なんと、今日から男子の大浴場が使用解禁です」

「あつそお」

心底どうでもいい。俺は適当に返事して、顔をベッドに埋める。すると、俺から返ってきた冷たい反応に、山田先生がおりおりし出した。

「そんな！織斑君はものすごい喜び方をしていたのに……」

「俺は睡眠と惰眠の方が幸せですから」

「そんなこと言わずに、せつかくなんですから。勿体無いですよ、ね？」

なんで、そんなにしつこいんだ。しつこは、今すぐ寝たいんだよ。自分のやりたいことを阻害されて、俺はいい加減イライラしだした。

「勿体無いのは、俺の時間が今現在も先生に一秒ずつ削られ続いていることですから」「そこまで拒否しなくとも……」

山田先生が、その場で打ちひしがれたように座り込む。違うんだ、こつちは座るんじゃ無くて、この場から立ち去って欲しいんだよ。しうがなく、俺は頭を切り替えて意地悪な質問をすることにした。

「山田先生が、一緒に入浴してくれんなら入ります」「…え、そんな」

山田先生が、その場でフリーズした。おいおい、そこは即座に否定して早く退室してくれよ。10秒くらいした頃だらうか、再び山田先生は始動して立ち上がった。

「それはいけません……市隈君、一体何を考えているんですか……」「エロいこと」

怒つてもまったく迫力を感じない。そして、俺の回答に山田先生は力なく壁に持たれかかった。

そのまま、なにやらブツブツと独り言を呟きだす。

「織斑先生、私には教師には向いていないのでしょうか。私には、大事な生徒を育てる力が無いのでしょうか。どうせ私なんて」

末寺の坊さんが唱えるお経のように、山田先生は永遠に何かを呟き

続けそうな雰囲気を醸しだしている。勘弁してくれ、泣きたいのはこっちだよ。大体、風呂一つで何でそんなに大事へ発展するんだ。俺はしようがなく風呂に行く旨を伝えて、山田先生を納得させつゝ部屋から退出してもらつた。

———

山田先生をフリーズさせたように、今度は俺が大浴場の脱衣所でフリーズしていた。

おいおい、これはどういうことだ。なんで、一夏とシャルルが一緒に風呂入つてんだよ？お前らはそういう関係に発展してたのか？そう考えたが一夏のことと思い浮かべ、それは無いだらうなとシャルルが哀れに思えた。

さて、どうするか。俺は、このまま立ち去るべきだろうと考える。それが、あの2人にとって良い結果に繋がる筈だとと思うからだ。しかし、良い気分でアップの後は、それがダウンの落ちに繋がらない面白くない。俺は、少し考えた末に、軽く悪戯を決行することにした。

2人の脱衣籠を確認する。そこにはきちんと畳まれた衣類があった。2人とも律儀だ。俺は両方の下着だけを交換して入れ替えた後、脱衣所のドアを挟んで反対の廊下側に退避する。後は、どちらかの悲鳴が上がるのを待つだけだ。

「きやああーー！」

俺が廊下に出て15分ほどたった頃、シャルルの悲鳴が上がつた。

「シャルロット大丈夫か！？うおつ！！」

すると、今度は一夏の声が聞こえる。あーあ、中が覗けたら面白いのにな。しかし、一夏め。確認するなら、浴場からガラスドア越しに安否を聞けばいいのに。最後の驚きは、間違いなくドアを開けちまつた声だな。

「それぢやあああ……」夏のHシチイ……。

「違う、待つてくれ！！俺はまだ悲鳴が聞こぐよおあー！」

シャルルのすごい叫び声が聞こえ、次いで一夏のいいわけと何かに悶絶した声が聞こえた。

予想より被害がでかくなってるなまあいいか俺は関係ないし。

さて、そろそろ退散した方がよさそうだな。
俺は壁に寄りかかるのを辞めて、ゆっくりと廊下を歩き出した。

しかし、シャルロットてのは、シャルルの本名か何かだろうか？

—

俺が部屋で寝ていると、雑なドアの開閉音が聞こえてシャルルが入ってきた。

「……うう。もう、一夏の馬鹿あ

なんか、半泣き状態だな。それしたのは俺だけど、言つたら後が怖
そうだ。そう思つていたら、ぱたりと倒れこむような音がした。

衣類の擦れる音がして、シャルルがベッドに潜り込んだのがわかる。

「喜久、起きてる?」

「ん?」

俺はシャルルの声だけを聞きながら、とりあえず起きてることを知らせる。

「大事な話があるんだ。一夏には、もつ話したことなんだけど」

シャルルの声が室内に響く。俺はまどろみの中で眠りかけの頭を起した。

「僕の本当の名前。お母さんがくれた大事なもの」

「わりい、眠いんだ。明日じゃ無理か?」

「え、ああ。ごめんね。そうだね、もう遅いよね」

俺はそういうて、視線を机の方へ向ける。シャルルのiMacが待機状態のアクセサリーで置かれているのを確認すると、安心してもう一度布団に潜り込む。シャルルは静かに言葉を喋った。

「喜久、お休みなさい」

「ああ。お休み、シャルロット」

きっと、部屋は時間が止まったような空間になつたに違いない。シャルルからは、ピシリと何かで頭に輝を入れられているような音が聞こえた気がした。

「…なんで知ってるの?」

これは、断じて名前の確認でないのがわかる。俺は起き上がって、顔が真顔になつているシャルルを見た。

「だつて、脱衣所には俺も入れるだろ?」

「…まさか、いや、そつか。あは、頭が混乱してて、全然思い浮かばなかつたよ」

シャルルの視線がゆつくりと、ある場所へ移動するのがわかる。もちろん、俺はその場所を知つていて安心だ。俺はベッドから飛び起きた。机のところまで素早く移動した。

そして、シャルルのIOS待機状態のアクセサリーを掴み取る。シャルルが一拍遅れで動いた為に、すこく悔しそうな顔をした。しかし、そのあとはまた笑顔になる。

「フフ、ウフフ、ウフフフフフ」

乾いた笑いが木霊する部屋は、何か異質な空間を連想させる。これは壊れたな。俺は急いでドアを蹴り開けると、そのまま全速力で廊下を走り抜けた。

「嘉久ああ！…絶え、対にい、許さないからああああ…！」

後ろでは怒りが頂点に達したシャルルが、猛然と追いかけてくる。結局、この鬼ごっこにはシャルルが力尽きるまで続いた。

—＼／—

朝、シャルルに先に教室へ行つてほしいと言われて、俺は自分の席

で欠伸をかみ殺している。

「なあ、喜久。なんでお前の片目辺りに青タンができるんだ？」

「シャルルに昨日ぶつ叩かれたんだ。まあ、原因は全部が俺だけだ」

本当は一夏にも殴られそうだが、一度も殴られたくないので黙つた方が良さそうだ。

「今度はシャルルさんに何をしたのです？」

「いや、軽くからかったら仕返しされただけ」

「数少ない男性同士なですから、喜久さんはもっと仲良くすべきです」

ああ、そうだね。俺はセシリアに奢められて納得する。まあ、今後は寝不足になるのは避けたいから考えて行動しよう。そういうしていの内に、チャイムが鳴つてホームルームの時間が始まる。山田先生は挨拶を終えた後、視線を彷徨わせながらたどたどしい説明を開始した。

「えー、今日は皆さんに転校生を紹介しますというか……既に知っているんですけど。そこで、入ってきて下さい」

「失礼します」

そう言つて入ってきたのは、女子の制服を着ているシャルルだった。電子ディスプレイにはシャルロット・デュノアと表示されている。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願ひします」

俺は思わず、心中で笑つてしまつた。どうか、自分なりに考えた

答えが出たのかと。俺がそんなことを考えていると、クラスは突然すごい勢いで騒ぎ始めた。

「ちょっと待つてよ！じゃあ、今まで市隈と一緒に大丈夫だったの！？」

「あんた、シャルロットさんに変なことしてないでしょ！？」

「いや、だつたら既に俺は退学してるから」

俺は慌てずに答えて、セシリアの方を見る。セシリアはよく俺の部屋に入り浸っていたので、大丈夫なことを知っている。現に俺の方を見て、今もにこにこと笑っていた。それを見た女子達は怪訝な視線を向けるが、大丈夫なのかもといった表情だった。

「それより、昨日って男子が大浴場を使ってなかつたっけ！？」

そんな誰かの声が聞こえた瞬間、セシリアの顔が一気に変化する。

「喜久さん！」

「俺はそれもノータッチだ。シャルルと一緒に入つてたのは一夏だけだし」

「おい、喜久！なんでお前が昨日のことを知つてんだ！？」

セシリ亞は安堵し、一夏は叫びながら傍と昨日の答えを見つけたらしい。ものすごい顔で俺を睨み始めた。

「この野郎！！犯人はお前かあ！……」

「おい、一夏。ドアの外と篠ノ之は良いのか？」

「ドンッ！…

すると、一夏はぞつとしながら突然の衝撃音が鳴った方を向く。それは怒りに任せて登場した凰が、INSを展開しながら叫び声を上げているところだった。

「うー夏ああつー！」

そして、いきなり衝撃砲を一夏に向けて発砲した。いや、流石にそれはありえないだろ！！

すぐに惨劇が浮かんだが、その光景は意外なところからの助けで免れた。それは、寸でのところでボーデヴィッシュがINS展開してASICを発動、凰の衝撃砲を防いだからだった。

「助かったー！ありがとうなラウラ。むぐつー？」

うわ、ボーデヴィッシュ、やることなすこと大胆だよな。奴は一夏の顎を掴むと、いきなりディープキスをした。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

前言撤回、ボーデヴィッシュはまさに強引の権化だった。

「嫁？嫁じゃなくて？」

戸惑つた一夏が、俺も思ったことを聞く。

「日本では『氣に入つた相手を『嫁にする』』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

そんなもん、この国のどいで言つても通用しねえよ。あいつは誰に騙されたんだ？

俺は知恵を分け与えた奴が、ボーデヴィッヒを不幸にしていくこと
に気づいているのか理解に苦しんだ。

教壇を見れば、既に状況についていけない山田先生がおかしな笑い
を発し始めていた。可哀想に、こうなると場の収集は織斑姉だけが
頼りだな。

「あんたねえええっ！……！」

凰が叫び、再び衝撃砲を放とうとしている。一夏は逃げ惑うが、奴
の刺客は次々と現れた。

恐ろしいことに、セシリア以外の専用機持ち達がどんどんEISを開
していく。あいつ本当に死ぬんじゃないのか？

見れば、シャルルもといシャルロットも同じようにEISを開いていた。
しかしそういな。これで今現在展開しててる全員が暴れたら、
この校舎自体が崩壊するんじゃないのか？

俺は歯止めの利かない状態に、深く溜息をついた。

しううがねーな。これで昨日の貸し借りは無しだぞ、一夏。俺は両
手でメガホンを作ると、入学日以来で久しぶりに織斑姉の声を真似
る事にした。

「この、馬鹿者どもが！！今すぐEISを解除しなければ、お前ら全
員夜まで廊下に立たせるぞ！……！」

クラス全ての人間が、全員ビクウー！といつた感じで声の発生源を探し始める。EISを開いていた人間は、神の一聲を聞いたかのように恐れ慄いていた。

織斑姉の声は絶大的な効果だ。これなら本人が来るまでは、問題な
さそうだな。

俺は席でだらりとすると、窓の外を見る。天気は快晴で、太陽は眩
しく輝いていた。

2-11_出サレタ答エ(後書き)

小説をお読みになつて下さつている皆様、大変ありがとうございます。

今回読んでくださつた方の中に、私に『恋愛』に投稿してくださこと言つて下さつた方がおられました。感謝をどうこいつた形で返せばよいか考えた末、10日後に投稿しようかと思つていた次話を感謝の思いとして投稿させて頂きます。稚拙で、文章力の無い小説ですが宜しくお願ひいたします。

追記：2-1 2-4～2-10 を修正しました。

「起きてくれ喜久、喜久」

「揺すられてる？」

「誰だよ。俺は無理やり起しあつとする奴にイラつきながら、目を開けた。

まだ外が暗いじゃん、夜明け前に何やつてんだよ。だいたい、今日は休みなんだから寝かせろよ。ん？

口元辺りになんか当たって

「！？ むぐつ！！」

「落ち着け。静かにしてくれないか、横で寝ている一夏が起きてしまう」

視線だけ動かして、俺は同室の一夏が幸せそうに寝ているのを確認した。

口を塞がれて言葉が出せない。俺の目の前には人差し指を口に当てながら、こっちに顔を度アップで近づけて見ているボー・デ・ヴィッヒがいた。

おい、なにやつてんだ…。

俺が冷静さを取り戻したのを確認すると、奴はすじごとにとを要求してきた。

「お、お願がある。私の部屋で時間まで寝てくれて構わないと、今だけ部屋を交換してくれないか？」

ボー・デ・ヴィットヒは恥じらいながら言つてゐるが、行動が大胆すぎて可憐さが微塵も感じられない。というか、もはや常識がぶつ飛んでいる。恋が人を盲目にするのはわかるけど、これは何か違う気がした。

大体さ、お前どこからこの部屋に入ってきたんだよ？ボー・デ・ヴィットヒが俺の口から手を外す。俺は口元に自分の手を平たくして当てるト、一夏に聞こえないようにする。そのまま、ボー・デ・ヴィットヒと互いに小声で会話を交わす。

「鍵はかかるってた筈だけど？それと、夜這いのパターンがなんで逆なんだよ」

「入り口のドアはピッキングした。私の技術にかかれば、あの程度は造作も無い」

「おい、それ犯罪。そして、絶対に威張ることじゃない。しかも、自慢げに語るな。俺も屋上にじ開けたから人のこと言えないけど。

「だいたい、同室のシャルロットには許可取つてんのかよ？」

取つてゐるわけないだろ？な。ボー・デ・ヴィットヒは心配するなどと叫びた表情で、さも当たり前のように話す。

「あいつなら、思考が柔軟だから大丈夫だろ？

やつぱりか。なんだ、この絶対君主は…。理由が余りにも酷すぎる。言われた通りに実行したら、きっと俺と同室してた最後の一晩みたいなことが起きるに違いない。俺は溜息を一つ吐いて、しうがなく従つことにした。

「いつもは、篠ノ乃が一夏を起こしに来る。その時間まで、俺は席を外させてもらひ。これでいいか？」

「それで構わない。ありがとう、喜久」

感謝するなら、寝かせてくれよ。今度は進入されないよう鍵を5重ロックにしてやろうか。でも、お金も馬鹿にならなそうだし、こいつはそれでも平気で突破しきそうだ。

俺は適当に服を着て歩いていくと、廊下側のドアに手をかける。後ろを振り返れば、手を小振りにする可愛いしぐさのボーデヴィッヒがいた。

。アーティストが歌詞を書くときの心構え

「どうがいい。一階の入り口近くにあるロビーで、朝刊の新聞でも読んで時間潰すか。俺は一人ごちりながら部屋を後にした。

—

「何で教えてくれなかつたんだ。俺はお前のことを恨むぞ、喜久」

一夏が酷い顔をしながら、俺のほうを見る。あの後、俺が部屋に戻ると篠ノ乃が一夏を攻撃してサンドバッグにしていた。傍目から見て、痛々しい光景がそこには広がっていたのだ。

「俺だつて被害者だ。文句は絶対君主に言つてくれよ。だいたい俺
だつて、起きたときには首に軍用ナイフを当てられてたんだから」
「う、それは嫌だな」

一夏は青い顔をして納得する。まあ、ナイフは嘘だけどな。
俺は現在電車に乗つて、買い物に出かけている。一緒に行動してい

るのは俺たち一人の他に、セシリアとシャルロットだ。

「へえ、一夏。そんなことがあったの。道理で、起きたらラウラが部屋に居ない筈だよね。僕は、理由がやつとわかったよ」「待ってくれ！俺は被害者だ！！」

「そうだぞシャルロット。例えボーデヴィイッヒの裸を見ても、一夏が被害者だ。俺は一夏を擁護する。ちなみに俺は、ボーデヴィイッヒがシーツを体に巻いてたのしか見れなかつたけどな」

俺が爆弾発言を放り込むと、一夏が顔を勢いよく俺の方に向ける。セシリ亞は俺の発言に対し、顔が面白いように変化していた。前半の言葉で怒り、後半の言葉で安堵している。

「喜久！…それは擁護になつてねえぞ…！」

なんだよ、裸は適当に言つてみただけなのに当たりかよ。一夏の奴は幸せ者だな。

「一夏、二人で話をしようよ。そうだな、人の少ない車両へ移動しようか。もちろん、付いて来るよね？」

俺の知つている中で、シャルロットが一夏に最大級の笑顔を向ける。そして、完全に目から光を失っていた。

「覚えてろよ、喜久！…」

「安心しろ一夏、骨は拾つてやらんから」

一夏は苦悶の表情でシャルロットに連行されていく。哀れだな。それでも、4時起きのせいで眠い。何で俺まで買い物に付き合わなきやならないんだ。セシリ亞め、強引に連れ出しあがつて。

「嘉久さん、今日は一日楽しみましょう」

俺の対面でセシリアが嬉しそうに笑っている。俺は楽しく寝たいんだよ。

「買い物ってなんだっけ?」

「私、水着を新調したいんですね」

ああ、臨海学校用ね。俺はあるから買わんけど

「セシリアはスタイル良いもんな。普通に海に行つたら、男を選び放題だろ?」

「まあ、それは本当ですか!?!?」

俺が言つた言葉に反応し、すごい幸せそうな顔をしている。言葉の威力つてすごいな。言つのやめときや良かった。

「本當だよ。まあ、俺はもっと大人の女性が出で、魅力みたいなのがあつた方が良いけど」

「ぐうつ!!」

セシリアは、頭に漬物石が落としたような声を出した。その場でどんよりと沈みこむ。そして、色あせたフィルムのようになる。

「フッ。どうせ、私はまだ子供ですわ。く、しかし、いつか必ず振り向かせて見せますから」

発される言葉を聞いてると、なにやら自己完結したらいい。悔しそうな表情をしている。

「まあ、そんなに捻くれるなよ。今日は最後まで、ちゃんと買い物に付き合つから許してくれよ」

「それは、当然です」

「はいはい」

俺は適当に手を振つて答えた。

――――

目的のアウトレットのような場所に着くと、俺たちは女性用水着売り場の店に入つて行く。入店しているのは、女性がカップルしかいない。これは、男が一人で入ると浮くな。まあ、IS学園もそんな感じか。そして、今現在の俺はといえば、盛大に気分が萎えていた。

「嘉久さん、これなんてどうですか？」

「うん。右の方が見栄えいいけど、左はセシリアらしさが出てるんじゃないのか？」

セシリ亞が2着の水着を持って、俺に選ぶよう聞いてくる。

「ありがとうございます。でも、ちょっと色が好みではないのですわよね」

しかし、また何かに悩んだようなじぐさをして他の水着を選び始めた。

かれこれ、こんなやり取りを30分程繰り返している。セシリ亞、なぜ俺に聞いてからまた商品を戻して他を取り出すんだ。お前は俺

に聞く必要があるのか？

女性の買い物は疲れる。不毛なやり取りでストレス溜めるなら、俺は2度と一緒に行かないぞ。

「なあ、俺少し疲れたから外のベンチで休んでて良い？」

「ええ！？今日は一緒に最後まで付き合つてくれると、仰つたではありますか！？」

「俺は限界値を超えた。お願いですから休ませて」

セシリ亞の制止を振り切つて、店の外にあるベンチに座る。セシリ亞は、「まったくもう！！」といった感じで再び水着を選び始めた。ゆっくり外から店の中を覗くと、シャルロットが突然に一夏を試着室に連れ込んだのが見えた。

今朝のボーデヴィッヒも大胆だったが、あいつも感化されたのか？

「市隈、こんなところで何をしている？」

「あ、織斑先生。お疲れさんす」

声のした方へ顔を向けてみれば、織斑姉と山田先生がいた。ボーデヴィッヒと約束したあの口から、俺は織斑姉を織斑先生と呼び、悪態をつくのを止めている。織斑姉は最初に言われた時は驚いていたが、今はもう当たり前になっていた。

「まさか、女性用水着で臨海学校に参加する気か？」

「それこそまさかでしょう。俺は、単なる付き添いです。そして水着選びの不毛な会話に付き合わされて、今は休憩中ですよ」

遠巻きに、セシリ亞を手で指して答える。すると、教師の2人は俺に同情したような苦笑いをした。

「市隈、覚えておけ。女はな、別に男に選んで欲しいわけじゃない。結局は自分が気に入つたものが見つかるまでは、探し続けるんだ。良い勉強になつたな」

「良く覚えておきます。絶対に忘れないし、次から女性との買い物は『ごめんです』」

「それじゃ、私と山田先生もここに用があるんでな。失礼する」

「あい」

俺は軽く手を振つて見送つた。

そして、ことの事態に驚愕する。あれ！？一夏つて、まだシャルロットと試着室から出てきてないよな？

織斑姉が水着を選びながら、どんどん一夏たちの方へ近づいていく。これは、一人して終わつたな。俺は両手で合掌したあと、自動販売機に向かうために立ち上がつた。

――――――

今日は適度に動いたな。俺は歩きながら大きく欠伸をする。

一夏とシャルロットが山田先生に怒られてから、昼飯を食べて帰宅のためにアウトレットの出口に向かつて歩いていく。ついでに後をつけけて来ていた凰が合流していた。凰と一緒にだつたボーデヴィッヒは残つて何かしていくらしい。

「なあ、嘉久？」

ふいに一夏に声をかけられる。

「ん？」

「あの前方で手を振つてゐる人つて、お前を見ながらみたいだけ。
知り合いか？」

足が動かない。全身が凍りついたように歩みを止めた。

俺は頭の中で大混乱を始める。前方には、もう俺の前には3年間現
れないと約束した人間が立つていたからだつた。

…ニコル。何で、お前がここにいる…！

俺はできるだけ平静を装つて、混乱しながら口を開く。

「ああ、ありがとうな一夏。アレックスは俺の知り合いだ。悪い、
なかなか会う機会が無いから、ちょっと先に帰つてくれないか？」
「え、でしたら私、アレックスさんに挨拶をしたいのですが」

やめろ！絶対に駄目だ！！

「電車乗つて戻つたら良い時間だろ？早く帰宅した方が良いよ。今
度時間が会つたらみんなに紹介するからさ」

俺は、無理やりにみんなを促して帰らせようとする。殆どが納得し
たが、一人だけ例外が出た。

「喜久、汗かいてるよ？」

シャルロットに言われて氣づく。冷や汗がでるのかよ、そんなも
ん今の俺には麻痺しててわかんねえんだよ。

「ああ、ちょっと暑いよな今日つて
今は曇りでそんな暑くないよ?」

お前は、勘が鋭すぎんだよ!!

「だつてさつき、俺はホットコーヒー飲んでただろ?だから汗が出たのかもな。みんな悪いけど、俺ちょっと会つてくるから。待つ必要なんてないからな」

俺はみんなと別れて、ゆっくりと小走りに走つていく。目的の人物の前に止まると、そのアメリカ人は嬉しそうに手を振つた。

「やあ、サーフォ君。悪いが少し付き合つてくれるかな?」

30代の細身の金髪男性。サングラスにスーツを来たニコルは、俺に背を向けてゆっくりと歩き出した。

一夏たちと別れて、俺は別行動している。現在、カフェテリアで俺とテーブルを囲っているのは、俺がIS学園に入る原因を作った男だった。CIAの人間、ニコルニアノイは足を組みながら俺のほうを見ている。

「今日は天気も良いね。僕はね、スクーバダイビングが好きなんだよ。今が仕事中じやなきや、海に潜つてみたいね」

「俺はお前の趣味なんて聞いちゃいねえ」

俺は舌打ちをする。

「それにしても、サーフォ君はもてるみたいだね？座つたらどうだい、お嬢さん？そんなとこに立つってても、疲れるだけだろ」

俺は心臓が跳ねた感覚とともに、勢いよく後ろを振り向く。そこには、息を切らせているシャルルが立っていた。

馬鹿やろうが！！俺は先に帰れって言つたはずだぞ！！

「はつは、はあ。喜久！！」

俺は辺りをぐるりと見回す。一般人に偽装してゐる人間を見つける技術なんて、俺には持つてないんだ。目の前にいるクソ野郎の部下はどこに、どれだけの人数がこの場にいる？

くそーーー！

「喜久、大丈夫？」

「一夏たちはどうした？」

「乗り込んだ発射寸前の電車からぎりぎりでホームに飛び出したから、誰も追つてくることは出来ないよ。いるのは僕だけ」

「…わかった。シャルロット、俺の隣に来て座れ」

俺はシャルロットを座るように促して、隣に座らせた。そして、シャルロットが選択肢を間違えたことを伝える。

「シャルロット、お前の心臓の辺りを見る。ゆっくり見て、絶対に騒ぐな。俺がお前を絶対に守つてやるから安心してろ」

「え？」

シャルロットは自身の体に視線を走らせて行く。ゆっくり心臓辺りに持つていいくと、明らかに服装と関係ない小さな光が輝いている。そこには死神が鎌を振り下ろす寸前のように、赤いレーザーサイトの点が4つ程うつすらと浮かび上がっていた。シャルロットを狙っていることを認識させると、その斑点はすっと消滅した。

ISの待機状態のアクセサリーを持ち歩いていない俺と違つて、シャルロットはいつもそれを普段から持ち歩いている。ISは強い。が、それは展開後の話が前提になる。銃器類から放たれる弾丸のスピードとISの展開速度はどちらが速いか。それは、明らかに前者だ。

シャルロットは今の状況を理解したらしく、俺の顔を怯えたように覗き込んだ。それに対して俺は精一杯、笑い返してやる。

「今日は、帰つたら面白い話を聞かせてやるよ。だから、お前は怯えずにリラックスしてればいい」

「…わかった。僕は喜久を信じる」

シャルルは覚悟を決めて、自身の手を俺の手の上に被せて強く握つた。

「話を進めて良いかい？お嬢さんが変なことをしなければ、万事丸く収まるんだよ。この意味がわかるね？」

ニコルはコーヒーのカップを持つて中身を啜ると、サングラスを外して俺を見る。白人独特の青い目が俺を見据えた。

「この国では割と融通が効くことがあるんだ。今のは米軍基地の知り合いで借りたものなんだけどね。なかなか、良い演出だろ？」

嬉しそうに語ると、トントントントンと奴は指でテーブルを叩く。

「今日はね、サーフォ君にとっても良いお知らせを持ってきたんだよ。ところで、そのお嬢さんはどこまで君の事を知ってるのかな？」
「数少ない理解者だ、それで説明は足りんだろ。もったいぶつてないで、用件だけ言えよ。また、前みたいにあなたの部下を半殺しにするぞ」

俺が答えると、ニコルはピューライツとにやけながら口笛を吹く。余裕の態度で挑発すんじゃねえよ、クソ野郎が。

「そう熱^{いき}るなよ、少年。老けるのが早くなるぞ？そんなことしてたら、君の大事なものまで失う可能性が出て来るかもな。もしかしたら2秒後には、ここに少女の遺体が転がってるかもしない」
「…もう一言、余計なことを喋つてみろよ。そしたら、俺は迷わずお前の首を全力でへし折りに行ってやる」

ニコルの口から、身近な知り合いに危険性が出ることを示唆され、何かが切れそうになる。俺の感情は、既に破裂しかけていた。

「もつと、余裕を持たないと世の中渡つていけないぞ？じらすのも可哀想だしな、そろそろ教えてやる。軍の依頼主がな、CIAの幹部を突っつき始めた。君をね、いつまで探してんだけってな。要は、いつまでたつても出てこないサーフォ君の情報にお冠なんだよ。上司は君のことを報告するか迷つてるみたいなんでな。一応それを教えとしてやろうと思ったのさ。まあ結局のところ、CIAはIS学園との摩擦を望んじやしないから、3年は君を泳がせていたいところが正直な考えだ」

「どうだ良い情報だらう？」と、ニコルは手振りを交えながら俺に説明する。喉がごくりと鳴った。俺は自身が冷や汗と、極度の緊張に陥っていることに気づく。焦点がぼやける。ズッと椅子がずれる音がすると、ニコルが立ち上がっていたのに気づいた。

「今日はそれだけを伝えに来たんだよ。ここは僕の驕りだ。この後は、可愛いお嬢さんと楽しいデートを楽しんでくれ。それと、僕が君たちの視界から消えるまで、おかしな事はしない方が身のためだよ？それじゃあ、サーフォ君。良い休日を」

1万円札が一枚テーブルの上に置かれる。ニコルが歩き出すと、俺は奴が視界から消えるまでずっと見続けた。

ニコルが完全に見えなくなると、テーブルの上に赤い斑点が点滅するように現れる。それはモールス信号で言葉を伝えてきた。

ダンッ！！

俺は勢いよくテーブルを叩く。カップが宙に放られ、そのまま落下して割れる。周囲に居た客がみんな俺の方を向いた。

クソクソクソ！…なめやがつてえ！！！！

「喜久、落ち着いて」

背中に何か感触が当たる。俺は、シャルロットが後ろから抱きついたことに気づいた。

「僕は喜久に守られた。だからここに居るの」「だからどうした。俺は……無力だ。結局、誰も守れない。だから、母さんは死んだんだ」

大嫌いなISに頼つたって、搭乗時間には限度がある。エネルギーが切れたら、そこで終わり。俺の能力もリスクだらけの諸刃の剣だ。今、この場でシャルロットが死んでたかもしれない。下手をしたら、大切な姉さんも殺されてたかもしれない。視界が滲んでいく。堰を切った感情を止めることが出来ない。

シャルロットが、俺の体をさらに強く締め付けてくる。

「聞いて喜久。僕はね、ずっと迷つてたことがあるの。でも、決めたよ。僕は貴方に付いて行く。一人が辛いなら、僕が一緒に居てくれる。喜久は一人じゃないの、だから泣かなくて良い」

俺とシャルロッテは、じめの間から動いては無かった。

3・2 偽者への警告（後書き）

いつもお読みになつて下さつている皆様、大変にありがとうございます。昨日は知人と外で会い、お酒を4ヶ月振りに飲んだために気分が良くなりました。

そして、遊びながら2話ほど一気に書き上げました。

感想を書いてくださつている皆様の反応で、冒険してみますと一人の方に返信いたしましたので、シャルルを主人公側につけました。次の更新は間を空けまして、来年からにしたいと思います。宜しくお願いいたします。

それでは、皆様良いお年をお過げし下さい。ありがとうございました。

かはつ

アリシア！！

いつもの悲しげそうにしてる方が女が叫び声を上げる。なんだ、たかだか一人が死んだだけじゃないか。なんで、そんなに叫ぶ必要があるんだよ。

僕は、フレートを相手の頭に貫通させて突き刺していた。肉の焼け焦げる匂い、そしてびくびくと体が動いている。跳ねてる魚みたいだな。

氣持を悪し動きた
こんなのはいなしだ

腕を振ってフレーデから死体を抜くと、息をするのを止めた女が地上に落ちていく。雑魚キャラにはお似合いだ。やつぱり、やられたら落下一しなきやね。

『サー、フオ。あ…なたはああああ！…！…！』

残りの女が叫びながら突っ込んで来た。僕は愉快でしうがない。
足枷がやつと消えたんだ。だから、もう何にも縛られない。

「あははは、大丈夫だよ。お前も直ぐに、殺してやるから」
『ああああああああ！－！－』

僕はISTSを発動させて、直ぐに力を底上げした。ほら、そうすると相手が蚊みたいな動きになるんだ。瞬時加速で一気に加速して、
イグニッショングースト

女に突撃する。

相手はブレードを一刀流にして振り抜いてきた。僕もわざと、それに合わせて切り結ぶ。激しい光が、フルフェイスのマスク越しに見えた。

『ぐう！…』

「じゃあね」

僕は、それを弾き飛ばし、イグーザ・ショーン・ベースト瞬時加速で一気に間合いを詰めなおす。そしてそのまま相手の絶対防御を突破して、お腹にブレードを貫通させた。

「馬鹿だね、手の内が丸見えなんだよ。僕にブレードの使い方を教えたのは、アンタじゃないか」

腹を貫かれた相手が、ゆっくりと震えながらこいつの方に手を伸ばす。そして、僕の頬を一撫でした。

『サー、フオ。ごめん、なさい

「あああああ！…」

俺は叫び声を上げてベッドから飛び上がると、そのままトイレスに駆け込んだ。

「つう、げえー・つまー！」

今日食べた物が一気に逆流して、それを便器の中に流し込む。酸つ

ぱい味が口の中に広がった。

「つ、かは。はあ、はあ…」

吐ききつたのを確認してから、ゆっくり立ち上がり備え付けの洗面台で口の中をゆすぐ。やつとのことで落ち着くと、適当にその場でもたれかかった。

久しぶりに、最悪な夢だ。…いや、過去の業か。

「おー！大丈夫か喜久…！」

騒ぎに気づいた一夏が、慌ててトイレに駆け込んでくる。俺は軽く手を振つて答えた。

「大丈夫だよ。起こして悪かつた。ちょっと、悪い夢を見たんだ。ほんとにそれだけだから」

「本当に大丈夫なのか？」

お前は俺と違つて優しいな、一夏。

「ああ。だから俺のことは気にしないで、先に寝てくれ。俺も直ぐに寝るからさ」

一夏は落ち着いた俺の様子を見て、安心してからベッドへ戻つて行く。

きっと、一コルに会つたから、久しぶりに思い出したのかもしれない。

俺はもう一度眠るために、ゆっくりと立ち上がつた。

ニコルに忠告を受けたあの日から数日が経つた。俺はニコルが去った後で、感情が制御できなくなり。その場で心が折れそうになつたが、シャルロットの言葉に救われて何とか留まれた。

それは同時に、シャルロットから俺への好意の告白でもあった。来週から臨海学校が始まる。そんな数日前、俺はある場所から連絡が来て、現在その場所へ向かっていた。平日の真昼間なので、普段なら教室の机に座つて勉強している。が、外出許可をもらつて、3人で目的の場所へ向かつていた。

俺は今、一緒に付いてきた2人のせいで、頭を抱え始めている。それは、学園が出してくれているセダン車の後部座席で、件の2人が言い争つていたからだった。

「なぜ、シャルロットさんが一緒に付いて来るのです？ 貴方は、一夏さんがお好きだったのではないか？」

「セシリア、僕は一言もそんなことを言つた記憶はないよ。それに、授業を抜け出すのは良くないんじゃない？」

「それは、貴方が喜久さんに付いて行こうとするからです。貴方こそ、勉学に支障をきたすのではなくて？」

「一日くらい遅れても、僕は平気だよ。それに、セシリアよりも僕の方が座学は順位が上だよ？」

まるで、磁石の反発みたいだ。俺は困った顔の男性運転手に頭を下げ、サイドシートから顔を後部座席の方に向ける。

「…頼む。運転手の人気が苦笑いし続けてるから、そこらで勘弁してくれ」

織斑姉め、何で笑いながら2人の外出許可を出した。俺は、あんたの笑顔が悪魔に見えたぞ。この日、俺は初めて一夏の苦しみを違う意味で理解した。

女性は三人揃えば姦しいなんて言葉がある。「冗談じゃない、2人になった時点でものすごい」いうるさい。そして、俺の言葉は聞き入れられることはなく、既にヒートアップしていたセシリ亞が噛み付いてくる。

「だいたい！あの電車で、シャルロットさんが飛び降りていくなんて。くう、まさかそんな手を使つだなんて…」

セシリ亞が、やられたと言つた感じで田つきが鋭くなつた。
いや、それで正解なんだよセシリ亞。あの時は、絶対に来ちゃいけなかつたんだ。だから、お前はそれで良かつたんだよ。見れば、俺と同じようにシャルロットも少し表情が硬くなつていた。

「とにかく、私は喜久さんに付いていきます。これ以上、シャルロットさんに差を付けられては堪りません。一夏さんと違つて、喜久さんは朴念仁ではありませんから。ですが、ほいほいと女性になびき易いタイプでもありませんし」

おいおい、ヒートアップしそぎだ。しかし、セシリ亞って随分ストレートに言つようになつたな。

そして、セシリ亞が溜息を一つ吐きながら呟く。

「…はあ。まあ喜久さんが、シャルロットさんを完全に受け入れたわけではなさうなので。それについては安心しましたわ

「うう、」

あ、シャルロットが歯軋りした。頼むから、お前も冷静になつてくれ

れ。だいたい、何で俺が鎮める側に徹さなきやいけないんだ。しかし、愚痴を言つても始まらない。何とか機嫌を良くして、怒れる人を止めよう。

「なあ、車が目的地に着いたら何か飲み物でも飲もう。だから、静かにしてくれ」

「喜久、安易に物で釣つても良い年を僕はとうに通過してるよ」

「喜久さん、私はそんなに安い女ではありません」

裏目に出たよ。俺は、女性の扱い方なんて知らねえんだよ。説得する手段が思いつかず、俺はうな垂れながら口を閉ざした。ああ、女性の説明書みたいなのがあれば楽なのに。

「大変ですね。まあ、まだ若いんですから、青春は大事ですよ」

にこやかに運転手の人声をかけてくれる。俺は、人の良心に触れて心が癒された。

盛大に伸びと欠伸をする。それを見ていたセシリニアとシャルロットが、ここになつて気になつていていたらしいことを口にしてきた。

「しかし喜久さん、よくISUを受け入れる気になりましたわね」

「そうだね。喜久、どうして承諾したの？」

「うん？ ああ、必要になつたんだよ。それだけ」

ニコルとの接触で、俺はそれまでの考え方を変えた。ISUが嫌いだと駄々を捏ねる状態は、終わつたんだ。これからは力をつけなきやいけないし、独自のコネによるパイプも増やすべきだ。だから、自分の我慢を捨てて、利用できるものは最大限活かしきつてかなきやならない。俺がそんなことを考えていると、運転手の人が声をかけてきた。

「皆さん、そろそろ半縄技術研究所ですから。降りる用意をお願いします」

運転手の人に言われて、窓越しに外を見る。何も無い平坦な景色に、一際大きい施設が見えた。

「よつゝお出で下わつました。お待ちしてましたよ」

両手を広げて学園へ訪ねてきた谷中が研究所の玄関で俺たち三人を迎える。

「これはまた、可愛いお嬢さん方ですね。市隈さん、『学友の方ですか?』

「ええ、そうなります。僕自身の浅はかな知識では限界がありますので、身近な聰^{さと}しい友人に貴重な時間を割いて頂いて来てもらいました。ご迷惑でしたでしょうか?」

俺の敬語を横で見ていたセシリ亞とシャルロットが、驚いて言葉を失っていた。なんで、そんなに珍獸を見たような反応なんだよ。

「喜久、なんかその言葉遣い気持ち悪い」

「いつもの喜久さんではありますんわね。まるで、別人ですわ」

らしくないのは、重々承知してるよ。それにしてもシャルロット、気持ち悪いってなんだ。セシリ亞、別人じゃない俺はどんな人間なんだ。だいたい、相手は企業なんだから敬語は当たり前だろ。

「ははは、なかなか面白い」学友をお持ちですね。これは両手にバラで、棘もあるということでしょうか。市隈さん、敬語は必要ありませんよ。それは、大人になつてからで充分なことですから。それ

と、他の方が御参加されても特に問題はありません。見せてはいけない部屋が幾つかありますが、その部分に触れなければ平気ですか

ら

「申し訳ありません。お厚いご配慮、感謝いたします。ここからはお言葉に甘えさせて頂き、敬語を控えさせていただきますね。それじゃあセシリア、シャルロット。谷中さんの許可が下りたから、中に入らせてもらいますか」

俺はセシリアとシャルロットを促しす。谷中は俺たちに背を向けると入り口から奥へ進んでいく。俺たちも、谷中についていくよつてにして先へ進む。

「やつぱり、喜久はこっちの方が良いね」

「そうですね。それにしても、どうしてそのような言葉遣いを覚えられたのですか？」

セシリアに言われて、俺は昔のことを思い出し少し笑いそうになつた。あの頃は何もわからなかつたから、俺はよく暴れてたな。

「俺には、一人姉がいるんだ。血は繋がつてないけどな。それで、その人に厳しく教え込まれたんだ。なんでも、人には礼節を尽くせ、自分の振舞いで全てが決まるんだって口を酸っぱくして言われたよ。まあ、俺にはそんなの無理だからな」

「へえ、喜久と違つて随分立派な人だね」

「喜久さんのお姉様には、是非ともお会いしてみたいですね」

「でも、なんでも学ぶべきだとか言つて、酒と煙草を12の俺に教

う。

2人はえらく感動している。うーん、確かに考え方は良いんだけど

えたよ」

「…それは、違うと思つ」

「…随分と変わつた方なのですね」

これには、流石に2人とも引いている。

「まあ、人は良くも悪くもだからなあ。それでも、俺を大事に育ててくれたのには変わらないよ」

俺は笑いながら足を進めていく。しかし、姉さんは今頃どこで仕事をしてるんだろうな。

――――

「あら、来たのね。この子が市隈君?驚いた、本当に男の子なのね」

谷中に案内されて辿りついた大きい間取りの部屋で、丸い銀縁眼鏡に長髪を適当に束ねた女性が俺たちを出迎えた。歳は30後半くらいだろうか?

「やあ、 笥崎主任。」注文を届けに来たよ。彼が市隈さんで、他の子は彼のご学友だ。宜しく頼むよ

「ええ、了解しました。それじゃ、さっさとやつてしまいましょう。市隈君、そこにあるエスに乗つてもらえるかしら?」

え、いきなりかよ?テストも何もなしで?俺は、いきなり乗り込めと言われて困惑した。

笥崎が指した方を向くと、塗装が真っ黒なエスが鎮座している。し

かも、角張ったラインが殆ど無く、ものすいべスマートな形をしていた。

色も、黒と青のラインが入った一色しかない。シャルロットとセシリ亞は、それを興味心身で見ている。

「テストはしないんですか？」

「あの子に乗ればそれで解るわよ。制服のままで構わないから、とりあえず乗ってくれるかしら。起動後の安定が第一条件だから、先ずはそれをクリアしてくれれば良いわ」

「どういう意味だ？」

俺はとりあえず、HSの足部分に自分の足を差し込む。すると、笹崎がフルフェイスのマスクみたいな物を俺に渡してきた。

俺は、3年前を思い出して嫌な顔をしそうになる。

「これを被つてくれないかしら？ 脳波の拡張とこの子の会話に必要なよ

「会話？」

「そ、会話よ。じゃ、被つてみて

「はあ」

意味もわからず、俺はそのまま手渡されたマスクを被る。すると、いきなりHSが起動して、俺の脇を装甲が囲い込みを始めた。

視界は仮想現実の世界が出来上がり、マスクを被っていない状態と同じようになる。

【あなたは だれ】

「はあ！？」

どこからともなく聞こえてきた子供の合成音に、俺は思わず素つ頓

狂な声を上げた。そして、諦めのよくな声が呴かれる。

【わたしは あなたとは わかりあえない。わたしは あなたなんか いらない】

「おいおい、そりやどういう意味だよー！」

俺が怒鳴つたせいだろ？ シャルロットとセシリアが俺の方へ寄つてきた。笹崎と谷中は笑つてゐる。

「どうしたの、喜久？」

「喜久さん、大丈夫ですか！？」

「いや、わりい。なんかこのHISが喋つてるから、戸惑つたんだ」

俺に言われて、セシリアとシャルロットもさうに困惑する。

「喜久、どこか頭が痛むの？ おかしいのはもともとだけど、どこか悪化した？」

「幻聴がするなら、直ぐに病院へ行くべきです。性格以外は良くなる筈ですわ」

「おまえら…。2人揃つて、俺に喧嘩売つてのか？ 俺は、怒りを抑えながら言葉を続けた。

「マスクの中の耳に当たる部分から、子供の合成音が聞こえたんだよ」

「その子は補助プログラムの人HAIYO。その子がないと、このHISは動かないのよ。あなたの脳波を補助するのに必要な。難儀なことだけど、勝手に自己進化しすぎて好き嫌いができるみたい。その子に気に入られることが、このHISに乗るための第一条件よ」「なんだよそれ！？ そんなん、聞いたことねえよ！…」

笹崎は「他のテストパイロットは、全部Jの子に弾かれたんだけどね」と、笑いながら俺に話している。

おこおこ、俺にどうしようってんだよ?だいたい、人を選ぶにしたつて程があるだろ。Jの会社は、絶対に金儲けの量産化なんて考えてないな…。

【あなたは ひつよう ない いますぐ わたしから おつと】
「…」のやうに。今まで言つなかつて、前の首根つり掴んでやるよ

苛立つた俺は今まで嫌つっていたISTを発動をせると、無理やりクソA.Iの主導権を奪つことにした。すると、今度はH.I.Tに反応したクソA.Iが不思議そづな声を上げる。

【なにこれ ちがう いまままで おなじ ひとたちじや ない】
「やうやうだらうよ。だから、主導権をいつかにせよ」

【しゃどうけん あげない】
「くそつたれが」

もつと同調率を上げて、JのクソA.Iの意識を捻じ伏せるか。そう考へていたら、A.Iが予想外の意見を俺に伝えてきた。

【でも わたしが あなたを れわえて あげる】
「…支えるね」

随分上から目線じゃねーかよ。A.Iの癖に生意氣言つやがつて。まあ、これから長く付き合つてになるかもしれないからな。少しは融通してやるか。

「しゃーない、妥協してやるよ」

俺は首を軽く回すと、大事なことを聞くことにした。

「おー」

【なに】

「俺は、呼び方は喜久でいい。お前の名前は？」

【ない】

「はあ？」

【なまえ なんて ない】

俺はすぐさま笹崎の方へ向く。

「笹崎さん、ここがお前無いらしきんだけど。なんか、愛称とかあんすか？」

「あら、気に入られたの？ もめどりが。この子の名前だナビ、あなたが付けてあげたら。その子にそんなものなんて、もともと決められてないからね」

え、俺が決めるのかよ。これは、なんて適當な会社なんだ。おかしいぞ、絶対に。めんどくせーな、こんなのISの初期設定でやつたことねえよ。しうつがなく、俺はAIに喋りかかる。

「お前の名前は何が良いんだ？自分で決めるよ」

【おもしろかない よしひさが きめて】

うぜー。なんだこの決定力の無いAIは。俺は、思わず溜息を吐いた。
これじゃ、ここは本当に子供じやねえか。しうつがないな、まつたく。

「おー。なんだこの決定力の無いAIは。俺は、思わず溜息を吐いた。
これじゃ、ここは本当に子供じやねえか。しうつがないな、まつたく。

「変更はしないぞ。自分で決めなかつたお前が悪いんだからな。お前の名前は、今からティアーニだ」

俺は、3年ぶりに懐かしい名前を呟いた。大事な名前だ。俺の相方になるんだから、この名前を無断で使つても、きっとあの人は笑つて許してくれる筈だ。

【わたしは　ていあーに　にんしき　した】
「宜しくな、ティアーニ」

コンコンとマスクを叩かれた。見れば、笠崎が指示を出せうとしている。

「これで、この子はあなたのものよ。大事に使つてあげなさい」「わかりました。そういうばこのヒロはなんていう名前なんですか？」

「「HSの名前？」このヒロはブラックペタルよ。黒い花びらってとこかしら」

花びらね。削り落としたスマートなボディに、そんなのついてないけどな。

「それじゃ、その他の説明をするけど先に進んでいいかしら？」
「はい、お願ひします」

俺は待機状態から機体を立たせて、次の指示を仰いだ。

3・4 黒イ花ノ産声（後書き）

31日に上げようと思っていたのですが、思ったよりも早く主人公のIISのコンセプトが固まりました。ですので、予告していたより少し早く投稿させていただきます。予定日を変えてしまって、申し訳ありません。

「喜久さん、起きて下さい。ほら、海が見えますよー。」

「…うん? ああ、そろそろ着くのか」

俺がアイマスクをつけて寝ていると、隣に座っていたセシリ亞が嬉しそうに体を揺すつてきた。

アイマスクを外しながら、体をゆっくり起して窓の外を覗く。すると、晴天の青より濃い海の色が視界内に入る。首に手を当てるといチヨーカーのようなものが感触として指に引っかかった。

擦つて確かめると先週、半縄から受け渡されたIS待機状態のアクセサリーがあることが確認できる。俺が視線をそらすと、少し前方の座席で恨みがましくこっちを見ているシャルロットがいた。

「喜久さん、何か飲まれません? 私、紅茶を入れてきましたの」「いや、勘弁してください。俺はもう限界です」

遡ること、朝のバス乗車の時だ。俺の隣を座る女子に席を替わってくれと、セシリ亞とシャルロットが言い出した。言われた女子は素直に従つたのだが、その後でどちらが座るのかで口論になり始める。俺は面倒臭いので、2人を隣同士で座らせよつとした。

「喜久は、僕の横に座りたくないの! ?」

「喜久さん、そんなに私の隣がお嫌なのですか! ?」

が、今度は俺がものすごい勢いで攻撃され始める。しょうがないの

で、俺は織斑姉に助けを求めたのだが…。

「織斑先生。セシリ亞とシャルロットが、席を決められずに困っているみたいですね」

「だったらお前が選んでやつてはどうだ。本人たちもそれなら納得するんじゃないのか?」

余計に油を注がれただけに終わった。しうがなく、駄目元で今度は弟の方へ縋つてみる。

「だったら、セシリ亞とシャルロットの間に挟まれるようにな、一番奥の5人席を譲つてもらえれば良いんじゃないのか?」

全然的外れな回答をもらつた。一夏、お前がやつてみるや。そんなので間に挟まられたら、俺の胃が縮んでしまうわ。だいたい俺がお前の横で納まれば、こんな問題にならなかつたんだよ…!
ほとほと困り果て、結局2人にはじょんけんで公平に決めてもらつた。

それで今の状態だが、セシリ亞が何か俺にするたびにシャルロットの目が光を失つていく。乾いた笑いが怖い。最終手段として、俺は居眠りを決め込むことにして現在に至る。

「喜久、お前は向こうに着いたら泳ぐのか?」

「いんや。俺は部屋で読書でもして、ゆづくつしてるよ」

少し前の席に座つてる一夏に声をかけられて、俺は適当に答える。

「ええ!? そんな、せつかく海に来たのですから泳ぐべきです!」

「読みかけの小説があるんだよ。俺はそれを読んでたいんだ」

セシリ亞が俺に非難の声を上げた。

すると、前方に座っていたシャルロットも抗議の声を上げる。

「喜久、セシリ亞の言つてゐる通り外に出よつよ！滅多に無い機会
だし、もつたいたいよ」

「うーん。じゃあ、少し考えてみるよ」

相部屋になるだらう一夏は、どうせ海に泳ぎに行くだらう。俺はゆ
つくり本でも読みながら、だらりと寛ぎたい。俺が悩んでいると、
織斑姉が席から立ち上がる。

「そろそろ田的でに着く。全員ちゃんと席に座れ」

レクリエーションのような騒ぎが收まり、バスの中は静かになった。
俺は再び外を見ながら、盛大に欠伸をした。

—＼—／

「うわー！一年生を受け持つとこの場所に来ますが、やつぱり部屋
が広いですね。どうですか、市隈君？」

目の前で、自分の泊まる部屋に喜んで入る山田先生がいる。旅館に
着いて部屋に向かつて到着してみれば、俺以外は部屋に居なかつた。
そして、職員同士の打ち合わせが終わつたらしい山田先生が、普通
に部屋に入ってきたのだ。

俺は、一番苦手な人間を相部屋にされたために、現在とても苦惱し
ている。この人は俺が打てば倒れ、邪なことをすれば泣き、軽い冗
談を全部受け入れてしまつ。まさに一番相性の悪い人間だった。

駄目だ、こままだと20歳になる前に禿げるかもしれない…。
織斑姉がこの配置を割り当てたのだろうが、本当に生徒のことを細かく見てやがる。ありがたいことなのだが、これは酷い。俺は、てっきり一夏と同室だと思っていたのに。これじゃあ一夏たちと買い物に行つた日に、隠れて自販機で買つた煙草が吸えないじゃないかよ。

「山田先生、なんで俺は一夏と一緒に部屋じゃないんですか？」

「それはですね、市隈君たち2人になると、女子が夜中に押しかけてくると思ったからです。なので、市隈君は私で、織斑君は織斑先生にしました。それに、織斑先生の方はもともと家族ですね」

まあ、一夏が織斑姉と一緒に部屋にあのボーデヴィッシュでも、おいでそれと部屋には近づけないだろうな。しかし、あなたは俺と一緒に平気なのかよ…。

「山田先生は俺と一緒に平気なの？」

「市隈君は、女性に対し優しく接していくのを知っていますから。その辺に関しては、心配してませんよ。今回の部屋割りに関しては、私が織斑先生に提案したんです」

この部屋割り決めたのあんたかよ…！

俺は思わず脱力して、その場で大の字になつた。

ふいに、山田先生が私物らしきものをもつて、バスルームに入つていぐ。ああ、水着に着替えるのね。

バスルームの中から山田先生が話し掛けてくる。

「市隈君は、泳ぎに行かないんですか？」
「誘われてはいるんですけど、行く気がしませんね」

俺は天井を見上げながら、手をぶらつかせて答える。山田先生は着替えを終えると、バスルームから出てきて水着の格好をしていた。胸が大きいのがわかるが、指摘すると怒られそうだ。

「市隈君が、最後に海水浴に行つたのはいつですか？」

「海になら、この前ＩＳを展開している状態で投げ込まれました。

正直、死ぬかと思いましたよ」

無人機ＩＳとの戦闘を思い出しながらいふと、山田先生も意味がわかつたらしく顔が引きつった。

「はは…。それは、災難でした。でも、せっかくですから楽しまなきゃ損ですよ？」

「もともと、もやしつ子なんで。山田先生は、先に行つてください。

俺は、気が向いたら行きますから」

山田先生は少し考えた後で俺の自主性を尊重してくれたらしく、軽く手を振つて部屋から出ていった。

すると、1分も経たない内に慌しいノック音がする。俺は、その行為を誰がしたのか解つてているためにげんなりした。頼む、ゆっくりさせてくれ。

「喜久、早く外に行こうよ！」

「喜久さん、居留守は通じませんわよー！」

く、居留守しようと思つてたのに。女の勘なんて大嫌いだ。俺はしょがなく立ち上がり、廊下側に繋がるドアを開けた。ドアを開ければ、水着姿のシャルロットとセシリ亞がいる。

「まだ、着替えてなかつたのですか！？」

「喜久、遅いよ！待ってるから早くして！」

「おいおい、なんで行く」ことが決定してんだよ。
…はあ、しょうがない。俺は、根負けして読書を諦めることにした。

「降参だ、着替えてくるよ。一回閉めるぞ？」

そう言いつと、2人はとても嬉しそうな顔に変わった。

—＼—／

俺は、水着に着替えて軽く上を羽織ると、学園が貸切にしている砂浜に歩み出る。すると、そこは水着を着た女子一色で埋め尽くされていた。

俺は思わずその光景に引いてしまい、一步ほど後退する。なんだ、この中学時代に友達の家で見たAVのネタみたいのは…。しかも、規模がおかしい。

少し眺めてみると、一夏が普通にその集団の中を平然と歩いている。すげーな、あいつ。

俺は水着の女子の一群の中に、平氣でいる一夏を少し尊敬した。

「喜久さん、行きますわよ！」

「喜久！なに立ち止まつてゐのー？」

セシリアとシャルロットが、遅れている俺を促す。おいおい、俺にあの群衆の中に混じれつてのか…。

俺が戸惑っていると、焦れた一人が戻ってきて俺の両手を片方ずつ引っ張り始めた。

「ほらほら、突つ立つてないで早く行くよ、喜久！」

「喜久さん、何をしているのです！」

「わかつたから！そんなに引っ張んないでくれ……！」

俺はそのまま引っ張られていき、最終的に誰かが立てたらしきビーチパラソルの下まで来た。

周りにいた、全ての女子が俺の方を向く。これじゃ、俺は異物扱いだな。

一夏のほうを見れば、奴は凰を肩車している。そして、凰に変われと言つて他の女子たちが殺到していた。

「喜久さん、お願ひがあるのですが

「あん？」

セシリ亞の声がして呼ばれた方を向くと、奴は水着の方を紐解いて背中だけになりながら寝そべつている。なあ、セシリ亞。その手に持つているサンオイルはなんだ？

「オイルを塗つていただけませんか？」

「俺が塗ると、塗らなくていいところまで塗ることになるだ？」

俺はそんなの「めんなので、少し脅すつもりでセシリ亞に答えた。すると、奴は頬を染ながら呟く。

「……私は、それでも宜しくてよ」

「阿呆か、お前は……」

俺は、げんなりしながら答える。すると、俺の横で見ていたシャルロットが笑顔で答えた。

「じゃあセシリア、僕が塗つてあげるよ」

そう言ひてセシリアからサンオイルを引つ手繰り、一気に塗り始める。…主に脇へ集中して。

俺は呆れながら一步下がり、様子を見守ることにした。

「あはは、あは、あははははは…やめ、あは、辞めて下さ…シャルロットさん…！」

耐え切れなくなつたセシリアが、怒りと共に立ち上がり金切り声で叫ぶ。俺は、びっくりしてセシリアに声を上げた。

「おい、セシリア！上は隠せ…！」

「え？ あやああああ…！」

今度は一拍置いて、ものすゞ悲鳴を上げ始める。もうひとと、上が丸見えた。

セシリアが突発的に行つた、HSの部分展開した腕が俺に迫つて来る。おい！なんで俺なんだよ…！

俺は咄嗟にバックステップを踏んで、それをきりきり避けきつた。すると、セシリアは標的を変えたらしく、今度は胸を抑えながらシャルロットの方を向く。それでも、目付きが怖い。

「ウフフッ。シャルロットさん、あなたにもオイルを塗つてさしあげましょ。だから今すぐ、こちらに来て下さいな？」

「僕は遠慮しておくよ。それより、喜久にもう一度オイルを塗つてもうひとつ頼んでみたら？」

シャルロット！お前怖いからって、俺にセシリアを押し付けんなよ

!!

「あ、織斑先生だ」

俺が適当に言うと、2人は俺の顔が向いている方へ即座に顔を動かす。そして、その隙に俺は一夏の方へ全速力で駆け出した。後ろから「喜久さん!!」と叫ばれ、さらに「喜久の裏切り者!!」と断末魔が聞こえた。

必死の思いで一夏のところまで辿り着く。

「一夏、助けてくれ!
は? どうしたんだよ、喜久?」

俺が指差した方を一夏が見る。そこには怒り狂ったセシリ亞と、それから逃げるシャルロットがいた。もちろん、二人は俺の方に向かつて走つてきている。

「喜久、お前何したんだよ?
俺は何もしていない。シャルロットが、勝手に暴走したんだ」

わけがわからないと言つた感じで、一夏が俺の方を見た。

「何をしている?
あ、織斑先生。向こうから走つてくる一人組みを何とかして下さ
い」

近くにいた織斑姉に声をかけられて、俺はセシリ亞とシャルロットを見る。織斑姉は走つてくる2人と俺を交互に見比べた。

「市隈、何事も経験だ。両手に花じゃないか、まあ頑張れ」

うわ、こいつ今の状況が面倒臭くて俺を見捨てやがった！！
次いで、一夏が俺の肩に手を置いてきた。

「俺には無理だ。頑張れ、喜久」

ひでえ。姉弟揃って、薄情な奴らだ。

そう思つていると、後ろからものすごい勢いでシャルロットが俺を横切つて駆け抜けていく。そして、それに一足遅れで気いた俺は、肩を何かに思い切り掴まれた。

きつと、油を差してない音がしたに違いない。ギギギという音がするような感じで、俺はゆっくりと後ろを向いた。

「喜久さん。突然逃げだすといつのは、酷いのではなくて？」

「俺は何もやってない」

「覚悟は良いですか？」

「無理です」

次の瞬間、セシリ亞のボディブローが俺の鳩尾に決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733z/>

IS _ロスト_ナンバリング

2011年12月27日21時53分発行